

一村ノ共有地ニ係ル投票ニアラスシテ全ク右論地ヲ賣リ度念慮ヨリ爲シタルモノナル旨  
辯解スレモ條理ニ適セサル申立ニテ固ヨリ信ヲ置クニ足ラサルモノトス然レハ右荒地ハ  
被上告村申立ノ如ク一村共有地ナルヲ便宜上上告人ノ名受ニ爲シ置タルモノト推測シ得  
ヘケレハ上告乙號敷證ハ表面上ノ手續ヲ爲シタルモノニテ被上告村ニ對シ眞所有主タル  
ノ證憑ト爲スノ力ナシトス依テ原裁判所カ右甲第三號證ニ據リ荒地三反七畝十五歩ハ一  
村共有地ナル旨判定シタルハ相當ナリトス

第二條

論地ノ内宅地八畝九歩ノ地ハ荒地三反七畝十五歩ノ地ト同シク原裁判所ニ於テ原被雙方  
共各證據ヲ提供シ其所有如何ヲ爭フタルモノナリ故ニ原裁判所ハ其證據ノ強弱如何ヲ審  
按シ其判旨ヲ明示スヘキ等ナルニ原判文ニハ右宅地ニ關シ何タル説明モナク單ニ「甲第  
四號甲第十一號乃至十四號ハ與リテカアル憑據ト認メ得ヘキモノトス」ト示シタル迄ニ  
テ理由ノ不備ナル裁判ナリトス

判決

前第二條ノ理由ニ付東京上等裁判所ノ裁判ヲ破毀シ名古屋控訴裁判所ニ移スニ依リ同裁判  
所ノ裁判ヲ受クヘキモノナリ

但上告入費ハ被上告者ヨリ償却スヘシ

第五百七十九號

○立木賣買差押上告ノ判文(明治十五年七月五日上告  
全十五年十二月廿三日申渡)

栃木縣下野國下都賀郡尻内村平

民

岡 熊 七

上告人

東京府南紺屋町十二番地寄留三

重縣平民

拜 郷 泰 高

右代人

栃木縣下野國下都賀郡尻内村平

民

渡 邊 宇 内

被上告人

上告要領

本訴ハ乙第一號證ニ記載スル植木ノ二字ハ植付タル木トノ謂ニシテ契約ノ當初植付ケタ  
ル杉樹ノミヲ指的シタルモノナレハ論山ノ立木ヲ總稱シタルモノニ非ルナリ既ニ上告者  
ハ原裁判所へ上申シタル通り明治三年中杉樹ヲ除キ他ノ樹木ヲ伐採シ右賣拂代價ヲ以本  
訴論山ノ質代金ノ利子ニ充テタルモ此場合ニ於テ被上告者カ異議ナカリシハ則チ他ノ樹  
木ハ被上告人へ賣渡シタルモノニ非ルノ證憑ナリ(利金受取證ハ曾テ火災ニ罹リ現存セズ)然ルニ原裁判所  
ハ此等ノ事實ヲ措テ問ハス乙第一號證植木ノ文字ハ單ニ樹木ヲ總稱シタルモノト解釋ヲ  
下シ植木ト記載シタル旨趣ニ注意セラレス却テ上告者カ契約ヲ粗漏ナリトシ「十五ヶ年  
後ニ効力ヲ及ホス契約ナルニ木名ヲ明記セス其木數モ書載ナキ」ト判決ヲ與ヘラレタ

ルハ契約ヲ誤解シタル不當ノ裁判ナリト思考ス

辯明

上告人ニ於テ乙第一號證ニ植木トアルハ該契約ヲナシタル際植付タル杉木ヲ指シタルモノニテ山中重ナル樹木ヲ總稱セシニアラサル旨申立レ且該證書ニ木名員數等モ記載ナク且杉木ヲ植付タルトノ證ナキ上ハ原裁判所カ(被告ノ所謂山地ニ生スル一切ノ重ナル樹木(下草等薪トナス)トノ解釋ハ事理ニ適シタルモノトス)ト認定シタルハ相當ナリトス

明治三年中現在杉木ヲ除キ其他ノ樹木ヲ伐採シ右代價ヲ以テ利金ニ宛タルニ被上告人カ故障ナキハ其他ノ樹木ヲ賣却セサル明證ナル旨申立レ且上告人カ該樹木ヲ伐採シタルトノ陳述ハ更ニ可據ノ證左ナシ

判決

前條ノ筋合ナルヲ以テ東京控訴裁判所ノ裁判ハ破毀スヘキ理由ナシトス  
第五百八十號

○小作米金契約履行上告ノ判文(明治十五年八月廿一日上告  
全十五年十二月廿三日申渡)

千葉縣下總國印旛郡大森村字中

ノ口新田二百四番地平民

上告人

石井七郎平

東京府京橋區出雲町三番地

右代人

松本善五郎

千葉縣下總國印旛郡大森村七十

七番地平民

被上告人

宮島宗十郎

小作米金契約履行ノ控訴東京裁判所ノ裁判ヲ不當ナリトシ上告シテ破毀ヲ求ムル要領左ノ如シ

第一條 甲第一號證ノ契約疎漏ニシテ其文章義理ヲ通セサルヨリ爰ニ推定ノ場合ニ於テハ第一天然ノ道理ニ依リ推測ヲ下スヘキハ法理ノ然ラシムル處ナリ其天然ノ道理ト云フハ中ノ口新田ニ四十五人同種ノ小作人アリ其内原告一人ノミ被告ヨリ特別増額ノ責ニ任スヘキ條理ナキモノ是ナリ第二事實ニ依リ推測ヲ下スヘキハ民權保護ノ欠クヘカラサル處ナリ其事實ト云フハ乙第二號證乙第十六號證乙第廿一號證其他數證ヲ照合スレハ本訴ノ土地小作米金ハ増額スヘカラサル特約ナルヲ原告獨リ同種同様同義務者四十五人ノ小作人ニ先達テ自ラ不利益ノ増額ヲ承諾スヘキ謂レナキモノ是ナリ然ハ其道理由ト事實ニ依リ推測ヲ下ス時ハ其甲第一號證ノ精神則當新田平準云々等級ニ分賦増額帳簿整頓トアルハ中ノ口新田一般平準等級ニ分賦増額ヲ承諾シタル帳簿整頓ヲ期限トセシモノニ他ナシ然ルヲ原裁判所ハ其計算ノミノ帳簿整頓ヲ増額ノ期限ナリト推測セラレタルハ法理ニモ事實ニモ違反スル不當ノ裁判ト思考ス

第二條 今般當新田平準等級ニ分賦増額可仕候且帳簿整頓ノ上トアルノミニシテ其帳簿

ハ平準ノ計算スル帳簿ナルヤ又當新田平準増額スル帳簿ナルヤ表面見ルヘキ處ナキヲ以テ心證ノ推測ヲ要スルモノナレハ果シテ道理ト事實ニ依ルヘキモノト云ハサルヲ得ス然ルチ其道理ト事實ニ依ラスシテ推測ヲ下タサレタルハ不當ノ裁判ト思考ス

第三條 等級ニ分賦増額ノ計算ハ當新田一般ノ等級帳簿ヲ整頓セサレハ其算定ヲ得サルモノ歟又原告一人チシテ其算定ヲ得ヘキモノ歟此論點ニ於テハ果シテ原告一人チシテ其算定ヲ得ヘキモノナリ何トナレハ等級ハ元來定マリタルモノニシテ之チ分賦スレハ其増額ヲ得ルモノナレハナリ然ラハ其當新田平準アルハ中ノ口新田一般算定ヲ得ルノ平準ニアラスシテ中ノ口新田一般増額ヲ得ヘキノ平準ナルヲ明ナリ加之其計算ノミニ係ルモノナレハ帳簿ト唱フルニ及ハス計算書ト稱スヘキハ理ノ當然ナルノミナラス其計算ノミナレハ委曲ノ結納ヲ成スニ及ハス其當時直チニ計算可相成モノナリ然ルチ原裁判所ハ其平準ノ主義タル云々各平均法ヲ設ケタルモノト誤解セラレタルハ審理不盡ノ裁判ト思考ス

第四條 原告ハ原裁判所ニ於テ前條ノ如ク甲第一號證ニ對スル反對ノ數證ヲ掲ケ照合證ヲ誘引シ實際ノ情況ヲ伸張セシモ原裁判所ハ單ニ甲第一號證ノミニ固結シ推測ヲ下シ右反對證照合證實際ノ情況等ニ對シ可否ノ裁判ヲ與ヘラレサルハ審理不盡ノ裁判ト思考ス

明治十五年十一月十五日呈出シタル上告補欠書ノ要旨左ノ如シ

第一 控訴裁判言渡書ノ末文ヨリ(前文)略ス(然其平準當主義タル宅地ハ總テ一反ニ付

一ヶ年三圓田方ハ同斷七斗五升畑方ハ同斷二圓ト各平均法ヲ設ケタルモノニシテ之チ等級ノ差別ニ關セス分賦増額スヘキモノナレハ)云々トアリ抑控訴第一號證ノ精神タル宅地ハ一反ニ付一ヶ年金三圓田方ハ一反ニ付米七斗五升畑方ハ一反ニ付一ヶ年金二圓ト用途トシテ之レヲ改正ノ各等級ニ平準分賦スヘキヲ明指シタルモノニシテ原告カ要求ノ點モ此目的ニ外ナラス即チ控訴甲第二號證及六月廿日附ノ問答書等ニ明瞭ナリ被告モ亦タ此點ニ於テハ同様ナルヲ以テ控訴番外第一號比例等ヲ揭示シテ等級ニ分賦スヘキヲ論述シタリ凡ソ法官タルモノハ各詞訟人カ要ムル處ノ點ニ對シ理非曲直チ判別セラル、モノニシテ苟モ自己ノ臆測ヲ以テ詞訟人ノ思想外ニ涉ル審問チナスハ法ノ禁スル處ナリ然ルニ控訴廳ハ前述ノ如ク原被告カ陳述ノ範圍外ニ踰越シテ等級ノ差別ニ關セス分賦増額スヘキモノト判旨ヲ下サレタルハ實ニ裁判ノ法式ニ違ヒタル不法ノ裁判ト云ハサルヲ得ス而シテ原告即チ被上告人ハ該執行ヲ始審廳ニ願フ場合ニ於テモ猶前旨ニ因テ請求シ八月四日附チ以テ等級ニ分賦ノ明細書ヲ呈シタリ然レモ始審廳ノ法官ハ控訴廳ノ判旨ニ於ケル等級ニ分賦スヘキトノ判旨ニ非ラスト說明セラレタルヲ以テ原告(即チ被上告人)ハ更ニ九月十五日附チ以テ其要求ノ點ヲ變更シ反別ニノミ割賦シテ其金額ヲ更正シタリ被告(即チ上告人)モ亦タ別紙ノ如ク番外第二號上申書ヲ呈シ論辯シタレモ朱書ノ如ク申渡サレタルニヨリ不得止執行チナシタルナリ夫レ事實斯ノ如クニシテ該判旨ハ實ニ原告被告カ思想ノ範圍外ニ涉リタル不法ノ裁判ナリトス

第二 曩キノ上告狀ニ登記スル如ク本訴ノ地主即チ被上告人ト小作人即チ上告人トノ關

係ハ實ニ普通ノ地主小作者ト其性質ヲ異ニセルコトハ始終審々問中縷々陳述シタル如ク  
 ニシテ控訴乙第二號正徳二年ノ證書明文ニ記載シタル通り小作者互ニ小作地ヲシテ質  
 書入及讓與ノ權ヲ有セルヲ以テ現ニ上告人カ小作地ノ内已ニ他ニ返地シタルモアリ又  
 今日ト雖モ元小作者ヨリ請求サル、ニ於テハ返地セサルヲ得サルモアリ即チ別紙乙第  
 五號證ノ附録ノ通りニ有之故ニ増額ノ如キモ該新田小作者一般肯諾セサレハ獨リ被告  
 ノミ之レヲ執行セントスルモ到底其結果ヲナスコト能ハサルモノナリ斯ノ如キ密着ノ事  
 情アルモノナレハ甲第一號證ノ如キ事理不明ナル證書ヲ以テ單ニ文詞ニノミ拘泥シテ  
 理非曲直ヲ判別シ得ラル、モノニアラス宜ナリ司法省ハ明治十年丁第七十五號ヲ以テ  
 特ニ契約書ノ解釋心得ヲ達セラレタリキ然ルニ控訴廳ハ右等ノ事實ヲ審明セテレス自  
 己ノ臆斷ヲ以テ輕々判旨ヲ下サレタルハ頗ル審理不盡ノ裁判ナリトノ事  
 因テ辯明並判決ヲ與フル左ノ如シ

辯明

本訴ハ上告者ニ於テ被上告第一號證中帳簿整頓ノ上トアル帳簿ハ中ノ口新田一般ノ小作  
 者カ小作米金増額ヲ承諾シタルノ帳簿ナリト申立ルモノナルカ故ニ果シテ該帳簿ハ右ト  
 告者申立ル如キノ帳簿ナリヤ否ヤヲ審究スルヲ要用ナリトス依テ被上告第一號證ヲ查閱  
 スルニ「私儀是迄貴殿所有地字中ノ口新田ノ内借地居住田畑小作罷在候處今般當新田平  
 準宅地ハ云々田方ハ云々畑方ハ一反ニ付一ヶ年金二圓ノ割ヲ以等級ニ分賦増額可仕旨且  
 帳簿整頓ノ上御談有之次第更ニ從前ノ證書ニ引替云々」トアリテ則右帳簿整頓ノ上トア

ル帳簿ハ其上文ニ當新田平準云々等級ニ分賦増額トアル其調帳簿ヲ指シタルモノニシテ  
 該證中毫モ上告者カ申立ル如キ中ノ口新田一般ノ小作者カ其増額ヲ承諾シタルノ帳簿ナ  
 リト見認ムヘキモノナシ依テ原裁判所カ上告者ノ申立ヲ排斥シタルハ不當ニアラス  
 上告補欠第一項ノ要旨ヲ審按スルニ上告者ハ原裁判所カ原被相爭ハサルノ點ニ對シ判決  
 ヲ下シタルハ不法ナリトノ申立ルカ如シト雖モ上告者ハ明治十五年六月廿日原裁判所ニ  
 於テノ口供第五項ニ「原告第一號證ニ平準トアルハ宅地並ニ田方畑方ヲ問ハス且ツ其等  
 級ヲ論セス一般押均ヲシト申ス儀ニテ原告陳述ノ如ク其等級毎ニ差等ノアル儀ニハ無之  
 候」ト申立タレハ原裁判ハ決シテ原被相爭ヒナキノ點ニ對シ判決ヲ下シタルモノニ非スト  
 ス

但シ上告者ハ以上辯明ノ外種々申立ルコトアリト雖モ都テ本訴ニ影響ナキヲ以テ之レカ  
 辯明ヲ與ヘス

判決

右辯明ノ如クナルヲ以テ原裁判ハ破毀スヘキ理由ナキモノ也  
 第五百八十一號

○分地券狀名義書換捺印請求上告ノ判文

(明治十五年九月八日上告  
 十五年十二月二十二日申渡)

神奈川縣相模國鎌倉郡深谷村第

九番地平民

上告人

川邊 榮治郎

同縣橫濱區太田町六丁目第百二番地平民

右代言人

海老塚 太郎 橋

同縣相模國鎌倉郡深谷村第九番地平民

被上告人

川 邊 兼 五 郎

分地券狀名義換捺印請求一件東京控訴裁判所ノ裁判ヲ不法トシ破毀ヲ求ムル上告ノ要領左ノ如シ

第一條

東京控訴裁判所ハ本訴ヲ裁斷スルニ左ノ判文ヲ以テセラレタリ〔原告カ明治十三年三月被告ヨリ受取タリトテ提供スル所ノ甲第一號證ハ被告ハ此證書ハ先以テ川邊家親類ニ協議ニ及ヒ異議ナキニ於テハ調印スヘキ旨ニテ下接ノ心得ニテ渡シ置タルヲ當時原告ハ同居中ナレハ私擅ニ我カ印章ヲ捺捺シタル者ナリト申立レモ其證憑ヲ呈スル能ハサルノミナラス川邊家ノ親類四名已ニ歷々之レニ調印シタル以上ハ被告モ亦正當ニ調印シテ之ヲ渡シタルモノト認メサルヘカラス〕ト裁判セラレタルハ審理ヲ盡サ、ル不法ノ裁判ナリトス何トナレハ川邊家血縁者ニ於テハ決テ調印シタルニ非ス畢竟被上告人ノ囑托ニ因リ至親ニ非ル四名調印シタルモノニシテ已ニ初審衙ニ於テ該四名等ノ證言スルニ〔甲第一號證ノ成立ヲタルキハ原被告協議ノ上ニテ被告カ該證ヲ認メタリ然レモ其時被告云

フニ血縁ナル親戚ニ尙協議ヲ遂ケ其上調印可致旨主張セシヲ以テ後日其甲第一號證ニ加印シ其際血縁ノ親戚ニ問合セタル處不在ナルニ依リ親戚ニ無斷ニ加印セシ云々〕ト明言セシヲ以テ觀ルモ川邊家ノ血縁至親ノ者共ニ於テハ該證ノ成立等毫モ知覺セサルノミナラス不眞正ノ證タルハ灼乎トシテ火ヲ視ルカ如シ抑モ該證成立ノ原因タルヤ被上告者ハ上告者ノ實父タリト雖モ性懶惰ナル故川邊家ヲ繼承スル能ス祖父ヨリ上告人ニ直接繼續シタレハ爾後上告人ハ川邊家ノ安寧ヲ保安シ子孫ノ繁榮ヲ希圖スルニ日夜勉勵シ怠ラサルモ被上告人ハ益々放逸ヲ極メ聊カ羞耻ノ情況無之ト雖モ苟モ親子ノ名アレハ平常敬恭ヲ旨トシ養供缺ヲナカリシモ被上告者ハ一日ヨリ遊惰増長シ爲メニ徒費ノ嵩ムニ隨ヒ囊中ハ漸次缺乏シ自カラ放蕩ノ自由ヲ妨クヨリ愛ニ一策ヲ考案シ婦女兩名ト俱ニ分家セシト望ム隨テ財產即チ爭訟ノ地ヲ分與スヘシト平素旦夕ニ督責スル頻リナリト雖モ第一分家スルハ不易儀ニシテ卑屬ヲ分家スルノ比ニアラサレハ懇篤説明スルモ肯セサレハ不得止一時父ノ一轍心ヲ鎮壓セン爲メ父ノ望ムカ如ク下接ヲ筆記シタリ然レモ之レヲ實行スル甚タカタシ如何トナレハ該財產ハ川邊家祖先傳來至重至貴ノ靜動產ナレハ如何ニ父ノ嚴命ト雖モ獨リ上告者カ擅斷ヲ以テ附與スル能ハス之レヲ分與セントセハ川邊家血統至親ニ最モ協議ヲ遂ケ親戚ノ許諾ヲ經タル后ニ非レハ輕々爲ス能ハサルハ贅言ヲ疎タスシテ著明ナリ若シ血縁者ニ於テ諾了シタルモノナレハ何ソ至親ヲ閣キ外四名ノ調印ヲ要スヘケンヤ之レ被上告者カ上告人ノ印願ヲ左右シ該證ニ擅押シ該四名ニ依託連署ナサシメタル自ラ明カナルニ原裁判所ハ被上告者ノ陳述ノミヲ採用シ眞偽如何ヲ審究セ

大判決セラレタルハ失當ノ臆斷ナリト思惟ス

三〇〇

第二條

全判文中〔中畧上納可被成候トアル以上ハ此地所ハ川邊家親類四名立會ノ上原告カ分家ヲ爲スニ付被告ヨリ全ク已ニ讓リ渡セシ者ナルコト明確ナレハ被告ハ其地券名義書換ノ願書ニ調印スルコト拒ムヘキ理由ナシトス〕ト判決セラレタルハ審理ヲ究メサルモノトス何トナレハ甲第一號證ヲ暫ク眞正有效ノ契約書ト見做スモ該地所分與ノ期タル被上告者及ヒ「チカ」「サワ」ノ三名分家シ然ル后讓與スヘキトノ未必條件ノ約ナリ而シテ三名ノ者ニ於テハ分籍シタルニ非サレハ良シ甲第一號證ハ確實ノモノト假定スルモ上告者ノ義務ハ未タ發生セサリシナリ其原素タル三名分家ノ如キハ親戚一同ヘ協議ヲ遂ケ承諾ヲ經テテ地方廳ヘ請願シ御許容ヲ受ケタル上ニ非サレハ容易ク分籍爲ス能ハサルヤ嗚々チ歎タルナリ然リ而シテ分家爲シタル后其證憑ヲ提供セサレハ本訴ノ如キ請求ヲ爲シ得ヘカラサルモノナルチ原裁判所ハ上告者ニ於テ被上告者カ請求スル調印ヲ拒ムヘキ理由ナシト斷定セラレタルハ順序ヲ誤リタル不法ノ裁判ナリト思考ス

辯明

上告第一條ノ要趣タル甲第一號證ハ至親者ノ加印ナキチ以テ無効ナリト云フニアリ同第二條ハ該證ヲ有效ナリトスルモ被上告人等カ公然分家セシ後ニ非サレハ此訴ヲ爲シ得ヘカラストノ旨趣ナリ

依テ按スルニ右甲第一號ハ實子上告人ヨリ實父被上告人等ニ宛タル證書ニシテ其旨趣ハ

被上告人并ニ妻(上告人)及孫(上告人)右三名カ分家スルニ付若干ノ田畑山林ヲ讓渡ストノ事ナリ此證書中上告人ノ印影タル被上告人カ上告人ノ印ヲ私擅ニ押捺セシ證據ナキ以上上告人ニ於テ該證書ノ旨承諾ノ上之ニ調印セシコトハ動スヘカテサルモノナリ又之ニ連署セシ者ハ川邊家ノ至親ニ非サルモ矢張其親戚中ノ人々ナリ抑モ其父母ノ分家スルニ付其養料ニ充ル財産ヲ給スルニ於テ其財産所有主即チ上告人既ニ之ヲ渡スコト承諾シアリテ今ニ至リ或ハ至親者ノ加印ナキチ口實トシ或ハ父ノ放蕩無賴ヲ聲ラシ其財産ヲ失ハシテ恐ル、等ノ苦情ヲ申立テ之ヲ拒ムカ如キハ人倫上有ル間敷ナリトス依テ原裁判所カ甲第一號ハ上告人并ニ川邊家ノ親類四名カ調印セシチ以テ有效ナリトセシハ當然ノ裁判ナリトス

又被上告人等カ分家ニ付地方廳其他公然ノ手續ヲ經サルモ本訴ノ起ル以前現ニ被上告人等ハ上告人ト居テ分チシコトハ上告人モ申立ルモノナリ然レハ其父母カ公然分家ノ手續ヲナサ、ルトテ其子タル者一日モ其養料ヲ怠ルコト得サルモノトス左スレハ原裁判所カ被告ニ於テ地券名義書換願書ニ調印スルコト拒ムヘキ理由ナシト申渡セシハ相當ナリトス

判決

右之筋合ナルチ以テ明治十五年七月十日東京控訴裁判所カ本件分地券狀名義換捺印請求ノ訴ニ對シ與ヘタル裁判ハ破毀スヘキ理由ナキモノナリ

上告入費ハ上告人ヨリ辨納スヘシ

第五百八十二號

○戸主擅定違法上告ノ判文(明治十五年二月廿八日上告)

11011

(全 十五年十二月廿六日申渡)

上告人

西田カッ

東京府京橋區三十間堀三丁目五

番地寄留同府平民

星 亨

右代言人

被告上告人

兵庫縣攝津國武庫郡守部村平民

松永清三郎

東京府京橋區彌左衛門町十五番

地平民

右代言人

下村四郎

戸主擅定違法一件大坂上等裁判所ノ裁判ヲ不當ナリトシ破毀ヲ求ムル上告ノ要領左ノ如シ

第一條

夫レ養子ヲナスノ目的タルヤ老後ニ於テ扶助侍養ヲ受ケ且其家名ヲ永續セシムルノ爲メナレハ其養父母タルモノ其子ニ安心委托スルニ足スト思考セハ養父若クハ養母ニ別ナク其子ヲシテ戸主ヲラシメサルノ權アルモノトス是レ普通ノ條理ナリトス而シテ若シ其權養父ニアルモ養父死後ノ養母ニナシトセハ夫ノ目的タル扶助侍養又ハ家名永續ヲ計ルハ養

父ニシテ必要ニシ養母ニ對シテハ更ニ無用ナリト云ハサルヘカラス豈又不都合ナラヌヤ等シク其老後死後ヲ慮ルモノナレハ彼ニ必要ニシテ此ニ無用ナルノ理ハ萬々アラサルナリ故ニ養父ニ在テ之ニ托スルニ足ラストナスヲ得ハ養母ニ在テモ亦同シク之ニ托スルニ足ラストナスヲ得ヘキナリ斯ノ如クナレハ養母ト雖モ亦養父ト同シク其養子ヲシテ戸主ヲラシメサルノ權アルモノトス然リ而テ原告ニ於テハ當時ノ情況養子兼吉チ戸主トナシ原告ノ老後死後ヲ托シテ安心シ難キヲ以テ十三年十二月自ラ戸主トナリタルナリ是レ固ヨリ原告ノ權内ニシテ他ノ插嘴ヲ受クヘキ理ナシトス況被告ノ如キ西田家ノ親族ニアラサルノ人ヨリ云々セラルヘキナキニ於テチヤ

第二條

今假ニ戸主ヲ定ムルハ原告ノ權内ニアラスシテ親族協議ノ上ニナスヘキコト、スルモ原告ハ本件ニ付西田家ノ親族トハ悉ク協議シタルヲ以テ原告戸主トナリタルハ實ニ正當ナリトス然ルニ原裁判所ハ其判文第三條ニ「被告第四號證ニ連署スル親族並ニ原告等ト共ニ戸主決定ノ協議ヲ盡サス」ト云テ西田家親族ニアラサルノ被告等ニモ亦協議スヘキモノ、如ク判示セラレタリ然レモ被告等ハ亡太兵衛實家ノ親族ニシテ西田家ノ親族ニハアラサルナリ故ニ被告等ハ西田家ノ家政ニ對シ插嘴スルノ權ナシトス斯ル權ナキ被告等ナレハ協議スヘキノ理ナキヲ以テ協議セサルニテ此等ト協議セサルハ固ヨリ當然ノコトナリトス而テ試ミニ夫ノ戸主届ニ連署シタル者ヲ舉グニ其石橋佐次兵衛ハ原告ノ從弟石橋佐次郎ハ再從弟安田筆吉ハ再從妹ノ婿木田喜兵衛ハ西田家ノ本家ノ主人ニシテ共ニ西田家

ノ親族ナリトス又夫ノ溝口庄兵衛ハ原告ノ從弟米田幸助ハ再從弟ニシテ是亦西田家ノ親族ナリ而テ此溝口米田ハ戶主届ニ連印セサルモ參考書第一及二號ニ於ケル如ク現ニ戶主届ニ連署シタル人ナリテ其代理ヲ依頼シアリ斯ノ如クナレハ此溝口米田モ亦夫ノ戶主届ニ連署シタルト同一ナリ然ハ則チ西田家ノ親族ハ悉ク皆該戶主届ニ連署シタリト云フモ亦不可ナキナリ加旃亡太兵衛ノ親族モ亦該戶主届ニ連印シアルナリ其高井新七ハ太兵衛ノ甥ナリ其他參考書第一及第二號ニ於ケル如ク太兵衛ノ異母弟辰巳喜右衛門同甥寺西五介今井新右衛門松井平四郎同姉婿高井半右衛門同再從弟奥田勘右衛門等ノ人々ハ現ニ其連署者ヘ代理ノ依頼アリ之ヲ以テスレハ是亦戶主届ニ連署シタルト同一ナリ斯ノ如クナレハ西田家ノ親族一同カ原告ヲ以テ戶主トナスコトニ同意シタルノミナラス亡太兵衛ノ實家親族モ亦大半之ニ賛成ス然リ而テ此等亡太兵衛ノ實家親族ノ如キハ西田家ノ戶主立定ニ付甚タ要用ナキモ斯ク賛成シアルヲ以テスレハ益原告カ戶主トナルノ利ナルヲ見ルニ足ルヘシ故ニ本件ヲ假ニ親族ニ協議スヘキモノトスルモ原告カ戶主トナリタルハ正當ナリトス

第三條

原告ハ明治十三年十二月中戶主届ヲナシ次テ地券書換ヲナシ其他戶主タルニ必要ナル手續ヲ行ヒ純然タル戶主ニナリタルナリ原告カ斯ク尋常ナル相續手續ヲ以テ故障ナク戶主トナリタルハ當時養子兼吉ニ於テ異議ナク此ニ同意シタルヲ表スルニ足レリトス已ニ養子兼吉カ同意シタル事ニシテ且事濟ミコナリタル後ニ至リ被告ヨリ本訴ノ如キ故障ヲ

受クヘキ理ナシトス

第四條

前三條ニ論述シタル如ク原告自ラ戶主トナルモ他ヨリ之ヲ故障サルノ理ナシトス然ルニ大坂上等級裁判所ハ(被告)原告(上告者)申立ハ相立サル者ナリト判決シタリ是其不當ナリト思考スル所以ナリ故ニ同裁判ヲ破毀シ更ニ正當ナル裁判ヲ受ケ得ヘキヲ原告ハ請願ス

被上告人カ本案上告ノ旨趣ニ對シ原裁判ノ不當ナラサルヲ辯護スル要領左ノ如シ

一原告上告ノ要旨ハ(原告カ明治十三年十二月中自ラ戶主トナリタルハ固ヨリ原告ノ權内ニシテ他ノ插嘴ヲ受クヘキ理ナシ今假リニ戶主ヲ定ムルコトハ親族協議ノ上ニナスヘキモノトスルモ原告ハ西田家ノ親類トハ協議シタルヲ以テ原告カ戶主トナリテ相續スルハ正當ナリ然ルニ原裁判ハ其判文第三條ニ「親族並ニ原告(上告者)等ト共ニ戶主決定ノ協議ヲ盡サス」ト云フテ西田家ノ親族ニアラサル被告等ニモ亦協議スヘキモノ、如ク判示セラレタルモ被告等ハ亡太兵衛實家ノ親族ニシテ西田家ニ對シ插嘴スルノ權ナキモノナレト其權ナキ被告等ト協議スヘキ理ナキヲ以テ此等ト協議セサルハ當然ナルニ原告ノ申立ハ相立サル者ナリト判決シタルハ不當ノ裁判ナリト云フニアリト雖モ元來兼吉ハ亡西田太兵衛ノ生存中其繼承養子ニナシタルモノナレハ太兵衛ノ死跡ハ勿論兼吉カ相續シ戶主トナルヘキハ當然ニシテ假令原告ハ養母タリトモ前戶主カ生存中既ニ定メタル相續人即チ繼承養子兼吉ヲ措キ自ラ相續人トナリ得ヘキモノニアラス若シ兼吉ニ相續チナシ



メス前キ約シタル繼承養子タルヲ止メシコナラハ宜シク其止メサルヲ得サル理由ヲ被告等ニ告ケテ承諾セシメサル可カラズ養母ナリトテ被告ノ承諾ヲ經スシテ擅ニ前約ニ背キ繼承養子ニ遣シタル兼吉ノ相續權ヲ奪ヒ自ラ相續人トナルノ權利ナキモノナリ又若シテ親族一同協議ノ上其筋へ具申シ許可ヲ得タル上ニアラサレハ養母タリトテ相續人トナル能ハサルモノナリ故ニ原裁判所カ其判文第三條ニ「太兵衛死跡相續ハ同人存命中甥兼吉ヲ繼承養子トナスヲ以テ該家ノ相續ヲ爲サシメ云々假令該家血統ノ尊長タリトモ夫太兵衛死後ハ近親合議ノ戸主ヲ決定スヘキニ原告(被告)第四號證ニ連署スル親族並ニ原告等ト共ニ戸主決定ノ協議ヲ盡サズ被告(原告)カ二三名ノ親族ト相謀リ戸主タルノ届書ヲ差出スハ其當ヲ得サル者トス」トノ辯明ヲ與ヘラレ判文第五條ニ「被告(原告)申立ハ相立サル者ナリ」ト判決ヲ下サレタルハ至當ノ裁判ニシテ原告ノ上告ハ頗ル不當ノ上告ナリト思考ス

一又原告ハ明治十三年十二月中戸主届ヲナシ次テ地券書換ヲナシ戸主タルノ手續ヲ行ヒ純然タル戸主ニナリタルモノニシテ原告カ斯ク相續ノ手續ヲ以テ故障ナク戸主トナリタルハ當時兼吉カ異議ナク同意シタルコトヲ表スルコ足ル已ニ兼吉カ同意シタル事且ツ事濟ミナリタル後ニ至リ被告ヨリ本訴ノ如キ故障ヲ受クヘキ理ナキ旨申立ツレモ前戸主太兵衛カ生存中ニ在ツテ既ニ業ニ繼承養子即チ相續人ト定メアル兼吉ヲ措キ原告カ擅ニ戸主トナリ相續スル旨ノ届書ヲ差出シ財産所有名義ヲ書換ヘントスルヨリ直チニ紛議醸成引續キ本訴ヲ起スニ至ルモノナレハ其原告カ相續シ戸主トナルコト兼吉ニ於テ事實故障ナク同意スヘキ謂レナク又事濟ニナリタル後ニ被告ヨリ本訴ヲ起シタルモノニモアラス依テ原告申立ノ不當ナルハ喋々チ俟サルナリ殊ニ右原告ノ申立ハ原裁判所ニ於テ曾テ申立サル事柄ナレハ其裁判ヲ不當ナリトシテ上告スヘキ筋ナキモノナリト思考ス

辯明

凡ソ婦女ノ戸主タルヤ寔ニ不得已ノ場合ニ於テスルモノニシテ本訴西田家相續ノ如キモ上告人ニ於テ此際自ラ戸主タラント欲セハ其身婦女ニシテ且養子兼吉ノアルアレハ宜シク該家ノ親戚及ヒ兼吉ノ實父ナル被上告人等へ協議スヘキハ勿論ニシテ上告人カ戸主届出ノ際ヨリ今ニ至ル迄該家親戚間ノ故障ナキヲ以テ看レハ上告人ノ申立ル如ク當時諸親戚ノ協議ニ據テ届出タルモノト認メ得可キナリ又被上告第四號證連署者ノ如キハ兼吉生家ノ親戚ニシテ固ヨリ西田家ノ相續上ニ干渉スヘキ緣由アルニアラサレハ上告人カ右連署者へ協議セサリシハ當然ノ事柄ナリ唯被上告人ニ對シ其協議ヲ缺キタルハ穩當ナラサル所爲タル可シト雖モ抑モ上告人ナルモノハ其身婦女ナルモ西田家血統尊長ニシテ此際自ラ戸主トナリテ兼吉ノ相續スヘキヲ一時停止セシハ偏ニ該家ノ安寧幸福ヲ保護スルノ念慮ニ出タルモノト做サレハ設ヒ兼吉ハ從順勤儉ニシテ克ク家産ヲ維持スルニ耐タルモノトスルモ此際彌上告人ノ存意ヲ遵奉シテ一家ノ親睦ヲ企圖スヘキハ勿論ナリ然レハ被上告人カ其尊長ナル上告人ノ存意如何ニ拘ハラス強テ兼吉ヲ戸主タラシ

メント欲スルハ忽チ西田家ノ不幸ヲ來スノ媒介ニシテ抑モ當初兼吉ヲシテ西田家ノ嗣子  
タラシメ將來ノ繁榮ヲ希望セシ良心ニ背戾スルモノナレハ原裁判所カ一概ニ被上告人等  
ト協議セサリシチ其當ヲ得サルモノト論定シ上告人ノ申立ヲ排斥シタルハ本訴ノ事情ヲ  
斟酌セサル失當ノ裁判ナリトス

判決

右ノ理由ナルヲ以テ大坂上等裁判所ノ裁判ヲ破毀シ更ニ本院ニ於テ裁定スル左ノ如シ  
原告(上告)ハ被告(被上告)ノ請求ヲ拒ミ得可キモノトス

但訴訟入費ハ各自辯タルヘキ事

第五百八十三號

○養子離縁上告ノ判文(明治十五年二月廿八日上告  
全十五年十二月廿六日申渡)

上告人

兵庫縣攝津國兔原郡住吉村平民  
西田 あり

東京府京橋區三十間堀三丁目五  
番地寄留同府平民

星

亨

右代言人  
被上告人

兵庫縣攝津國兔原郡住吉村平民  
西田 兼吉  
東京府京橋區彌左衛門十五番地

平民

右代言人

下村 四郎

養子離縁一件大坂上等裁判所ノ裁判ヲ不當トナシ破毀ヲ求ムル上告ノ要領左ノ如シ

第一條

凡ソ人他人ノ子ヲ養テ子トナス所以ノモハ老後ノ扶助及侍養ヲ得且祖先傳承ノ家名ヲ  
永存スルニ在トス是則養子ヲナスノ目的ナリ故ニ苟モ此目的ヲ虧損スルモノアレハ養子  
ヲナシタルノ所以既ニ去リタリト云ツヘシ夫レ斯ノ如クナレハ養子ノ契約ノ如キハ他一  
般ノ契約トハ殊別ニシテ一旦結成シタル以上ハ雙方ノ合意ナクシテハ解除シ得サルカ如  
キ類ニアラズトス  
養親子タルモノ斯ノ如クナレハ其孰レカ荷モ子視シ又ハ親視スルヲ厭フノ念ヲ生スルコ  
於テハ一家和合セズシテ兩情背馳シ其初メ扶助侍養ヲ得又ハ家名ヲ傳承セシメントノ目  
的遠去ツテ又遂フヘカラサルナリ已ニ斯ノ如クナレハ養子養親タルノ關係ハ徒爾ニシテ  
其用ヲナサハルナリ否一變シテ煩累トナルナリ故ニ法理ニ於テ斯ノ如キ場合ニ遭遇セハ  
縱ヒ一方者ニ於テ同意セサルモ養子契約ハ解除セラルヘキモノニシテ若シ其解除ノ爲メ  
損害ノ生スルアレハ其損害ハ償還セラルヘキナリ是レ最モ法ト情トニ叶合シテ兩得シタ  
ルモノト云フヘキナキナリ然ルモ若シ解除スルヲ得スシテ猶其契約ヲ續行スヘキモノト  
セシニハ兩情ノ合ハサル途ニ互ニ相仇敵視シ其怨ヲ結フ益深クシテ死猶忘レサルノ苦境  
ニ陥ラシムヘキナリ是レ養子契約ノ殊別ナラサルヘカラサル所以ナリトス

上來陳述シタル如クナレハ其原由ナキモ苟モ養子タリ又ハ養親タルヲ厭惡スルノ念ヲ生シタルニ於テハ其養親子タルノ契約ハ速ニ解除セラレヘキナリ況ヤ本件ノ如キ其念ヲ生スルコ故アルノ場合ニ於テヤ

第二條

養子タルモノハ養父母ニ從順シ其教令ニ違犯スヘカラサルノ義務アルモノトス而シテ其養父母ニ從順ナラス又ハ其教令ニ違犯スルアラハ養子タルノ義務ニ服セサルモノニシテ已ニ養子ニアラサルナリ然ハ則チ斯ル養子タルノ義務ニ服セサルモノハ其養父母ニ於テ養子タルノ契約ヲ解除シ得ルヤ論ナキナリ抑被告ハ松永清三郎ト共ニ原告養母ヲ相手取リ主擅定メ訴ヲ起シ自ラ養家ノ戸主トシテ強争ス蓋シ此行爲タルヤ從順ノ義務ヲ有セルモノ、行爲ト云フヲ得ヘキヤ否決テ得可カラサルナリ又被告ハ養父母ノ目ヲ盜ミ下婢同様ノ女子ト通シ私子ヲ擧ケタリ是レ被告カ自認セシモノニシテ被告カ放蕩ノ一證タリ斯ノ如キモ父母ノ教令ニ違犯セスト云フヲ得ヘキヤ是亦決シテ得可カラサルナリ

夫レ斯ノ如クナレハ被告ハ養子タルノ本分ヲ盡サス既ニ已ニ其離縁セラレヘキ充分ナル原由チナシタリ然ハ則チ此原由チ以テスルモ養子タルノ契約ヲ解除スルコ足レリトス

第三條

被告ハ其孰レヨリ論スルモ養子タルノ契約ヲ解除セラレテ離縁サルヘキナリ然ニ大坂上等裁判所ハ(被告)カ(原告)カ養子離縁ノ申立ハ相立サル者ナリト判決シタリ是其不當ナ

リト思考シテ破毀ヲ求ムル所以ナリトス故ニ同裁判ヲ破毀シ更ニ正當ナル裁判ヲ受ケ得ヘキト原告者ハ請願ス

被上告人カ本案上告ノ旨趣ニ對シ原裁判ノ不當ナラサルヲ辯護スル要領左ノ如シ

今回原告カ上告フル主點ハ(養子タルモノハ養父母ニ從順シ其教令ニ違犯スヘカラサルノ義務アルモノナルニ被告ニ於テ生家ノ父清三郎ト共ニ原告養母ヲ相手取リ戸主擅定メ訴ヲ起シ自ラ戸主トシテ争ハ從順ノ義務ヲ有スモノ、行爲ト云フヲ得ス又被告ニ於テ養母ノ目ヲ盜ミ下婢同様ノ「小ウメ」ト姦通シ私子ヲ擧ケタルハ被告カ放蕩ノ一證タレハ養父母ノ教令ヲ違犯セスト云フヲ得ヘカラ去レハ被告ハ養子タルノ本分ヲ盡サス其離縁セラレヘキ充分ノ原由アルチ以テ養子契約ハ解除スルコ足レリ然ルチ原裁判所ハ「被告(原告)カ離縁ノ申立ハ相立タル者也」ト判決セラタルハ不當ノ裁判ナリト云フニアリ抑モ被告生家ノ父松永清三郎カ原告ニ對シ戸主擅定メ訴ヲ起シタルハ原告ノ亡夫西田太兵衛生存中ニ在テ既ニ業ニ被告チ其繼承養子即チ該家ノ相續人ト定メアルニ原告ハ擅ニ被告チ措キ自ラ戸主トナリ相續セント不當ノ處置チナスチ以テ不得止訴ヲ起スニ至リタルモノナリ原告カ斯ク不當ノ處置チナスニ養子タリトテ此不當ノ處置ニ從順スヘキ義務アルナシ假令被告カ實父ノ訴ニ同意シ原告ニ對シ相續權ヲ争フモ必竟原告カ不當ノ所置チナシタルヨリ出タルモノニシテ民法上ニ背犯スルノ明文之レナキナリ又被告「小ウメ」ト姦通シタルヲナシ「小ウメ」ハ故アリテ未ダ西田家ノ戸籍ニ登記ナキモ小兒ノ片ヨリ西田家ニテ養ハレタルモノニシテ養父母カ被告ト「小ウメ」ト夫婦タラシメ而シテ西田

家ヲ相續ナサシメントノ目的ヨリ被告カ入家ノ當日被告ト「小ウメ」トノ婚姻ノ式ヲモ併テ執行シ親族ハ勿論近隣ノ人モ皆ナ見認メ居ル純然タル夫婦ナリ故ニ此夫婦間ニ明治十三年十月一子ヲ擧テ該兒ニ亡太兵衛ノ幼名ナリトテ庄右衛門ト名附シタリ若シ今日原告ノ云フ如ク被告カ「小ウメ」ト姦通シタルモノナラハ斯ク「小ウメ」ノ懐胎分娩ヲ養父母ニ於テ默許スヘキ理アラシヤ此事蹟ニ付テ見モ被告「小ウメ」ノ配偶ハ養父ノ許諾ニ係ルコト明瞭ニシテ決シテ原告ノ云フ如ク「小ウメ」ト姦通シタルニアラス亦放蕩ニモアラサルヲ知リ得ヘキナリ夫レ如斯次第ナレハ原告カ被告ノ離縁ヲ請求スル原由トスル事柄ハ毫モ其原由トナスニ足ラサルナリ依テ大坂上等裁判所ハ原告カ養子離縁ノ申立ハ相立スト判決セラレタルハ實ニ至當ノ裁判ニシテ之レヲ不當ナリトスル原告ノ上告ハ反テ不當ノ上告ナリト思考ス

明治十五年十二月十八日逕伸書ヲ呈シテ上告ノ旨趣ヲ擴張セリ  
本院ニ於テ辯明並判決ヲ與フル左ノ如シ

辯明

本件養子離縁ノ爭訟タルヤ原裁判書類ニ據テ反覆審按スルニ抑モ被告上告人ハ西田家先代ナル太兵衛(上告人)ト叔姪ノ間柄ニシテ太兵衛ノ存生中既ニ該家ノ嗣子ト定メ今ヲ距ル幾ノト三年前ニ入籍ノ公式ヲモ執行シタレハ西田家ヲ繼承スヘキ正當ノ養子ナリ故ニ一家ノ尊長ナル上告人タリモ萬々不得巳ノ事故アラサル限ハ本件ノ如キ急劇ナル請求ヲ做シ得ヘキモノニアラサレハ被告上告人カ其請求ニ應セサルハ謂レナキ事柄ニ非トス何ソ

トナレハ被告上告人ノ實父ナル松永清三郎カ上告人ニ係リ西田家相續ノ爭訟ヲ提起セシトテ之ヲ以テ被告上告人カ養母ニ對シ從順ナラサル行爲ト做シ難シ又被告上告人ト小梅トノ間ニ一子ヲ擧タルハ姑ラク上告人ノ申立ル如キ情實ナリトスルモ此一事ヲ以テ放蕩ノ證左ト做シ難シ其他上告人カ原裁判所ニ於テ申立タル事項ノ如キハ總テ口頭ノ陳述ニ過キヌシテ本件離縁ノ原由トセラルヘキ材料ナキヲ以テナリ故ニ原裁判所カ上告人ノ請求ヲ採用セカリシハ不當ノ裁判ニ非トス

判決

右ノ次第ナルヲ以テ大坂上等裁判所ノ裁判ハ破毀スヘキ理由ナシトス  
但上告入費ハ各自ニ辨償スヘシ

第五百八十四號

○渡金取戻上告ノ判文(明治十五年三月十六日上告  
十五年十二月廿六日申渡)

大分縣豊前國下毛郡合馬村一番  
地平民合馬與惣平代言人  
東京府神田區中猿樂町二番地平民

上告人

大井 憲 太郎

兵庫縣攝津國神戸區兵庫松屋町  
十一番地平民金場小平治代人

被上告人

渡邊 久 道

渡金取戻一件長崎上等裁判所ノ裁判ヲ不法トシ上告シテ破毀ヲ求ムル要領左ノ如シ  
 今回上告ヲ爲ス理由ノ要點ハ決テ上告者カ被上告者ヨリ甲第一號證ニ記載ノ手附金ヲ領  
 收シタルヲナキノミナラス甲第十三號證ヲ差入レシ覺ヘモナキニ終審廳ニ於テ判文中第  
 一條ニ甲第十三號證ヲ引テ以テ甲第一號證ニ記載ノ手附金六百六十五圓ヲ上告者ヨリ被  
 上告者ニ請求スヘキ權利ヲ與ヘタルモノト爲サ、ルヲ得ト判決セラレタル此一點ニア  
 リ抑終審廳カ茲ニ甲第十三號證ヲ引キ斯ノ如キ不當ナル判決ヲ爲シタルハ恐クハ該證カ  
 上告者ノ手中ニ成立シタルモノト誤認シタルニ外ナカル可シ夫レ然リ果テ然ラハ此判決  
 ノ一點ニ於テハ全ク審理不盡ナルモノト認メサルヲ得ス何トナレハ元來甲第十三號證ナ  
 ルモノハ現ニ被上告者ノ初審代官人加來祿郎カ其代官人トナル以前ニ在テ自ラ認メタル  
 祿郎ノ自筆ノ書面ニシテ且其合馬與惣平トアル名下ノ捺印ノ如キモ上告者即チ與惣平ノ  
 手ヨリ受領シタルモノナラハ苟クモ代官人ニシテ其後被上告者ノ初審代官人ト爲リシキ  
 之ヲ初審廳ニ證明シテ被上告者ノ權利ヲ伸張保全ス可キハ人情ノ當然ナリ然ルニ之ヲ證  
 明セサリシハ事實終審廳ニ於テ認メラレシ如キ効力アル證ニ非サルヲ充分知ルニ足ル  
 可キ一證ナリ既ニ効力ナキ證ナラハ良シヤ手附金六百六十五圓上告者カ受取リ居ル者ト

爲スモ最早明治六年第三百六十二號公布出訴期限規則第一條中ニ明記スル商法上ノ手附  
 金ニ過キサルヲ以テ滿六ヶ月ヲ經過ノ後ハ返金ノ義務ナキヲ判然タリ然ルニ終審廳ニ於  
 テハ其反古同一ナル甲第十三號證ヲ引キ直ニ斯ノ如キ不當ナル判決ヲセラレタルハ甚不  
 服ナリトノ事

被上告人ハ右上告ノ旨趣ニ對シ原裁判ノ不法ナラサル旨辯護セリ  
 辯明

本件上告ハ左ノ事柄ヲ審明スルヲ緊要トス

一被上告甲第十三號證ハ上告人カ認諾シタル證據ト看認ムルヲ得ルヤ否ヤノ事  
 原裁判書類ニ就キ審按スルニ抑被上告甲第十三號證タル上告人ノ自筆ト認メシモノニモ  
 アラス其印影アルニモアラス又上告人カ原裁判所ニ差出タル明治十四年十一月廿八日附  
 辯駁書第二條中(久造ト被告)トニ於テ甲第十三號ノ如ク調金シ内濟可致ト思考シ  
 タレト甲第十五號證ノ如ク久造ニ於テ調金セサルトノコト該内濟示談モ遂ニ瓦解ニ屬  
 シタリトアリテ甲第十三號證ニ記載セル如キ場合ニ至ラントセシモ遂ニ成ラサリシ事  
 由チ申述タルモノナリ之ヲ以テ甲第十三號證ヲ認諾シタルモノト云チ得ス其他該證書ヲ  
 承認シタル申立アルヲナク反テ之ヲ排撃シタリ然レハ原裁判所ハ先ツ該證書ノ成立如何  
 チ判明セサルヘカラサルニ其儀ナク直チニ上告人ノ承認セル者ト看做シテ該證書ニ  
 依リ出訴期限ヲ繼續セシモノトシ甲第一號證ノ金額ノ被上告人ノ請求ニ應スヘキ旨申  
 渡タルハ審理不盡ノ裁判ナリトス

判決

右説明ノ如ナルニ付長崎上等裁判所ノ裁判第一條第三條ヲ破毀シ廣島控訴裁判所ニ移スニ依リ同裁判所ノ裁判ヲ受クヘキモノ也

但上告入費ハ被上告人ヨリ償却スヘシ

第五百八十五號

○地所受戻上告ノ判文(明治十五年六月廿六日上告  
全十五年十二月廿六日申渡)

茨城縣常陸國西茨城郡水戸村平

民和久井庄之助後見人

仁平 又 右衛門

東京府京橋區南橫町七番地寄留

高知縣士族

上 島 重 威

茨城縣常陸國西茨城郡上城村四

百一番地平民

安 達 源 之 助

上告要領

第一條

原裁判所ノ判文第一條ノ主旨ハ甲第一號證成立ヲノキ則明治十二年十二月四日ニハ後見

人アリシヲ信用シ難シトシ之レカ辯明ヲ助ケルニ初審答書ニ後見人ノ肩書ヲ用ヒ答辯セ  
サリシヲ以テセラレタルハ實ニ不法ノ裁判ナリ夫レ當時後見人アリタルヲ仁平又右衛  
門カ呈シタル丙第四號證ヲ以テ明瞭ナリトス若シ本證書ノ如キ公正役場ノ公證ヲ信用  
スヘカラサルモノトセハ何者カ公證ノ効アリトセン然レハ則チ人事身上證書ハ該證ヲ置  
イテ他ニ依ルヘキモノナキハ言ヲ俟タサルヘシ而シテ祖父周助カ記名ナキヲ以テ効力ナキ  
トセンカ未タ後見届ニ祖父カ記名調印セサレハ効力ナシト云フ法文アルヲ見ス好シ周助  
カ記名調印ナキヲ不都合ナリトセハ當時後見届ヲ收受スル役場カ之レヲ退クル迄ニシテ  
特ニ法律ナキノ外一度ヒ正當役場ニ藏存スル證書ハ公衆ニ對シテ公權ヲ特有スルハ尤モ  
當然ノ理ナラン又初審答書ニ後見人ノ名ヲ以テ答辯セサルカ爲メ當時後見人ナキモノト  
センカ個ハ後見人ナキノ事實トスルニ足ラス此ノ後見人ノ名ヲ以テセサルノ事實ハ被告  
カ初審訴狀ニ後見人某ヲ對手トシ出訴セサルヲ以テノ故ナレハ是レカ爲メ後見人ナキモ  
ノト爲ヌヲ得ヌ却テ被告カ出訴シタリシ主旨ヲ論スレハ甲第一號證ヲ收受スルニ當リ周  
助カ後見人ナリト認メハ訴狀ニ庄之助後見トシ出訴スヘキ筈ナルニ更ニ夫等ノ見ルヘキ  
ナキニ於テモ決シテ他ニ後見人ナカリシトスルヲ得ヌ又初審答書ニ後見人ニ論及シタル  
ヲナシト云フモ已ニ初審答書ニ(祖父周助ハ該地ヲ左右スルノ權利ヲ拋棄シタルモノナ  
リ)ト論シタレハ後見人ノ有無ニ不拘周助カ該地ニ就キ權利ナキヲモ論シタリ如此ナ  
レハ原裁判所ノ裁判ハ不法ナリト思量ス

第二條

同判文第二條ハ先代藤藏存生中明治十一年五月十八日周助ナル者カ土地ヲ買入レ而シテ明治十二年十二月四日附テ以テ被告ヘ甲第一號證書ヲ差入タレハ藤藏存生中ヨリ周助ニ該地取扱ヒ任シタルモノナリト云ニアリ抑モ該地ハ一旦明治十一年五月十八日周助カ買受ケ而シテ後明治十一年五月三十日原告先代藤藏ヘ讓與シタルハ乙第二號證ノ如ク明晰ナレハ決シテ藤藏カ該地ヲ周助ニ取扱ハシメタル事實ノ見ルヘキナク況ンヤ乙第一號證ニ藤藏代周助トアルニ非サルヲヤ然ルニ論地ノ事件ヲ隱居ニ任セタルモノナレハ云々臆測ヲ以テ斷了セラレシハ乃チ不法ノ裁判ナリト思量ス

右ニ陳上スル如ク原裁判所ノ裁判ハ不法ナルヲ以テ破毀セラレソコヲ請願ス

辯明

本訴ハ上告人ニ於テ被告上告甲第一號ハ祖父周助カ權外ノ契約ヲナシタル者ニシテ當時第四號證ノ如ク伯父仁平又右衛門カ上告人ノ後見人トナリ家事ヲ管理セシヲ以テ右後見人ノ承諾セサル契約ハ上告人ニ於テ負擔スヘキ義務ナシト云ニ在リ

第四號後見届書ニ上告人ノ同一家内タル祖父周助カ記名ナク且上告人カ始審答辯ノ趣旨タル論地ヲ父藤藏ノ名義ニ書換タレハ祖父周助ハ該地ヲ左右スルノ權利ヲ拋棄シタリト云ニ止リ曾テ後見人アリテ周助カ上告人ノ財產ヲ進退スル權ナキ理由等ヲ陳述シタルコトナキニ依リ原裁判所カ是等ノ事實ヲ推測シ甲第一號證ノ成立タル當時果シテ公正ナル後見人アリシヤ信シ難シト認定シタルハ強チ認定ノ理由ナキ者トナスヲ得ス良シヤ當時後見人アリシ者トスルモ父藤藏死去ノ上ハ祖父周助ニ於テ當然後見ノ任アル者ナレハ

周助カ上告人ノ財產進退ノコトニ關與スヘキ權ナキモノト云ヘカラス況ヤ論地賣買ニ付テハ藤藏ヨリ周助ヘ其取扱ヲ任セタルモノナレハ甲第一號證ニ於ルモ周助名前ヲ以テ約定ナシタルモノト推定スルヲ得ヘキモノナレハ到底原裁判ハ破毀スヘキ理由ナシトス

上告人ニ於テ亡父藤藏カ祖父周助ニ論所ヲ取扱ハシメタル事實ノ見ルヘキモノナキ旨申立レモ周助代理仁平又右衛門ヨリ原裁判所ヘ提供シタル上申書ニ「明治十一年五月中證書名宛ハ原告<sup>上</sup>第一號證ノ如ク周助ト記シ讓リ渡シ證ヲ請取タルモ固ヨリ戶主藤藏ノ所有スヘキモノナルニ付地券ハ藤藏ノ名義ニ書換」トアレハ甲第一號證ハ周助ノ名義ナルモ其實周助ハ藤藏ノ爲メ買入方取扱ヲナシタルヤ明瞭ナリトス

判決

前條辯明ノ筋合ナルヲ東京控訴裁判所ノ裁判ハ破毀スヘキ理由ナシトス  
第五百八十六號

○村中持山稼方違約上告ノ判文(明治十五年七月廿二日上告  
十五年十二月廿六日申渡)

- 新潟縣越後國南魚沼郡早川村枝
- 一ノ澤平民平賀喜三郎外十二名
- 總代兼同村平民平賀勘次郎田村
- 仁三郎代官人
- 東京府神田區淡路町一丁目一番
- 地寄留山口縣平民

上告人

大岡育造

新潟縣越後國南魚沼郡早川村平

民阿部市太郎外五十三名總代兼

同村平民上村文八郎原田益太郎

代言人

東京府京橋區三十間堀三丁目五

番地出張石川縣平民

被告上告人

藤井伸三

村中持山稼方違約一件上告人ニ於テ東京控訴裁判所ノ裁判ヲ不當トシ破毀ヲ求ムル上告ノ主點左ノ如シ

一甲第七號證ハ本訴ニ於テ上告者ノ權利ヲ得ヘキ必要ノ證據ナルコ原裁判所ハ之ヲ不問ニ措カレタル事

一乙第二號但書ニ明治六年中兩度ノ對談約定書トアルハ甲第七號及八號證ヲ指タルモノト認定カレシハ理由不備ノ認定ナリトス

右兩點ニ付キ上告狀并上告要領書參照ノ上辯明判決アラシテ乞

明治十五年十二月十一日附辯駁書并明治十五年十二月十四日附辯駁書アリ

被告上告人ハ右上告ニ對シ原裁判不當ナラサル旨辯護セリ

明治十五年十二月十一日附辯駁書并明治十五年十二月十八日附辯駁書アリ

辯明

乙第二號證明明治七年三月四日新潟縣廳カ早川村字一ノ澤山地券受ノ詞訟ニ對シ與ヘタル裁判狀但書ニ明治六年中兩度ノ對談約定書ハ不都合ノ取極ニ付難取用候トアリテ此裁判ハ既ニ確定セシモノナリ右兩度ノ對談約定書トアルニ付テハ原裁判所ニ於テ本訴原被告一方ハ甲第八號ト甲第五號證ノ二ナリト云ヒ又一方ハ甲第七號并ニ八號ヲ指タルモノナリト云ヒ各其見解ヲ異ニシ相爭フタリ此爭タル本按ニ對シ關係尠カラサル事ナルニ原裁判所カ單ニ右約定書トハ甲第七號八號證ヲ指示シタルモノト認定スト申渡シ其認定ノ理由ヲ付セサリシハ不當ノ裁判ナリトス  
但シ主點第一項ハ本條辯明ニ就テ解得スヘシ

判決

右ノ筋合ナルヲ以テ明治十五年五月三十日東京控訴裁判所カ本件村中持山稼方違約ノ訴ニ對シ與タル裁判ヲ破毀シ宮城控訴裁判所ニ移スニ依リ同裁判所ノ裁判ヲ受クヘキモノナリ

上告入費ハ被告上告人ヨリ辨償スヘシ

第五百八十七號

○田畑屋敷家屋水車賣戻違約上告ノ判文(明治十五年七月廿八日上告  
十五年十二月廿六日申渡)

群馬縣上野國那波郡上福島村七

十五番地平民



上告人

内山保次郎

東京府神田區今川小路二丁目七

番地寄留熊本縣平民

右代言人

白石剛

群馬縣上野國那波郡下新田村九

十九番地平民

被告上告人

金子初五郎

東京府芝區南佐久間町二丁目十

五番地士族

右代言人

田村訥

田畑屋敷家屋水車賣戻違約一件東京控訴裁判所ノ裁判ヲ不法トシ破毀ヲ求ムル上告要領

被告上告人ノ買戻サントスル物件ハ明治九年十二月限りニテ契約期限ノ切レタルモノナリ  
然ルニ原裁判所ニ於テハ左ノ三ヶ條ニ由リ上告人ヲ違約者ト判決セラレタリ

第一 被告上告人ノ代人須賀清三郎カ明治十四年八月廿五日附テ以始審廳ニ差出セシ上申  
書中ニ掲載セシ羽鳥新八(扱人)カ手翰ニ「賣渡置候田畑建家水車等迄不殘内山(上告人)  
へ賣渡置候分差上候儀ニ親族ノ者迄是ヲ決定シ其旨我等方ニ唯今火急ニテ一同參リ候

處云々扱買入金額本月十五日期日ニテハ當惑仕候且八月十五日ト相定被下候ハ、右約  
定金速ニ持參可申上候」トアリトノ事

第二 右須賀清三郎カ明治十四年八月廿九日付始審廳ニ差出タル上申書ニ「去ル明治十

年度證書取極ノ際原告人金子初五郎儀元金三百圓及小作金家賃等滞分皆濟ノ上ハ買戻  
度段敷有之タレトモ啻口約而已ニテ該證差出候儀ハ決テ無之然トモ事實被告本人所有  
ノ權有之上ハ當時ノ價額ヲ以テ賣戻スハ格別元金如キノ代價ニテハ賣戻ス儀承諾不仕  
候且又前述口約スルト雖モ其期ヲ過去タレハ則原告ノ誤ナリト考候トアル事

第三 右同人カ明治十四年九月廿日始審廳ニ於テノ口供ニ「明治十年證書改正ノ際口約  
ナルハ該家屋並ニ田畑共金額三百圓ト定メ原告ニ於テ金員出來元利返濟相成候ハ、返  
却致スヘク儀ニ有之尤年季相定メ不申候」トアル事

右ノ三ヶ條ハ何レモ上告人ヲ以テ違約者ト爲スノ證據ニアラス且代人カ委任ヲ受ケタル  
旨趣ニ反セシ中狀ヲ直チニ採用セシハ不法ナリトノ事

被告上告者ハ原裁判所ノ裁判ハ不當ニアラサル旨ヲ述テ辯護セリ

判決

被告上告金子初五郎ニ於テ本訴ノ物件ハ根元抵當ヨリ起リ明治十三年十二月迄受戻シノ權利  
ヲ保有スト主張シ上告人内山保次郎ハ明治九年限りニテ買戻サシムルノ義務ハ竭キタリト  
主張スル者ナリ

東京控訴裁判所ハ金員出來次第元利返濟スレハ返還スルノ約束タル事判然ナリト云フ初審  
裁判ノ通リト云渡シタリ

右云渡シノ理由ハ上文ニ掲載セシ上告要領中ノ三ヶ條ニ原ツクモノトス

然ルニ右三ヶ條ノ一タル扱人羽鳥新八ヨリ保次郎へ宛タル明治十四年六月廿六日附書翰ハ本月十五日期日ニテハ當惑ニ付八月十五日迄猶豫ヲ乞フトノ文意アルヲ以テ保次郎ハ六月十五日迄ノ猶豫ハ許諾セシ事アルモ、如シ然レトモ金子出來次第差戻ス事ヲ許諾セシト見ルニ足ルモノナシ

又其三ヶ條ノ一タル保次郎代人須賀清三郎カ明治十四年八月廿九日附ヲ以テ始審廳へ差出シタル上申書中「去ル明治十年度證書取極メノ際原告人金子初五郎儀元金三百圓及ヒ小作金家賃滞分等返濟ノ上ハ買戻シ度段敷有之レトモ管口約而已ニテ該證差出候儀決シテ無之」トアルニヨリ原裁判所ハ既ニ口約アリタルモノト認メタルカ如シ

右ノ解釋ハ姑ク相當ト爲スモ金子出來迄猶豫セシ文意ハ嘗テアラサルナリ

又其三ヶ條ノ一タル保次郎代人カ明治十四年九月廿日ノ口供ニ「金員出來次第元利返濟相成候ハ、返却致ヘク儀ニ有之尤年季相定メ不申候」トアリ是レ無期限ニテ買戻ノ權利ヲ與ヘタルモノ、如原裁判所ハ此口供ニヨリ前二ヶ條ニ一層ノ勢力ヲ保タシメ遂ニ三ヶ條ヲ以被上告人ハ金子出來次第何時ニテモ買戻シ得ヘキ權利アリト認定セシカ如シ然ルニ右ノ口供タルヤ本人ノ自認ニ非スシテ代人ノ陳述タリ而シテ其代人ハ最初被上告人ノ請求ヲ拒絕スルノ答辯書ヲ出シ置ナカラ被上告人カ明治十三年十二月ヲ以滿期ト云フニモ關セス無期限ノ約定ナリシトハ何ノ原ツク所アリテ爾カ陳述セシヤ實ニ前後不都合ノ陳述ニシテ本人ノ自認ト同視スヘカラサルモノトス原裁判所ハ代人ノ申立ハ後日異議ヲ唱ヘサル旨誓言セシニ非スヤト云ヲ以テ上告人ノ申立ヲ擯斥セシト雖モ此代人ハ他ノ請求ヲ拒絕スルノ委任

ヲ受ケタル者トコソ看做スヘク決シテ請求者ノ意ニ同スヘキ委任ヲ受ケタル者ト看做スヘカラス斯ノ如キ代人ニシテ翻テ請求者ニ同意ヲ表スルノミナラス一層太シキ無期限ナリト陳述セシカ如キハ委任權外ノ陳述タル事論ヲ俟タス然ルチ原裁判所ニ於テ本人ノ自認ト同視シ被上告人ハ金子出來次第買戻スノ權利アリト云フ始審裁判通リト云渡セシハ不當ナリトス

右ノ理由ナルヲ以テ東京控訴裁判所ノ裁判ヲ破毀シ更ニ名古屋控訴裁判所へ移スニヨリ其裁判ヲ受クヘシ

但上告入費ハ被上告人擔當スヘシ

第五百八十八號

○買戻田地不渡上告ノ判文(明治十五年九月十八日上告) 全十五年十二月廿六日申渡

新潟縣越後國刈羽郡藤掛村平民

池田勘次郎代言人

東京府神田區淡路町一丁目一番

地寄留山口縣平民

大岡育造

新潟縣越後國刈羽郡藤掛村平民

池田ナカ

買戻田地不渡一件東京控訴裁判所ノ裁判ヲ不法トシ上告シテ破毀ヲ要ムル主點左ノ如シ

被上告人

上告人

一被上告家ハ絶家トナリシモノナルヲ一時ノ不在ナリトサレシトノ事

一上告者ハ被上告者ノ本家トサレシトノ事  
一上告者カ全ク恩惠ヲ以テ被上告人ニ土地ヲ贈與セシ廉ト明治二年迄被上告家ノ世話ヲナシタル廉ヲ以テ上告人ヲ目シテ被上告人ノ管財人トサレシトノ事

一被上告者ハ論地ニ付テハ最早何等ノ權利ヲモ有セサルモノナルニ上告者ハ右被上告者ノ權利ニ代リ論地ヲ買得タルモノトサレシトノ事

右主點ニ付上告狀参照ノ上辯明判決アラント乞フ

辯明

第一條

上告人カ絶家トナリシモノナリト申立ル被上告家ハ成程明治十二年六月ニ於テ一旦廢戸トナリシコアルモ上告人カ論地買戻ヲ依托サレシ時即明治八年比該家公然タル戸籍上ニ存在セシコハ上告人モ自認セシ通りナレハ其際被上告人ハ唯他所ニ在リシ迄ノモノナリ左スレハ原裁判所被告カ(被上告人)ハ當時不在ト云シハ當然ノコナリトス

第二條

上告者ハ被上告者ノ本家ナリトノコハ原裁判書類中見ルヘキモノナシ然ルニ原裁判所カ原告(上告人)ハ其本家ニ云々ト申渡セシハ杜撰ヲ免サレスト雖モ右ハ本按(本按ハ下條ニ影響セサルヲ以テ破毀ノ限ニ非ストス)

第三條

上告者カ恩惠ヲ以テ被上告人ニ土地ヲ與ヘタルト明治二年迄被上告家ノ世話ヲナシタルトノ兩廉ヲ以テ上告人ヲ口シテ被上告人ノ管財人トサレシハ不當ナリト申立レ其恩惠云々ノコアル之ヲ原裁判書類ニ徴スルニ被上告人ハ其六號證ヲ掲ケ被控訴者(被上告人)ノ宅地ヲ控訴者(上告人)ニ於テ畑トナシ專斷ヲ以テ自分ノ名義トナシ居タルヲ被控訴者(被上告人)ヨリ之ヲ取戻サント迫リタル處金圓ノ授受無之シテ返戻セリ是レ控訴者カ被控訴者ノ財産ヲ管理シ居タル證據ナリト申立テタルニ對シ上告人ハ逐一ノ辯解ヲナス能ハス結局上告者ハ右土地ヲ無代價ニテ被上告人ニ引渡タルコト判然セシモノニシテ普通一般ノ恩惠ヲ以テ物件ヲ與ヘタルモノト同視スヘキ事實ニ非ス加之被上告甲第四號上告人カ被上告人ノ家事悉皆支配致セシ事ノ保證ニ對シ上告人ハ何等辯駁セシコトナシ左スレハ原裁判所カ明治二年迄被上告家ノ世話ヲナシタルト云上告人ノ自認ト上告人カ被上告人ノ財産ニ關係アリタレハコソ其宅地ヲ自分名義ニモ爲シ又後日之ヲ異議ナク被上告人へ引渡シモナシタル等ノ景況アルトヲ參考シ上告人ヲ目シテ被上告人ノ管財人ナリト認シハ理由アル相當ノ認定ナリトス

第四條

明治八年度上告人カ論地ヲ他ヨリ買戻セシ際被上告家ハ絶家ニ非リシコト上告人カ當時被上告家ヲ管理セシコトハ前條辯明ノ通ナレハ被上告人ハ論地ニ付何等ノ權利ヲ有セスト云テ得ス抑上告人カ論地(年期ノ内外)ニ始メ其他該村民ヨリ他へ渡アル土地ヲ買戻セシハ該村民ノ委託ヲ受ケ其委託者ニ代リ之ヲ爲セシコトハ甲第三號并ニ附屬證ニ於テ明白

ナリ而シテ被上告人モ其委託者ノ一人(當時絶家ニ非サル故)ナレハ原裁判所カ被上告人即チ委託者ノ權ニ代リ論地ヲ引取タルモノト認定セシモ之ヲ不當ト云テ得ス  
 但シ被上告者ハ甲第一號證ヲ以テ論地ヲ請求セシニ原裁判所カ該證ニ憑ラスシテ他ノ點ヨリシテ裁判ヲ與ヘシハ不當ナル旨申立レテ兩造ノ爭ヲ斷スルニ方リ其雙方ノ申供及ヒ證據物ヲ摘裁スルハ判官ノ權内ニ在ルモノナレハ何レノ申立何レノ證據ヲ採テ爭訟ヲ決スルモ之ヲ不當ト云テ得ス其他縷々ノ上告ハ主點ノ外ニ亘ルモノニシテ緊要ナラサルヲ以テ一々辯明セス

判決

右之筋合ニ付明治十五年七月二十七日東京控訴裁判所カ本件買戻田地不渡ノ訴ニ對シ與ヘタル裁判ハ破毀スヘキ理由ナシ

但シ上告入費ハ上告人ヨリ辨納スヘシ

第五百八十九號

○家賃催促上告ノ判文(明治十五年十月廿五日上告全十五年十二月廿六日申渡)

千葉縣下總國印幡郡佐倉宮小路

町十一番地士族中野濟治

代言人

東京府日本橋區濱町二丁目十二

番地寄留熊本縣士族

上告人

坂本省三

千葉縣下總國印幡郡錦木村六十

五番地士族

櫻井勇義

被上告人

家賃催促一件東京控訴裁判所ノ裁判ヲ不法トシ上告シテ破毀ヲ求ムル要領左ノ如シ

第一條

原判文第一條前段ニ於テ「被告ハ本訴ノ地所建物ハ原告ニ質入シタル者ニアラスト申立レテ質入シタル者ナルコトハ甲第二號證被告ノ陳述ニ明瞭ナルノミナラス云々」ト判定セラレシハ上告人ノ陳供ヲ誤リタル不法ノ裁判ナリ何者上告人ハ始ヨリ質地ノ契約ヲナサハリシト陳供シタルモノニアラスシテ本訴家屋ハ縣廳ヘノ上納金ヲ原告ニ於テ立換上納致タル上引渡ス所存ノ處原告ニ於テ右金立換サルヲ以テ家屋ハ未ダ引渡サス質地ノ契約原告ニ於テ既ニ破毀シタル者ナリ(十五年五月廿九日口供)ト陳供シ其他該契約ノ今日無効ナル事柄ヲ申立タルモノナレハナリ

第二條

又同條後段ニ於テ「内務省乙第三十四號達ハ論地質入後ニアルヲ以テ該契約ヲ消滅スルコトナシ」ト判定セラレシハ不法ノ裁判ナリ何者本訴物件ハ明治六年第四百二十五號公布拂下規則ニ依リ上告人カ拂下タル物件ニシテ其規則第三條ニ「管轄廳ニ於テ代金上納申付地券相渡可申云々」トアリ然シテ明治九年内務省乙第三十四號達ニ「代金年割又ハ月割

上納等ニテ未納中ハ拂受ケ人ハ其土地假有者ニソ所有ノ權無之等右地代金皆納以前ハ地券授與不致管候依テハ從前授與シタル分モ右未納中ハ質入書入難相成云々」トアリテ該達ハ契約後ノ發令ニ係ルモ新ニ達タルノ旨趣アルニアラスシテ前掲公布ノ旨趣ヲ説明シテ以テ心得違ナキヲ注意シタル迄ニ過サレハ質入契約カ該公布ノ後ニ係ル以上ハ假令右内務省達ノ前ニアルモノトスルモ該公布ノ支配即チ内務省達ノ旨趣ニ違フ可キモノナルト他ニ辯論ヲ要セスシテ明カナルニ原裁判所ニ於テ前掲ノ判決ヲ下サレシハ單ニ法律ハ將來ヲ制スルモノナリトノ一般ノ法理ニ誤ラレ一般ノ原則ハ格段ノ法律ニ制セラルヘキ眞理ニ基カサル不法ノ裁判ナリト思考セリ

第三條

又原裁判所ハ判文第二條中被上告ニ於テ質物件ニ對スル地租及ヒ民費ヲ支辨セストテ一概ニ其契約ヲ破リタルモノト爲スト判定セラレタレモ果シテ質取主タル以上ハ地租及ヒ民費ヲ支辨スヘキハ法律ノ命スル所ナルノミナラス現ニ被上告カ提供セシ一號證ニ於テモ「於然者質入中貴殿方ニテ地租諸役共可被相勤等」ト掲載アル如ク被上告ニ於テ是等ノ支辨ヲナス可キハ質取主ノ本分ノ義務ナルニ之レテ是レ盡サ、リシハ即チ被上告自ラ該質入契約ヲ無効視來ルノ明證ニアラスシテ何ソヤ然ルニ原裁判所ハ是等ノ事實ヲ蔑視シ漫然前陳ノ判決ヲ下サレシハ審理不盡ノ裁判ナリト思考セリ

第四條

又原裁判所ハ判文同條ニ於テ「上納金ノ如キハ原被ノ間ニ爭論ヲ生シ夫レカ爲メ上納セ

サリシモノナリ」ト判定セラレシモ原被間此上納金ノ「ニ付テ爭論シタル」曾テ之レ無レハ被上告ニ於テモ此申立ヲ爲シタル「アテ」サリシニ前陳ノ判決ヲ下サレシハ訴訟人ノ供述セサル點ニ立入タルノミナラス事實無キ「ヲ」構造セシ不法ノ裁判ナリト思考ス加之被上告第一號證ニ於テ質物件ノ代價即チ拂下代金ヲ被上告ニ代納セシムルノ特約アルハ前第二條ニ陳述セシ如ク上告人カ未タ質物件ノ所有者タラサルヲ以テナリ何者上告人ハ右納金サヘ完済スレハ直チニ所有權ヲ全フスル者ナルニ付被上告チシテ此代納セシムルト同時ニ該契約執行シ本訴物件ヲ引渡管ノ契約ナレハナリ若シ被上告ニシテ該代納「ヲ」承諾セサリシナラハ上告人ハ此質入ノ契約ヲナサ、ルナリ否爲シアタハサルモノナリトス夫レ然リ而ルニ原裁判所ハ被上告ニ於テ質代金ニ包含スル所ノ物件ニ對スル代納ノ義務ヲ果サ、ルノミナラス其地租等ノ支辨ヲモナサスシテ今ヤ其物件ヨリ揚ル收益ノ「ミ」チ得ントノ求メチナシタルニモ拘ハララス前陳ノ判決ヲ下サレシハ疎漏ノ審判ニシテ所謂審理不盡ノ裁判ナリト思考ス

第五條

又原裁判所ハ判文第三條ニ於テ上告人ニ於テ質物件ヲ引渡サ、ルヲ以テ其借家料ノ契約ヲ爲サ、ルモ其家賃ヲ拂フヘキハ當然ノ「ヲ」ナリトシ上告人カ承諾スルト否トニ拘テス月々金貳圓ノ借家料ヲ拂フヘシトノ裁判ハ即チ未タ結ハサルノ契約ヲ履行スヘシトノ謂ヒニシテ不法ノ裁判ト云ハサルヲ得ス何者假令借家料ヲ拂フヘキノ義務アリトスルモ月々二圓ヲ拂フヘシトハ謂ハレナキ金高ナレハナリ

一明治十五年十二月十五日同十九日附追補狀アリ

三三三

辯明

第一條

第一條ノ上告ニ付原裁判書類ヲ取調フルニ上告人カ明治十五年五月廿九日原裁判所ノ口供ニ本件家屋并ニ地所ノ質物ト相成居ラサルコトハ前項ノコトニ止マラス該證(甲第一號質物)中云々トアリ又上告狀中ニ掲ル如ク質物ノ契約ハ原告ニ於テ既ニ破毀シタルモノナリト云ヒ其歸着スル處質入セシニ非スト云シモノナレハ原裁判所カ被告(上告人)ハ本訴ノ地所建物ハ質入シタルモノニアラスト申立レヒ云々ト申渡セシハ上告人ノ陳供ヲ誤リタルモノト云テ得ス

第二條

上告人ハ明治九年內務省乙第三十四號達ハ明治六年第四百二十五號公布(地所拂下規則)ノ旨趣ヲ說明シタルモノナル等ヨリ論シ來テ本訴ニ係ル地所建物ノ質入契約ハ消滅シタルモノナルヘキ旨申立レヒ本訴ニ關スル地所建物ハ曩ニ上告人ヨリ被告上告人ニ對シ質物ニ差入レ質代金二百圓ヲ受取タル事實ハ動カサルモノニシテ現ニ甲第一號質入證ハ被告上告人ノ手ニ在リ該二百圓ノ金ハ上告人ノ融通シアルモノニシテ毫モ之ヲ取消タルコトナキモノナレハ上告被告上告雙方間ニ於テハ今尙其契約依然トシテ存スルモノナリ左スレハ原裁判所カ內務省乙第三十四號達ハ論地質入後ニアルヲ以テ該契約(質入)ヲ消滅スルコトナシト云シモ本按ニ於テ妨ナキモノトス

第三條

被告上告人カ地租民費ヲ怠ルモ前條辯明ノ如ク上告被告上告雙方間ニ於テ既ニ結了セシ質入契約ノ如何ニ差響ク筋アルコトナシ依テ原裁判所カ原告(被告上告人)カ地租民費ヲ支辨セストテ一概ニ其契約(質入)ヲ破リタルモノト爲スヲ得スト申渡セシハ不當ニ非トス

第四條

本件ニ關スル地所建物拂下代金上納ノコトタル被告上告第二三號證ノ如ク曩ニ上告被告上告ノ間ニ於テ讓渡證并ニ地券書換要求ノ訴訟ヲ取結ヒ明治十三年三月三十日東京上等裁判所ニ於テ原告(本訴ノ被告)ハ地所建物代金ヲ上納シ被告(本訴ノ原告)ハ原告要求ノ通り履行スヘシト言渡サレ其末上告シテ破毀トナリ宮城上等裁判所ニ移サレ今尙爭訟中ノモノナリ左スレハ原裁判所カ上納金ノ如キハ原被告ノ間ニ爭論ヲ生シ其レカ爲メ上納セサリシモノナリト申渡セシハ不當ニ非ス

第五條

本件家賃月々金二圓ノコトタル上告人カ承諾セサルモノナルモ前第三條辯明ノ通り上告人ニ於テ既ニ地所建物共質入ニナシタル以上ハ其物件ヲ無賃ニテ使用スヘキニ非サルハ論ヲ駁サルナリ而シテ被告上告人カ其請求スル家賃ノ員數タル比隣ノ貸屋ニ照シタルモノナル旨原裁判所ニ於テ申立タルニ上告人ハ之レニ對シ論辯セシコトナク且右家屋建物ノ質代金二百圓ニ月々二圓ノ利ヲ付スルモ敢テ過當ニ非サルヲ以テ原裁判所カ右旁ノ條理ヲ推究シテ家賃契約ノ有無ニ拘ハラズ之ヲ拂フヘシト申渡セシハ事理ヲ酌タル適當ノ裁判ナ

三三三

リトス

但シ明治十五年十二月十五日退補狀ノ旨趣ハ本條辯明中ニ就テ解得スヘシ同十九日ノ追補狀出訴期限云々ノハ原裁判所ニ於テ本按ノミニ對シ答辯シ右ノ點ニ付申立シコナケレハ之ヲ以テ原裁判ノ當否ヲ論スルヲ得サルモノトス

判決

右ノ筋合ナルヲ以テ明治十五年八月廿六日東京控訴裁判所カ本訴家賃催促一件ニ對シ與ヘシ裁判ハ破毀スヘキ理由ナシトス

但シ上告入費ハ上告人辨納スヘシ

第五百九十號

○入會秣場爭論上告ノ判文(明治十五年一月十日上告  
十五年十二月廿七日申渡)

神奈川縣武藏國西多摩郡網代村

細田富士太郎外二十五名代言人

東京府神田區今川小路二丁目十

五番地平民

志 摩 萬 次 郎

神奈川縣武藏國西多摩郡伊奈村

外二ヶ村總代人山田村平民

石 川 傳 三

上告人

被上告人

同縣同國同郡伊奈村平民總代人

野 崎 林 三

上告要領

第一條

原裁判所判文第一條ニ「畢竟該書八項ノ取調杜撰ニシテ同書主眼ノ文字タル有姿ナラサルニ由リ再ヒ本論ヲ惹起セシ「明白ナリトス」云々トアリ右ノ趣意ハ蓋シ本訴爭論ノ形跡ヲ以テ以前ノ取調ハ有姿ニ背ケル取調ヘナリトセラル、モノナルヘシ然レモ本論ハ被上告第四號證成立タル際ノ爭論ト同シカラス該四號證成立タル際ノ爭論ハ被上告第二號證(上告第一號證)地券名受ケニ係ル爭論ニシテ本論ハ入會地ノ四十六町九反四畝三歩ニシテ二十九町二反三畝十四歩ハ上告村ノ林地芝地等ニテ右ノ如ク取調濟ニナリタルモノヲ被上告ハ敷度自ラ調印セシ入會地ノ四十六町九反四畝三歩ハ誤リニシテ上告村所有ノ取調トナレル二十九町二反三畝十四歩ハ入會地ナリト云ヘルニ關スル爭論ナリ而シテ被上告第二號證地券ノ地所果シテ四十六町餘反歩ナルヤ又ハ二十九町餘反歩ノ地所モ此ノ中ニ含蓄セルモノナルヤ否ハ被上告第四號證當時ノ爭論ヲ以テ知ヘカラス何トナレハ當時ノ爭論ハ實物ヲ以テ爭フタルモノニアラスシテ唯券面ノ名義ヲ爭フタルモノナレハナリ去レハ券面地所ノ何程ナルヤチ知ルヘカラサルノミナラス前後ノ爭論ハ秣場即チ實物ト券面即チ名義トノ別アルモノト云ハサルヲ得ス豈之ヲ再度ノ爭論ト強ユルヲ得ンヤ但被上告第四號證ハ正シク券面ノ爭論ナレハ番外第一第三第五第六項ニ照シテ知ルヘシ良シ之

ヲ再度ノ爭論トスルモ爭論ノ惹起セシ形跡ヲ以テ以前雙方カ承諾ニ出タル取調ヲシテ無効ナラシムルハ更ニ解セサル所ナリ且夫レ原裁判所ハ被上告第四號ナル有姿ノ文詞ニ重量ノ價ヲ與ヘラル、カ如キモ元來該證ハ被上告ニ於テ唯手續迄トシテ呈セシモノナリ(番外證)被上告カ控訴ニ於テ該證ニ依據シテ喋々セシモノハ初審判文ニ於テ該證ヲ主眼トシ判定セラレタルニ依ル若シ初終審判旨ノ如クナレハ其本タル被上告ニ於テ最初ヨリ骨子主眼トスヘキ筈ナリ去レハ該證ヲ主眼トセシハ被上告ノ意ニ背ケルモノト云フモ可ナリ

又次キニ(果シテ然ラハ初審ニ於テ必ス其趣ヲモ可申立筈云々)トアレモ現ニ初審ニ在テ被上告第三四號證ハ四十餘町歩ノ地所ヲ示シタル書類ニシテ決シテ他ノ場所ヲ入會地ナリト云フ書類ニアラサルヲ明言セリ個ハ番外證第十六項ニ照ラシテ知ルヘシ良シ其旨申立サリシトテ其證書自ラニ於テ關係セシヲ知ルヘカラサレハ無關係ナリトノ證左ヲ擧クヘキ責任ナシ況ンヤ現ニ其中立アルナヤ

又次キニ(其有姿ヲ兩造連署シテ實地檢査チ乞フ等ノ運ヒニハ至ラサルヘシ云々)トアレモ決シテ其有姿ニ付檢査チ乞ヒタルイナシ元來實地檢分ハ原被ニ於テ希望スルモ官ノ命令ニ出ツ(被上告控訴)該番外證ヲ見ルモ其有姿ニ付檢分チ乞ヒタルイナキヲ知ルヘシ抑モ本件ハ秣場境界ノ爭論ニシテ馬骨アリト云ヒ境界標アリト云ヒ何ノ地ハ北ニアリ又南ニアリ方位ハ云々位置ハ云々ト(番外證第十項)トノ爭ヒアレハ立木有無ノ他ニ檢分チ乞フヘキ事實アリ是等ノ事實アリテ而シテ受書中有姿ノ記載ナキニ斯ク判定セラレタル

ハ誤リノ大ナルモノナリ

且夫原裁判所ハ初審ノ檢分ヲ相當ナリト思料セラレタルモノナルヘシ果シテ然ラハ惑ヒト云ハサルヲ得ス何トナレハ初審廳ハ明治八年本論ヲ發セシ以來ノ生長ニ係リト云ヘシ然レモ上告者ハ論地ニ於テ常ニ秣刈取り居リ而シテ雙方ヘ刈取セサル旨達セラレタルハ明治十一年ナリ(番外證第十)若シ明治八年以來刈取ラサルモノナレハ決シテ十一年ニ在テ其禁達アルヘキ筈ナシ去レハ茲ニ三年ノ差ヲ生シ事實ニ適セサル檢分ナレハナリ抑モ控訴判官ハ山林芝地秣場ハ如何ナル區別ノアルヘキモノトセラル、ヤ文詞ニ基キ推定セハ蓋シ二三年ノ生木ハ之ヲ秣ト稱スヘカラス然ルチ其景狀ヲシテ秣場トセラレタルハ事實ヲ誤ルモノト云フ可シ

第二條

又其第二條ニ(高引納稅ノ證據ナク且被告第二十二號證モアルニヨリ其中立ヲ採用セサリシナリ)「中畧」世間公事ニ負ルト云フコトハ絶テナキモノ云々)トアレモ凡事物ノ現存者ハ疑チ他人ニ容レラル、アルモ支障トナラサルノミナラス決シテ所有權利ヲ得タル原由ヲ證明スヘキ責任ナシ況ンヤ山林若クハ秣場ノ如キ殊ニ從前證據ニ乏シキ地所ニ對シ其源由ヲ探究シ聊カ疑フヘキ廉アレハ現存者ノ所有ニ非ストセハ非理不法焉ヨリ甚シキハナシ故ニ假令現存者ニ聊カ疑ノ容ルヘキアルモ其事物ヲ爭フモノニ於テ確證ナケレハ現有者ハ爲ニ所有權利ヲ失却スヘキニ非ス而シテ被上告第二十二號證ハ唯第一號證ノ印章ヲ慥ムルノミノ證左ナレハ固ヨリ取ルニ足ラス且夫レ上告者ニ於テ村吏ノ書上ヲシテ無



効ナリトセシ所以ハ現ニ控訴狀ニ記載セシ如ク論地ノ内第一號第四號乃至第七號ノ五ヶ所ハ元村民カ各自古來ヨリ所有進退シ來レル地所ニシテ且地券名受テセシモノナレハ被上告第二十號證ノ如ク假令村吏カ一般地所ノ書上ニ際シ偶々書誤リアルモ他ニ確乎タル證跡ノ見ルヘキアレハ該第二十號證村吏ノ書誤ハ支障トナラサル旨供述セシモノナリ然ルチ該書誤チ無効トセシ原由即チ地券名受ケ云々古來進退云々ハ措テ問ハス獨リ無効云々ノ言ノミチ舉示シテ排擲チ加フルハ豈ニ其本チ正サ、ル不當ノ裁判ニアラサルチ得ンヤ

第三條

又其第三條ニ「本案雙方ノ證據書類全カラサルニヨリ「中畧」他ノ證據ニ參照シテ有姿如此ト定メラレタル云々」トアレハ被上告者ノ證據ハ全カラス否無證ト云ヘキナリ然レモ上告者ハ其第九號十號十八號等ノ如キ確實ナル證據アリ（確實ノ説明ハ）而シテ地所形跡ノ異同チシテ若シ證據トスルチ得ハ例ヘハ甲者ノ服ニ同一ナル乙者ノ衣服ハ甲者ノ所有トスルカ凡ソ動産トナク不動産トナク景況ノ異同ハ決シテ所有權利チ識別スルノ具トナラス且又他ノ證據トハ如何ナル證據チ指示セルモノナルカ判文中一モ被上告者ノ證據チ掲載セスシテ斯ク漠然「判シ來ルハ裁判ノ法規ニ違フモノト云フヘシ抑モ被上告者カ呈上セシ證據物ハ其數多シト雖モ一モ見ルヘキ證據ナキニ非スヤ然カモ見ルヘカラサル證據ニ由リ用ユヘカラサル景況ノ相似タルチ資料トシテ判定セラレタルハ是亦誤謬ノ裁判ナリト思考ス

第四條

又第四條ニ「原告村ハ家數三十軒ニ足ラサル小村ニテ「中畧」且證書ノ字名相違セシニ由リ形狀死馬捨場ノ如クナラサルニ由リ云々」トアレハ其形狀死馬捨場ノ如クニアラストハ何ニ依テ斯ク認定セラレタルヤ控訴判官ハ實地檢分セサレハ實地ノ形狀チ知ルニ由ナシ且初審判官ハ形狀上ヨリ死馬捨場ニアラスト判セラレタルニアラサレハ初審ノ判文ニモ由ルヘカラス形狀云々ハ蓋シ妄想ヨリ出ツルモノナランカ而シテ字名ノ如キハ上告第二十號圖チ一見スルキハ決シテ相違セサルチ知ルヘシ控訴判官ハ該圖チ一見セシコナキカ且又家數耕馬ノ多少ハ未ダ以テ其證トナラス若シ之チ證トスヘケレハ例ヘハ家族ノ寡少ナル者カ大厦ニ住シ貧困者カ土藏チ有スルアラハ其大厦土藏ハ其者ノ所有ニアラストスルカ豈如斯道理アラシヤ貧困者ニシテ土藏チ有スルアレハ聊カ疑フヘシトスルモ凡ソ疑念ハ事物チ判スルノ具トナラサルナリ而シテ死馬捨場ハ五反步餘ナリ然ルチ上文ノ如ク判セラレタルハ豈之チ不當トセサルチ得ンヤ

第五條

又其第五條ニ「其文書未縣廳ニ達セサルニ紛紜チ生シ中畧之チ他ノ證據就中實況ニ就テ判定セサルチ得サル儀云々」トアレハ凡ソ不動産ニ係ル契約ハ互相間ニ對スルト他人ニ對セルトノ二者ニ區別スヘキモノナリ若シ他人ニ對スル場合ノ如キハ或ハ其達スヘキ場所ニ達シテ効力チ有スヘシ然レモ互相間ニアリテハ之チ要セス試ニ控訴判官カ引例セラル、所ノ公訴ニ付テ辯センカ甲者己レノ家屋チ乙者ニ賣與シ彼我間ノ契約書既ニ調製

セリ然レモ未タ公證ヲ得ス此ノ場合ニ於テ乙者カ其公證若クハ其引渡ヲ請求セシテ甲者拒ンテ曰未タ公證ヲ得サレハ契約書ハ未タ其効力ヲ有セスト主張セハ必ス控訴裁判官ハ甲者ノ言ヲ至當トハナサルヘシ故ニ若シ文書ノ縣廳ニ達セサル以前他人ニ對スルキハ未タ其効ヲ有セサルモノトスルモ彼我間ニ於テ豈ニ確證ニアラストスルヲ得ンヤ加之上告第十號證ハ扱所ニ領置シアルモ上告第八號第九號第十八號ハ既ニ進達ニナリタルモノナリ個ハ番外證第二五項ニ照シテ知ルヘシ去レハ進達云々ハ啻ニ事理ヲ誤ルノミナラス事實相違ノ判定ナリ且又該五條ニモ他ノ證據云々實地云々トアレモ既ニ前三條ニ述ル如ク妄斷ニ出ツルモノナレハ是等ハ被上告者數度ノ調印ヲシテ錯誤ナリトスルノ證左トナラス妄斷モ亦甚シト云フヘシ

第六條

又其第六條ニ「都テ初審裁判ノ通り相心得云々」トアレモ論地番外第二十號證ニ付上告者ハ其第十一號證ヲ舉ケ上告者ノ所有ト云ヒ被上告者ハ否スト爭ヒタル所初審判官ハ該爭ヲ論地番外十九號ニ對スル爭論トシ判定セラレタルヲ以テ之レカ相違ノ旨ヲ原裁判所ヘ申立被上告亦上告者ト同様相違ナル旨ヲ申立タリ（番外證第二項）去レハ初審判文第三條ノ相違ナル事柄ハ原被告共ニ供述スル所ナリ然ルニ都テ初審判文ノ通ト判定セラレタルハ聽斷ノ定規ニ違フモノト謂ハサルヲ得ス

第七條

抑モ本件ハ被上告ハ舉證ノ責任ヲ有スル起訴者即チ初審ノ原告ナリ而シテ上告第三號證

ニ入會株場三十餘町及ヒ二ヶ所云々アルヲ圖面ニ比照セハ草色部分ノ二ヶ所ナルヲ推知スヘシ若シ入會地ヲシテ被上告者カ云フ如ク接續地タラハ二ヶ所ト分別スヘキ謂レアラソヤ加フルニ論地ハ上告者ノ所有タルヲ明記シアル第九號第十號第十八號明治八年以來三度調印シ本訴論地ノ入會地ニアラスヤ凡人平易ノ日ト雖モ容易ニ錯誤ナリトシ調印ヲ取消ス間ノ爭論局ヲ結ヒシ際ニアラスヤ凡人平易ノ日ト雖モ容易ニ錯誤ナリトシ調印ヲ取消スヲ得ス況ンヤ如斯場合ニ於テチヤ抑モ被上告者ノ證ハ第四號證ノ有姿云々ノ二字ニアリ而シ該文詞ノ解釋ニ於ケル論地外ト雖モ形跡ノ類似セルアレハ都テ入會地ナリトスルモノナリ然レモ原裁判所ト雖モ該解釋ハ採用セサリシナリ被上告者ノ證左如斯上告者ハ之ニ反シ上告第三號第九號第十號第十八號其他數證ノ證スルアリ去レハ上告者ノ證憑ハ確實ニシテ被上告者ハ無證ト云ハサルヲ得ス況ンヤ舉證ノ責任ヲ有セル位置ニシテ上告者ノ位置其責任ナキヤ

上告者ノ口供

初審ノ判文第二條ニ論地ノ内第二十號ニ對スル爭論ヲ第十九號ノ爭論ト誤判セラレタルトハ原被雙方ヨリ原裁判所ヘ覆審ヲ仰キタル處何等ノ裁判ヲ與ヘラレス都テ初審裁判ノ通ト言渡サレタルハ不當ナル旨上告要領第六條ニ陳述シタル處被上告者ニ於テ右第二十號ニ對スル權利ハ拋棄シタル趣申立抗辯セサル上ハ上告者ニ於テモ原裁判所ノ判文第六條ノ當否ハ敢テ辯論ヲ要セス候事

被上告者ハ上告要領第六條ヲ除クノ外上告ノ旨趣ハ總テ不當ナル旨申立原裁判所ノ裁判ヲ

辯護シ且初審ノ判文第三條ニ論所ノ内第十九號字赤阪トアルハ同字廿號ノ誤判ナルハ原告  
被告雙方ノ承認スル所ニシテ初審廳ニ於テ到底第廿號ニ對スル被告ノ請求ハ採用セラ  
レス而シテ又原裁判所ニ於テモ初審裁判ノ通リト判決セラレタレトモ敢テ上告ヲサス該  
地ニ對スル權利ハ拋棄シタルニ付上告要領第六條ニ對シテハ抗辯セサル旨申述セリ

辯明

第一條

上告者ハ原裁判所ノ判文第一條ニ「畢竟該書(被上告)第八項ノ取調杜撰ニシテ同書主眼  
ノ文字タル有姿ナラサルニ由リ再ヒ本論ヲ惹起セシテ明白ナリ」トアルヲ不當ナリトシ  
被上告第四號證ハ地券名受爭論ノ結局成立タルモノナレハ券面ノ地所ハ何程ナルヤ知ル  
ヘカラス該證ノ成立タル際ノ爭論ハ地券名受ノ爭論ニシテ本論ト異ナレハ本論ヲシテ再  
度ノ爭論ト強ニヘカラスアルトノ旨趣ヲ反覆論述スレトモ上告者カ初審ノ答書第三條ニ  
「入會地ハ該地券面(明治六)記載ノ場所トニ止リ曾テ他ニ入會地アルコトナキニ原告(被上  
告者)ハ他ノ場所ヲシテ入會秣場ナリト云ニ依リ明治八年再度紛紜ヲ生セシ」云々トアリ其爭  
論ノ調和シタル顛末ヲ神奈川縣出張ノ官吏ヘ差出シタル届書即チ被上告第三號證ニ「從  
前入會ノ場所境界論地ノ廉逐一御糺ヲ受御説諭之趣一同承知仕」云々トアリ由是視之當  
時ノ爭論ハ地券名義ニ止ラス實地ノ境界ニ係タルモノナレハ何ソ本論ト異ルコトアラシヤ  
而シテ其濟口一札即チ被上告第四號證第八項ニ「右秣場ノ儀現今有姿ヲ以テ改正反別申  
上候ニ付」云々トアルヲ以テ當時其有姿即實地ノ形狀及ヒ境界等判然取調明記アレハ爾

後復ク葛藤ヲ生スヘキ理由アラサレトモ當ニ有姿トノ記載ヲ取調疎漏分明ナラサルヨ  
リ終ニ本論ヲ釀生スルニ至リタルモノナレハ原裁判所ニ於テ「畢竟該書第八項ノ取調杜  
撰ニシテ再ヒ本論ヲ惹起セシテ明白ナリ」ト判決シタルハ不當ニ非ルナリ  
又上告者ハ論地ノ秣刈取ヲ禁セラレタルハ明治十一年ナルニ初審廳カ論地内ノ立木ハ明  
治八年本論ヲ發セシ以來ノ生長ニ係ルトハ事實ト相違シタル檢分ナリ然ルチ原裁判所ニ  
於テ之レヲ相當ナリト思料セラレタルハ誤認ナルカ如ク論述スレトモ初審ノ判意ハ明治  
八年ノ生長ナリトノ謂ヒニ非ス本論ヲ發セシ以後ノ生長ニシテ從前ヨリノ生木ニ非ルト  
ノ旨趣ナレハ假令論地ニ於テ明治十一年マテ秣刈取同地ノ立木ハ同年ヨリ以來ノ生長  
ナリトスルモ初審廳ニ於テ明治八年本論ヲ發セシ以來ノ生長ニ係ルト判決シタルハ何ソ  
事實ト相違スルコトアラシヤ故原裁判所ニ於テ初審ノ檢分ヲ相當ナリトシタルハ誤認ニ非  
ルナリ

第二條

上告者ハ同判文第二條ニ「高引納稅ノ證據モナク云々書誤リト云テ其申譯カ立ナレハ」ト  
アルヲ不當ナリトシ被上告第二十號證ノ如ク假令村吏カ地所ノ書上ニ際シ偶書誤リアル  
モ論地ノ内第一號第四號乃至第七號ノ五ヶ所ハ元村民カ名受地ナリシ證據ノミアルヘキ  
アレハ該第二十號證村吏ノ書誤ハ支障トナラサル旨云々陳辯スレハ該論地ノ五ヶ所ハ元  
村民カ名受地ニシテ古來進退シタル證ハ勿論又荒蕪ニ屬シ納稅セサル地所ナリト云モ其  
高引ノ證據ナクシテ村民カ古來進退シ荒蕪ニ屬シ納稅セサル地所ナリト云モ口頭ノ陳述

過サレハ原裁判所ニ於テ上文ノ如ク判決シタルハ不法トナスヲ得ス

第三條

上告者ハ同判文第三條ニ(本案雙方ノ證據書類全カラサルニヨリ)他ノ證據ニ參照シテ有姿如此ト定メテレタル云々トアルヲ不當ナリトシ上告第九號十號十八號證ノ如キ確證アリト申立レトモ該數證ニハ被上告者カ調印シタルハ錯誤ニ係リタルモノナレハ證據トナスニ足ラス又上告者ハ判文ニ他ノ證據トアルハ如何ナル證據ヲ指示スルヤ又景況ノ稍似タルヲ資料トシ判定セラレタルハ不當ナリト申立レトモ他ノ證據トハ本案雙方ノ證據書類ニ外ナラス然レトモ其證據書類ハ論地ノ境界ヲ諦ムルニ充分ナラサルヲ以テ被上告第四號證第八項ニ有姿云々トアルニ其實地ノ形狀ニ依リ判定シタルヲ以テ原裁判所カ上文ノ如ク言渡シタルモノナレハ之レヲ不當トナスヲ得ス

第四條

上告者ハ同判文第四條ニ(原告村ハ家數三十軒ニ足ラサル小村ニテ)且證書ノ字名相違セシニ由リ形狀死馬捨場ノ如クナラサルコ由リ云々トアルヲ不當ナリトシ縷々陳述スレトモ固ヨリ小村ニハ死馬捨場ハ一ヶ所ナリトノ制限アルニ非レトモ事實上ヨリ推測スレハ家數三十軒ニシテ耕馬一頭ノ小村ニ二ヶ所ノ死馬捨場ヲ要スルノ謂ナカルヘシ加之上告者カ論地ヲ死馬捨場ナリト證スル上告第五號證ニ記載アル字ナハ極ク澤トアリ而シテ原被告カ調製シ(明治四年五月十六日附)原裁判所ニ提供シタル圖面ヲ查閱スレハ論地第十四號ノ字ナハ秋伏乾トアレハ該地ハ上告第五號證ノ死馬捨場ニ非ルヤ明ナリ然ルニ上告者ハ

其第二十一號圖面ヲ以テ右第十四號ノ字ハ第五號證ニ相違セサル旨申立レトモ該圖面ハ上告者カ自製ナレハ證據トナスニ足ラサルナリ故原裁判所ニ於テ上文ノ如ク判定シタルハ不法ニ非ルナリ

第五條

上告者ハ同判文第五條ニ(其文書未タ縣廳ニ達セサルニ紛紜ヲ生シ)之レヲ他ノ證據就中實況ニ就テ判定セサルヲ得サル云々トアルヲ不當ナリト申立レハ抑文書ハ其達スルト否ヲ問ハス錯誤ニ係リタル上ハ無効ニ歸スヘキハ論ヲ竣ス故ニ判文ニ(又文書ハ其達スヘキ所ニ達シテ後始テ其文書ノ効ヲ有スル云々今一例ヲ示セハ)云々ト引例シタルハ允當ナラストスルモ抑モ本案ノ諍訟タル原被告雙方ノ證據完全ナラサルニ依リ裁判官實地ニ臨ミ被上告第四號證第八項ノ旨趣ニ基現今ノ有姿即實況ヲ檢審スルニ論地ノ内二十三ヶ所ハ秣場ト異狀ナキヲ以テ則入會秣場ナリト判定セリ現ニ秣場ナリト認ムヘキ箇所ニシテ上告第十號證入會秣場反別書上ニ脱記セリ斯ク取調方實地ニ適合セサル書面ニ被上告者カ調印セシモ其後被上告者ハ扱所ノ注意ニ依リ該第十號證ニ脱記ノ廉アルヲ發見セシヨリ本訴ヲ搆スルニ至リタレハ其調印セシハ錯誤タルヲ明カナリトス結局原裁判所ニ於テ(既ニ争起リ彼調印ハ錯誤ナリト云ニ由リ之ヲ他ノ證據就中實況ニ就テ判定セサルヲ得サル儀ト可相心得事)ト言渡タルハ不當ノ裁判ニ非ルナリ

第六條

上告要領第六條ニ論地第二十號ハ上告者ノ所有ナリト云ヒ被上告者ハ否スト争ヒタルヲ

初審廳ニ於テ該爭論ヲ第十九號ニ對スル爭論トシテ判決セラレタルヲ以テ其相違ノ旨ヲ原被告雙方ヨリ原裁判所へ申立タルニ都テ初審裁判ノ通ト判決セラレタルハ不當ナリト申立ル處被上告者ハ右第二十號ノ地ニ對スル權利ヲ拋棄シ論地二十三ヶ所ノ内ヨリ第二十號ノ一ヶ所ハ除却シタル旨申立抗辯セサレハ該地ニ對スル爭論ハ已ニ消滅シタルヲ以テ原裁判所カ都テ初審裁判ノ通リト言渡シタルハ不都合ナリト雖モ破毀スルノ限ニ非ス

第七條

前條々ノ如ク原裁判ノ當否ニ付テハ詳悉シタルヲ以テ上告要領第七條ニ對シテハ別ニ辯明ヲ與ヘス

判決

右辯明ノ筋合ナルヲ以テ明治十四年十二月廿七日東京上等裁判所ニ於テ言渡タル裁判ハ破毀スヘキ理由ナシトス

但上告入費ハ上告人ヨリ償却スヘシ  
第五百九十一號

○渡金取戻シ并要償上告ノ判文(明治十五年二月廿五日上告  
十五年十二月廿七日申渡)

神奈川縣武藏國北多摩郡立川村

四十六番地平民

上告人

板谷 元右衛門

東京府日本橋區濱町二丁目十一

番地平民

右代言人

高 梨 哲 四 郎

神奈川縣武藏國北多摩郡上川原

村九番地平民

被上告人

指田 忠 左衛門

上告要領

第一條

東京上等裁判所ハ裁判狀第一條ニ於テ德次郎(被控訴人)ト被上告忠左衛門トハ合併商業ヲナシタルモノノ上告人元右衛門トノ賣買ハ被上告忠左衛門擔任シタルモノトスト裁判シ其第四條ニ於テ故ニ金百圓并ニ上告第一號證本書共併セテ被上告者へ返償スヘシト判定シタリ然リト雖モ抑モ德次郎(被控訴人)カ被上告忠左衛門ト合併商業ヲナシタルモノナレハ何等ノ理由アリテ上告人ハ德次郎カ請取リタル金百圓(假リニ受取リタルモノ)并ニ上告第一號證ヲ返戻スヘキノ義務アルヤ此點ニ對シテハ原裁判所毫モ其理由ヲ示サレサルカ如シ假リニ德次郎ハ被上告忠左衛門ト合併商業ヲナシタルモノナルヲ裁判狀第一條ノ如クナリトセン然ラハ上告人ハ德次郎カ請取リタル百圓(實ハ決シテ受取リタルモノ)若クハ德次郎カ請取リ上告人へハ更ニ德次郎ヨリ上告第一號證添書ノ如ク讓受ケタル上告第一號證ヲ被上告人へ返償スヘキノ義務アリヤ上告人安クソ夫レ斯ノ如キ義務ヲ加ヘ之德次

郎ト被上告忠左衛門トノ間ニ於ケル豚兔類賣買事業ハ上告第二號證（本書ハ被控訴人ノ一人徳次郎現有ス）ノ如ク決算ノ上金三百五十圓（其實ハ上告第十六號證）ヲ被上告人ヨリ徳次郎ヨリ入金シタルモノナレハ當時被上告者ハ該商業上（假令之ヲ合併商業ナリトスルモレニシ）ノ決算ニヨリ差入ルヘキ金額アリシヲ判然タリ恰モ好シ其際被上告忠左衛門ハ被上告第一號證ヲ受取り而シテ其親戚タル田村半十郎ハ上告第一號證ヲ徳次郎ニ交付シタルモノナレハ上告第二號證決算金ノ外ニ尙當時被上告第一號證ノ如ク被上告忠左衛門ヨリ徳次郎ニ渡スヘキ金額アリシヲ一目瞭然タリ然ラハ則チ東京上等裁判所カ忠左衛門ト徳次郎トノ取引ハ合併商業ニシテ徳次郎ト元右衛門トノ取引ハ則チ忠左衛門カ擔任シタルモノト判定シタル裁判狀第一條ノ如キハ須臾ク之ヲ相當ノ裁判也トスルモ上告者元右衛門ハ之レカ爲メ徳次郎カ受取りタル金員（徳次郎ハ之ヲ請取ラス）若クハ徳次郎ヨリ讓受ケタル證書ヲ返償スルノ義務ヲ負擔スルノ謂レナキ也故ニ東京上等裁判所裁判狀第四條ノ如キハ所謂空中ニ樓閣ヲ畫キタルト一般ナル根柢ナキ不法ノ裁判也若シ實ニ東京上等裁判所ハ忠左衛門ト徳次郎トノ取引ハ合併商業也ト判定サレシニハ宜シク該商業ノ爲メニ如何ナル利益ヲ生シ如何ナル損害ヲ生セシヤチ吟味セサルヘカラス而シテ損益計算ノ判然タル場合ニ於テ資本ノ高或ハ約束ノ精神ニ依リテ其損益負擔ノ分界ヲ定メサルヘカラス既ニ損益負擔ノ分界定マリタル后被上告人忠左衛門於テ誤リテ過金ヲ徳次郎ニ渡シタルヲノ證據分明ナレハ被上告人ハ徳次郎ニ對シ之レカ取戻シテ請求スルヲ得ヘク又之レヲ徳次郎ヨリ返償スヘシト裁判スルヲ得ヘシ然レモ上告者元右衛門ニ對シ請求ヲ得可カラ

ス又之ヲ返償スヘシト裁判シ得ヘカラス也然ルチ東京上等裁判所ハ何等ノ理由アリテ上告者ハ被上告者忠左衛門ニ金員若クハ證書ヲ返償スヘキノ理由アルヤチモ示サズ漫然トシテ裁判狀第四條ノ如ク裁判相成リタルハ事理共ニ不法ノ裁判也

第二條

又東京上等裁判所ハ裁判狀第一條ニ於テ徳次郎ト忠左衛門ハ合併商業ヲナシタルモノニシテ被告（上）元右衛門トノ賣買ハ忠左衛門カ擔任シタルモノト認メサルヲ得スト裁判シタルハ之レ違證ノ裁判也徳次郎ト被上告忠左衛門ノ間ニ於ケル豚兔類賣買事業ハ果シテ損益分擔ノ合併商業ナリシヤ又ハ徳次郎ヨリ忠左衛門ニ賣切リタル賣買商業ナルヤチ穿鑿スルニ該商業ノ如何ヲ推定スヘキハ實ニ上告第二號證ニアリ其然ル所以ハ該證タル徳次郎ノ現有スル處ノモノニシテ被上告人ノ異論ナキモノ也又該證タル被上告忠左衛門ト徳次郎トノ間ニ於ケル豚兔類賣買事業ノ決算書也故ニ該決算書ニ依リテ以テ其決算ヲナシタル事業ハ果シテ合併商業ナリシヤ又ハ普通ノ賣買ナリシヤチ定ムルハ最も適實ノ事柄ナレハ也該第二號證ノ重用スヘキ證タルヲ既ニ如是然ルニ該第二號證ニ於テハ豚兔代金三百五十圓正ニ相渡中候云々ト記載シアリテ毫モ損益分擔等ノ結果ナリシ事ヲ掲ス加之被上告忠左衛門カ該證ニ就テ如何ナル辯解ヲナセシヤチ視ルニ「該三百五十圓ハ當時徳次郎ヨリ忠左衛門方ヘ送致シ之レアル豚類ノ代金也」（明治十二年二月十日東京上等裁判所被上告者口供）ト申立「右合併商業ノ差引計算ハ遂ニ不立去徳次郎トノ間ノ取引ハ明治七年三月決算金三百五十圓ヲ出入ナシトシタルモノ也」（明治十二年三月三日東京上等裁判所被上告者口供）ト申立

年三月八日爲取替ノ金員德次郎ト合併ノ豚數頭未ダ賣捌カサル分原告(被上)ノ手ニアルヲ以テ止ムヲ得サル場合ヨリ代金ニ見積リ原告(被上)ハ引取り候其代金三百五十圓云々該金三百五十圓ハ現在ノ豚代金ニシテ原告相争フ處ノ三十六頭ノ豚代金五百圓トハ別口ナレハ本訴ニ關係アルコトナシ(明治十一年十二月十三日付東京上審裁判所被告上告者辯駁書)ト申立德次郎ト原告人(被上)トノ合併豚商法中元右衛門ニ關係ノ分ヲ除キ其他ノ出入勘定ハ明治七年二月申立(初審被告上)ト申立(明治七年三月八日付自分ヨリ德次郎并ニ川村喜兵衛宛テ差入レタル證書金三百五十圓ハ自分ト德次郎トノ商業差引決算金額ヲ則證書ニ取結ヒタルモノニシテ商業取引上ノ殘額ニ有之候(明治十二年九月廿四日被上告者口供)ト申立タリ由是觀之上告第二號證ニ記スル處ノモノハ豚兎代金ニシテ合併商業ノ損金若クハ益金ニハ非サル也而シテ被告上告者ハ其際ニ於テ止ムヲ得ス賣買ノ方法ヲ以テ決算ヲ立テ合併商業損益精算ノ方法ニハ依ラサリシト申立ツルト雖モ之レ遁辭ニシテ採ルニ足ラス故ニ毫モ依ルヘキノ證アルコトナシ然レハ德次郎ト被告上告者左衛門トノ間ニ行レタル豚兎類賣買事業ハ合併商業ニ非サルコト證據明白ナルモノ也之ヲ奈何ソ被告上告第十號第十一號證カ被告上告者左衛門ノ手ニ存スルノ事實アルノミヲ以テ直ニ合併商業損益分擔契約アリシモノト判定スルコト得ヘケンヤ況ヤ上告者カ被告上告者左衛門ニ渡タル被告上告第九號證記載ノ金六百五十圓ノ内金五百圓ハ德次郎ニ仕拂ヘキ委託金ナルコト被告上告者カ被告上告第一號證ヲ受取り田村半十郎ニ依頼ノ同人ヨリ德次郎ニ對シ上告第一號證ヲ出サシメタルノ事實ト被告上告者カ其一號證ヲ請取リ上告第一號證ヲ出シタルコトハ法院ノ強迫ニ成リタリ或ハ二重

ノ仕拂也ト云フモ毫モ其證據ヲ舉グル能ハサルノ事實及ヒ上告者カ上告第十四號證ノ宣告ヲ受ケタル事實トヲ參酌シ明々瞭々タルニ於テチヤ

第三條

東京上審裁判所ハ裁判狀第二條ニ於テ爰キニ德次郎カ橫濱裁判所ニ上訴シタル橫取吟味願(則上告第一十二號證)ハ明治十年十一月十日則チ德次郎カ其請書ヲ出シタルキニ結了セシモノト判定シ裁判狀第四條ニ於テ被告上告第二號第三號第二十號證記載ノ金額ヲ被控訴兩人ヨリ償却スヘシト裁判シタリ是又何タル不當ノ裁判ナリヤ凡ソ償金ハ(第一)果シテ該損金ノアリシヤ否ヤノ事實(第二)該損金ハ適當ニ仕拂ハレタルモノナルヤ否ヤノ事實(第三)及ヒ該損金ハ實ニ訴訟方一方ノ故造等ノ行爲ニヨリ生シタルモノナルヤ否ヤノ事實ヲ定メサルヘカラス然ルニ被告上告第二號第三號第二十號證ノ如キハ管ニ一片ノ受取書ニ過キスシテ之ヲ以テ直ニ被告上告人ハ此ノ如キ損害ヲ受ケタルモノト看做スコト得ヘカラス况ンヤ之レヲ適當ノ仕拂ナリト看做スコト得ンヤ被告上告者カ掲ケル處ノ第二號第三號證ハ共ニ差添人日當書物認料タルニ過キス然ルニ其額ハ九十二圓餘ニ登ル豈ニ過大ノ金額ナラヌヤ業已ニ被告上告者ハ德次郎ヨリ係レタル橫取吟味ノ審問ハ漸ク四五回ニシテ然ル後再審上願ヲナシタルモ審問十數度ニ過キサリシコト東京上審裁判所ニ明言セリ其中供則チ左ノ如シ

德次郎ヨリ相係ル吟味願一件ニ付原被初對審ノ上審問ヲ受ケタルハ明治七年二月廿六日ト記憶致候德次郎ハ該吟味願ノ金額ヲ相渡シ候ハ明治七年三月八日ニ有之候右吟味

願ノ始メヨリ三月八日ニ至ル迄自分儀五六回ノ御取調ヲ承リ候ニ相違無之候事自分儀  
 横濱裁判所へ再度願書ヲ呈シ德次郎元右衛門兩人へ係リ再吟味願出候ハ明治七年三月  
 下旬ニ有之候事右吟味願結局ノ日ハ明治十年十一月十日ニシテ此日元右衛門處刑相成  
 候事該吟味願ノ爲メ自分或ハ元右衛門ニ於テ取調ヲ受候ハ數十度ノトハ相考候得共  
 何分何ケ度ノ取調ヲ受ケタルコトナルヤ記憶更ニ無之候事(明治十三年九月廿六日被上告口供) 德次郎ヨ  
 リ係ラレ候吟味願ノ儀ハ明治七年二月廿三日ヨリ訴ヘラレ同三月八日ニ其結局ニ相成  
 其以來ノ御取調等ハ吟味願ノ爲メ自分ヨリ差出候再審上願ノ爲メニ御取調有之儀  
 ニ御座候(明治十二年三月三日被上告口供)

右ノ申立ニ依レハ德次郎ヨリ被上告忠左衛門へ係リタル吟味願(則上告第 十三號證)ハ明治七年三  
 月八日ニ於テ一旦其局ヲ結ヒタルコト争フヘカラサルモノナルニ被上告第二號證ニ於テハ  
 同年三月二日ヨリ十四日ニ至ル迄連日ノ費用ヲ登錄シアリ且又該横取吟味願一件并再審  
 上願事件ニ關スル書類ヲ今回横濱裁判所ヨリ東京上等裁判所ニ廻送相成リタル際之ヲ閱  
 スルニ被上告忠左衛門カ願書却下ノ受書一葉ノ存スルアリト雖モ其他毫モ上書等ノ類存  
 在セザリシ也然ラハ被上告忠左衛門カ被上告第二三號證ノ如ク仕拂ヲナシタリト云フモ  
 信用スヘカラサル也被上告忠左衛門ハ明治九年七月頃舊五小區戸長ヲ拜命シ同年十月頃  
 四五小區合併四小區戸長ヲ拜命シ明治十一年十一月頃ニ至ルマテ則郡區改正仰出サレ候  
 マテ勤續キタリ(明治十二年九月二日 十六日被上告口供)ト申立タリ然ラハ戸長ノ繁務トシテ被上告第二十號  
 證記載ノ金額ヲ費用スル程ノ閑アリテ横濱裁判所々在ノ區内ニ滞留シ得ヘカラス旁以此

等ノ費用アリシト云フハ固ヨリ信用シカタクモ也好シヤ假リニ該二號三號二十號記載ノ金  
 額ノ如キハ費用シタルモノ也トスルモ奈何セシ該金額ハ果シテ當然ノ仕拂ナリトハ認メ  
 カタクモ且又上告人ノ如キハ決シテ該損金ヲ償却スルノ義務アラサルナリ其故ハ被上告  
 於テ主張スル處ニ依ルニ上告人ハ曾テ德次郎ト故造シテ該損失ヲ蒙ラシメタリト云フニ  
 アレモ之レ素ヨリ無稽ノ語ナリ曩日忠左衛門チ上告第十三號證ノ如ク訴ヘタルハ德次郎  
 也而シテ被上告忠左衛門ハ其際上告第一號證ヲ親戚半十郎ヨリ德次郎ニ差入レ德次郎ノ  
 訟求ヲ満足セシメタリ爾來被上告忠左衛門カ德次郎及ヒ上告者ニ係リ再審上願ヲナシ上  
 告者ノ如ハ上告第十四號證ノ宣告ヲ受タリ然ラハ則被上告忠左衛門カ德次郎ニ上告第十  
 三號證ノ如ク訴ヘラレ又ハ上告人及ヒ德次郎ニ係リ再審上願ヲナシタルカ爲メ費用シタ  
 ル金額ハ上告人於テ之ヲ負擔スルノ謂レナキチ以テナリ

第四條

東京上等裁判所ハ同裁判所明治十二年第七十六號一件ノ如キ争訟アルノ場合ニ於テ被  
 上告忠左衛門カ初審廳於テノ請求ニ關ラス終審廳ニ至リ俄然其訟求ヲ金百圓ト上告第一  
 號證トノ返償ヲ需ムルト申立タルヲ採用シタルハ東京上等裁判所自ラ未ダ初審廳ノ裁判  
 ナ經サルモノヲ裁判シタル不法ノ裁判也且又該百圓ノ如キハ德次郎於テ請取リタルモノ  
 ニ非サルコト上告第二號證ノ三百五十圓ハ其實上告第十六號證ノ三百圓ナルコト事實ニ照  
 シテ判然タルニ該金員ヲ受取リタルモノ、如ク裁判セシハ不相當ノ裁判ナリ

第五條



畢竟スレハ本件争訟ノ如何ニ關シテハ種々枝葉ノ論モアルヘシト雖モ之ヲ要スルニ被上告於テ第一(渡金)ノ請求ヲナシ遂ケントスルニハ被上告第一號證ヲ請取リ親戚田村半十郎ヲシテ上告第一號證ヲ德次郎ニ差入レシメタルハ當初法庭ノ強迫ニ成リタリトノ又ハ誤テ上告第二號證ヲ以テ精算ヲナシ遂ケタル豚代金ヲ二重ニ仕拂フタルモノナルコト二個ノ情實ヲ證明シ獨リ德次郎ニ向テ之レカ請求ヲナサハルヘカラス然ラサレハ被上告者忠左衛門カ一且德次郎ヨリ被上告第一號證ヲ受取リ親戚田村半十郎ヲシテ上告第一號證ヲ德次郎ニ差入レシメタルハ則チ相當ノ原由アリテ然リシモノト推定スヘキハ法理ノ當然ニシテ上告人ノ如キ被上告人ト直接ノ關係アラサルナリ然ルニ被上告ハ之レ法廷ノ威迫ナリ之レニ重拂ヒナリ(但其申立時)ト喋々スレモ一モ其證ヲ舉ルコト能ハス其證ヲ舉ルコト能ハサルノミナラス上告第二號證ノ金額ハ本件争訟ノ豚代金トハ別口也ト明言シ或ハ被上告ノ親戚タル半十郎ハ東京上等裁判所ニ出頭シテ曩ニ德次郎ト忠左衛門トノ紛議ニ關係シタルコト明言シ被上告忠左衛門於テモ亦上告第十三號證ノ爲メニ取調ヲ請ケタルハ五六回ニ過キスト明言ス然ラハ則チ被上告者ハ二重ノ仕拂ヲナシタルニ非サルハ勿論法廷ノ強迫ニ依リテ止ムヲ得ス親戚半十郎ヲシテ德次郎ニ上告第一號證ヲ交付シタルニ非サルコト論テ俟タヌ又被上告ニ於テ本案第二(損害)ノ要求ヲナシ遂ケントセハ該要償金額ハ果シテ適實ノ仕拂ニシテ而カモ相當ニ要スヘキ費用ナリシコト證明スルハ勿論該要償金額ヲ生シタルノ所以ハ實ニ上告人ト德次郎ト故造シテ獨リ被上告人ヲ陷レタルモノナルコト證セスハアルヘカラス然ルニ被上告人ハ一ツモ之ヲ證明シ能ハ

サル也然ルチ東京上等裁判所カ本訴ニ關シテハ尤モ必要ナル此ノ如キ論點ニ對シテハ何等ノ判決ヲモ與ヘラレサリシハ畢竟原被抗争ノ點ニアラサル處ニ無用ノ裁判ヲ下シタル不法ノ裁判也

判決

第一條

本案ハ吉田德次郎及上告者ヨリ曾テ被上告者ニ對シ爲タル吟味願ハ無實ニ出テタル者ナルニ因リ其吟味願ノ爲メニ一時冤罪ヲ蒙ラントスルノ場合ニ臨ミ止ムヲ得ス渡シタル金額ノ返還及ヒ之レカ爲メニ蒙リタル損害ノ賠償ヲ德次郎及上告者ニ係リ要求スルモノニシテ其吟味願ノ無實ニ出テシ者タルコトハ原判文第一條ニ說示シタル理由ノ如ク本訴争論ノ豚類賣買ハ德次郎ト被上告者トノ合併商業ニ係ルモノニシテ上告者トノ賣買ハ被上告者カ擔任シタル者タルコト其吟味願ノ主タル證據即チ被上告第九號證「内金五百圓德次郎分」ノ九字ハ上告者カ記入變造シタルコト被上告第十二號證トニ照シテ判然タリ而シテ德次郎及上告者カ吟味願ヲ爲セシ手續タル明治七年二月廿三日德次郎ハ上告者ヨリ被上告者ヘ宛タル手紙ヲ證トシテ神奈川裁判所ヘ上告者ハ被上告第九號證ノ本紙ヲ變造シ之ヲ證トシテ八王子檢事出張所ヘ吟味願ヲ爲シタルモノナリ其同日ニ於テ同事ノ吟味願ヲ爲スノミナラス故テニ他人ノ記シタル證書ヲ變造シテ之レカ證據ト爲セリ加之上告者ヨリ被上告者ニ宛タル手紙ヲ德次郎父德兵衛ヘ渡シタルハ明治六年十二月廿二日ナレハ被上告第九號證(實際授受シタルハ二十日ナリ)ノ通り上告者ヨリ金六百五十圓ヲ被上告者ヘ渡シタル同日

ナリ然ルニ其手紙ニハ豚代金五百圓先日依託致シ置クニ今以テ先方へ御届之レナキハ甚ダ不都合云々ト記シタリト夫レ即日チ指テ先日ト唱フヘキヤ又其日ニ授受シナガテ今以テ御届ケ之レナキハ甚ダ不都合云々トノ督促ノ語ヲ用ユヘキヤ又徳兵衛カ其手紙ヲ要シ携ナカラ之チ後日ノ證トセント遂ニ被上告者ニ渡サハルノミナラス一見タモ爲サシメサリシ如スキ事柄ヲ僅カ一日内ニ惹起シ得ヘキヤ苟モ相通謀スル所アルコアラサルヨリハ實際現出スヘキ事ニアラス是ニ由テ之ヲ觀レハ無實ノ吟味願チ徳次郎上告者ノ兩人馴合コテ爲シタルコモ亦明カナリ然ラハ則チ上告者モ徳次郎ト共ニ本訴ノ賠償返還ノ責ニ當ラサルチ得サルハ勿論ナリトス况ンヤ上告者ハ明治七年三月八日附金四百圓田村半十郎ノ預カリ證書ヲ受取殘金百圓ヲ勘辨スルコトニ原豊纒ノ取扱ニ付自分ハ承諾セリト自供シ現ニ其預カリ證書即チ上告第一號證ハ徳次郎ト上告者ト兩人ノ名宛ナルコト於テチヤ

上告者ハ徳次郎ト被上告者トノ間ニ於ケル豚免賣買取引ハ上告第二號證ノ如ク決算ノ上金三百五十圓ヲ被上告者ヨリ入金シタルハ當時該商業上ノ決算ニヨリ差入ルヘキ金額アリシモノニシテ其際被上告者ハ田村半十郎チシテ上告第一號證チ徳次郎ニ交付セシメタルモノナレハ上告第二號證ノ外ニ尙ホ徳次郎ニ渡スヘキ金額アリシコト瞭然タリト云フモ唯其上告第二號證ト同時ニ上告第一號證チ田村半十郎チシテ交附セシメタリト云フノミチ以テ果シテ上告第二號證ノ外ニ尙ホ徳次郎ヘ渡スヘキ金額アリト爲スチ得ヘカラサルノミナラス上來說明スル如ク本訴ノ主點ハ徳次郎ト被上告者トノ間ニ係ル取引ノ豚代金ニ就キ争フモノニ非ス又彼ノ上告第二號證三百五十圓ノ計算ニ就テ争モノニモ非ラサレハ右ノ申立ハ畢竟

本訴ノ賠償返還ノ點ニハ關セサルモノトス右ノ理由ナレハ原判文第四條ノ判決ハ不當ニアラス

第二條

上告第二號證ハ徳次郎ト被上告者トノ間ニ於ケル豚免類取引上ヨリ成立チタルモノナリト雖モ該證ハ一時三百五十圓ヲ渡シ一切出入ナキモノト爲シタル證書ニシテ必スシモ之レニ損益分擔等ノ事柄ヲ記載セサル可カラサルモノニアラサレハ其記載ナシト云フチ以テ直ニ合併商業ニ非スト爲スチ得ス而シテ其合併商業チナシタルモノト認メサルチ得サルコト原判文第一條ノ理由ノ如ク然リトス

第三條

被上告者カ上告者ト徳次郎トノ吟味願チ受ケタルハ明治七年二月廿三日ナリ而シテ被上告者ハ明治七年三月八日一旦被上告第一號證ノ如ク金五百圓（現金百圓及金四百圓田村半十郎預カリ證書）ノ授受チ爲シタルモ引續キ再審上願チ爲シタリト然ルニ其三月八日ニ至ルマテニ被上告者カ糾問チ受ケタルハ五六回ナルコト被上告第二號證ニハ三月二日ヨリ十四日マテ連日ノ費用チ記載シアルハ其當チ得サルモノ、如シト雖モ個ハ其事件ニ付差添チ求メタルノ費用ナレハ是等ノ場合ニ於テハ假令訟廷ニ出テサル日ト雖モ其契約ニ依リ拂ハサルチ得サルコトナキチ保チ難シ且其上願タル即チ徳次郎及上告者カ無實ノ吟味願チ爲シタルニ起因スルモノニシテ該件ノ審理ハ延テ明治十年十一月十日ニ及ビ始メテ歸結ニ至リ終始三年強半ノ久シキニ涉リタルモノナレハ被上告第二三號及第二十號證ノ如ク實際費用シタル上ハ強チ之チ當然ノ任

拂ニアラスト云フヲ得可カラス然リ而シテ上告者カ德次郎ト共ニ是等要償ノ責メニ任セサルヲ得サルコト前第一條ニ說明ヲ與ヘタルカ如シ

第四條

被上告者ハ始審廳ニ於テ金五百圓ノ返還ヲ求メ控訴ニ至リ當時實際授受シタル金百圓ト上告第一號證トノ返還ヲ求メタルモ其第一號證ハ當時被上告者カ渡スヘキ現金ニ代ヘ田村半十郎ヲシテ之ヲ交付セシメタルコト上告者ハ勿論本訴關係人モ皆認メテ異論ナキ所ナレハ固ヨリ彼ノ新ニ訴訟範圍外ノ求メテ爲ス者ト同視スヘキモノニアラス況ンヤ其訴名ヲ異ニスルモ既ニ上告者ヨリ上告第一號證ヲ以テ預ケ金ノ請求ヲ爲シ既ニ始審ノ裁判ヲ經テ同時ニ控訴ノ審理ヲ爲シタルニ於テチヤ

又上告第二號證ノ三百五十圓ハ上告第十六號證ノ如ク三百圓ナル事實アリト云フヲ以テ右百圓ハ授受シタルモノニアラスト爲スヲ得ヘカラス何トナレハ他ニ之ヲ認ムヘキ徵憑ナキニ依リ唯彼レニ勘辨減額シタルハ是レモ減額シタリトハ必ス可カラサルコトナレハナリ

第五條

夫レ上告者ト德次郎ト馴合無實ノ吟味願ニ及ヒ爲メニ被上告者ハ止ムヲ得ス被上告第一號證ノ如ク金五百圓(現金百圓及金四百圓田村半十郎預カリ證書)ノ授受ヲ爲セシモノタルコト前第一條ニ說明シタルカ如シ畢竟是等ノ事實ヲ認定シタル上原判文第四條ノ如ク判決シタルモノナレハ原裁判所カ特ニ其點ノ理由ヲ說示セサリシト云フヲ以テ本案ヲ破毀スヘキ事由ト爲シ難シ

第六條

前數條ノ理由ナルヲ以テ東京上等裁判所ニ於テ言渡シタル終決裁判ハ不當ニアラス依テ破毀セサルモノ也

第五百九十二號

○預金淹滞上告ノ判文(明治十五年二月二十五日上告) 全 十五年十二月廿七日申渡

神奈川縣武藏國北多摩郡立川村 四十六番地平民

板谷元右衛門

上告人

東京府日本橋區濱町二丁目十一

番地平民

高梨哲四郎

右代言人

神奈川縣武藏國西多摩郡多摩村

百七十二番地平民

田村半十郎

被上告人

東京上等裁判所明治十一年第三百三十號一件即指田忠左衛門ヨリ板谷元右衛門(上告人)及吉田德次郎ニ係ル渡金取戻シ并ニ損害要償一件裁判ノ不法ナルコトハ該件上告狀ニ其要領ヲ畧記セリ然リ而シテ本件上告第一號證ノ成立チタル被上告者カ親戚指田忠左衛門ノ依頼ニ倚リ吉田德次郎ヘ差入レタル者ニシテ素ヨリ有効ノ契約ナレハ蓋シ該第一號證ノ金員果シテ德次郎ノ受取ルヘキモノナルヤ否ヤニ拘ハラヌ被上告人ハ其義務ヲ免ガル、能ハサル者ナリ

既ニ忠左衛門ハ上告人等ニ係リ該金員ヲ取戻サンコトヲ横濱裁判所へ訴出テ且東京上等裁判所ニ於テ該取戻一件對審ノ際左ノ如ク明言セリ

德次郎ヨリ係ル吟味願一件ニ付金四百圓ヲ右半十郎(被上告人)ニ代續ノ儀依頼致シ候コト有之候右金圓ハ其他ノ取引計算上ノ爲メ調査シタル明治七年五六月ノ頃總勘定ノ節半十郎へ自分ヨリ拂込タル姿ニ相成リ居候事

是ニ由テ之ヲ觀レハ被上告者ハ既ニ忠左衛門ヨリ上告第一號證ノ爲ニ金四百圓ヲ受取アルコト判然タリ然ラハ被上告者ハ毫モ上告者ノ訟求ヲ拒ムノ理由ナク且ツ本件東京上等裁判所裁判ノ不法ナルコト別ニ論ヲ俟サル也

判決

上告第一號證ノ成立ハ上告者及吉田德次郎ヨリ曾テ指田忠左衛門ニ對シ横取吟味願ヲ爲シタルニ起因スルモノニ忠左衛門ノ爲メ代償ニ充タルモノナルコトハ上告被上告兩造ニ於テモ認メテ異論ナキ所ナリ而シテ忠左衛門カ受タル吟味願ハ上告者ト德次郎ト馴合タル無實ノ吟味願ニシテ之レカ爲メコト上告者ト德次郎トニ對シ渡シタル金額(現金百圓本訴上告第一號證)ハ忠左衛門ニ於テ取戻スヘキ權利アルコト上告者並ニ德次郎ヨリ忠左衛門ニ係ル渡金取戻并要償一件ノ上告ニ對シ判決ヲ與ヘタルカ如ク然ラハ該證書ハ無原因ニ歸スルヲ以テ被上告者ハ上告者ニ對シ之レカ金員ヲ拂渡スヘキ義務ナキモノナリ右ノ理由ナルヲ以テ原裁判所ノ裁判ハ不當コトアラス依テ破毀セサルモノナリ  
第五百九十三號

○渡金取戻并要償上告ノ判文(明治十五年二月廿五日上告 全 十五年十二月廿七日申渡)

東京府荏原郡白金村四十一番地 平民

上告人

吉田 德次郎

右代言人

東京府日本橋區濱町二丁目十一番地平民  
高 梨 哲 四 郎  
神奈川縣武藏國北多摩郡上川原村九番地平民

被上告人

指 田 忠 左 衛 門

上告要領

第一條

東京上等裁判所ハ裁判狀第一條ニ於テ德次郎(被控訴人)ト被上告忠左衛門トハ合併商業ヲナシタルモノニシテ上告人元右衛門トノ賣買ハ被上告忠左衛門擔任シタルモノトスト裁判シ其第四條ニ於テ故ニ金百圓并ニ上告第一號證本書共合セテ被上告者へ返償スヘシト判定シタリ然リト雖モ抑上告人(被控訴人)カ被上告忠左衛門ト合併商業ニナシタルモノナレハ何等ノ理由ナリテ上告人ハ受取リタル金百圓(假リニ受取リタルモノトスルモ)并ニ上告第一號證ノ返戻スヘキノ義務アルヤ此點ニ對シテハ原裁判所毫モ其理由ヲ示サレサルカ如ク假

リニ上告人ハ被上告忠左衛門ト合併商業ヲシタルモノナルヲ裁判狀第一條ノ如クナリトセン然ラハ其受取リタル百圓(實ハ決シテ受取リタルモノニ非ス)若クハ上告第一號證ヲ被上告人へ返償スヘキノ義務アリヤ上告人安ソツ夫レ斯ノ如キ義務アラン加之上告人ト被上告忠左衛門トノ間ニ於ケル豚兔類賣買事業ハ上告第二號證ノ如ク決算ノ上金二百五十圓(其實ハ上告第十六號證ノ如ク)ヲ被上告人ヨリ入金シタルモノナレハ當時被上告者ハ該商業上(假令之)金三百圓ナリ(商業ナリトスルモ又ハ單純ノ)ノ淺算ニ依リ差入ルヘキ金額アリシト判然タリ恰モ好シ賣買ナリトズルモ何レニシモ) 其際被上告忠左衛門ハ被上告第一號證ヲ受取リ而シテ其親戚タル田村半十郎ハ上告第一號證ノ上告人ニ交付シタルモノナレハ上告第二號證決算金ノ外ニ尙當時被上告第一號證ノ如ク被上告忠左衛門ヨリ上告人ニ渡スヘキ金額アリシト一目瞭然タリ然ラハ則チ東京上等裁判所カ忠左衛門ト徳次郎トノ取引ハ合併商業ニシテ徳次郎ト元右衛門トノ取引ハ則チ忠左衛門カ擔任シタルモノト判定シタル裁判狀第一條ノ如キハ須臾ク之ヲ相當ノ裁判也トスルモ上告者カ受取タル金員(實ハ之ヲ受取ラス)若クハ證書ヲ返償スルノ義務ヲ負擔スルノ謂ハレナキ也故ニ東京上等裁判所裁判狀第四條ノ如キハ所謂空中ニ樓閣ヲ畫キタルト一般ナル根柢ナキ不法ノ裁判ナリ若シ實ニ東京上等裁判所ハ忠左衛門ト上告人トノ取引ハ合併商業ナリト判定サレンニハ宜シク該商業ノ爲メニ如何ナル利益ヲ生シ如何ナル損益ヲ生セシヤノ吟味セサルヘカラス而シテ損益計算ノ判然タル場合ニ於テ資本ノ高或ハ約束ノ精神ニ依リテ其損益負擔ノ分界ヲ定メサルヘカラス既ニ損益負擔ノ分界定リタル

后被上告人忠左衛門於テ誤リテ過金ヲ上告人ニ渡シタルコトノ證據分明ナレハ被上告人ハ上告人ニ對シ之カ取戻ヲ請求スルヲ得ヘク又之ヲ上告人ヨリ返償スヘシト裁判スルヲ得ヘシト雖モ東京上等裁判所ノ如キハ何等ノ理由アリテ上告者ハ被上告者忠左衛門ニ金員若クハ證書ヲ返償スヘキノ理由アルヤヲモ示サズ漫然トシテ裁判狀第四條ノ如ク裁判相成タルハ事理共ニ不法ノ裁判也試ミ論セン上告人カ元右衛門ニ賣渡シタル本訴ノ豚三十六頭ノ資金ハ一ニ上告人ノ出金ニ係リシトハ被上告者モ異議ナキ所ナリ而シテ被上告者ハ東京上等裁判所ニ於テ右豚ノ資金トシテ四百圓ヲ上告人ニ交付シタルト陳述セシトアレ(時々變更シテ信ヲ措クニ足ラス)之レ無實ノ言ニシテ固ヨリ證ノ視ルヘキモノアルコトナシ故ニ原裁判ヲシテ適當ノ判決ナリトスル時ハ上告人獨リ其資金ヲ出シ被上告者ハ何等ノ努力モナクシテ直ニ其資金及利益金ヲ得ルノ理ニ當ルナリ豈ニ斯ノ如キ理アラシヤ

第二條

又東京上等裁判所ハ裁判狀第一條ニ於テ徳次郎ト忠左衛門ト合併商業ヲナシタルモノニシテ元右衛門トノ賣買ハ忠左衛門カ擔任シタルモノト認メサルヲ得スト裁判シタルハ之レ違證ノ裁判ナリ上告人ト被上告忠左衛門トノ間ニシタル豚兔類賣買事業ハ果シテ損益分擔ノ合併商業ナリシヤ又ハ忠左衛門ニ賣切リタル賣買商業ナルヤヲ見ルニ該商業ノ如何チ推定スヘキハ實ニ上告第二號證ニアリ其然ル所以ハ該證タル上告人ノ現有スル所ノモノニシテ被上告人ノ異論ナキモノナリ又該證タル被上告忠左衛門ト上告人トノ間ニ於ケル豚兔類賣買事業ノ決算書ナリ故ニ該決算書ニ依リテ以テ其決算ヲナシタル事業ハ果

シテ合併商業ナリシヤ又ハ普通ノ賣買ナリシヤヲ定ムルハ最モ適實ノ事柄ナレハナリ該  
 第二號證ノ重用スヘキ證タルコト既ニ如此然ルニ該第二號證ニ於テハ豚兔代金三百五十圓  
 正ニ相渡シ申候云々ト記載シアリテ毫モ損益分擔等ノ結果ナリシコトヲ揭ケス加之被上告  
 忠左衛門カ該證ニ就テ如何ナル辯解ヲナセシヤヲ視ルニ「該三百五十圓ハ當時德次郎ヨ  
 リ忠左衛門方ヘ送致シ之レアル豚類ノ代金ナリ」(明治十二年二月十日東京)ト申立右合  
 併商業ノ差引計算ハ遂ニ不立去德次郎トノ間ノ取引ハ明治七年三月決算金三百五十  
 圓ヲ出金ノ出入ナシトシタルモノナリ」(明治十二年三月三日東京)ト申立明治七年三月  
 八日爲取替ノ金員德次郎ト合併ノ豚數頭未ダ賣捌カサル分原告(被上)ノ手ニアルヲ以  
 テ止ムヲ得サル場合ヨリ代金ニ見積リ原告(被上)ハ引取り候其代金三百五十圓云々該金  
 三百五十圓ハ現在ノ豚代金ニシテ原被告相爭所ノ三十六頭ノ豚代金五百圓トハ別口ナレ  
 ハ本訴ニ關係アルコトナシ」(明治十一年十二月十三日付東京)ト申立テ「德次郎原告人(被  
 告)トノ合併豚商法中元右衛門關係ノ分ヲ除キ其他ノ出入勘定ハ明治七年三月中相濟  
 ミタリ」(初審被上)ト申立明治七年三月八日付自分ヨリ德次郎并ニ川村善兵衛ヘ宛テ差  
 入レタル證書金三百五十圓ハ自分ト德次郎トノ商業差引決算金額ヲ則チ證書ニ取結ヒタ  
 ルモノニシテ商業取引上ノ殘額ニ有之候」(明治十二年九月廿四日被上告者口供)ト申立タリ由是視之上告  
 第二號證ニ記スル所ノモノハ豚兔代金ニシテ合併商業ノ損益若クハ益金ニハ非ラサルナ  
 リ而シテ被上告者ハ其際ニ於テハ止ムヲ得ス賣買ノ方法ヲ以テ決算ヲ立テ合併商業損益

精算ノ方法ニハ依ラサリシト申立ツルト雖モ之レ通辭ニシテ採ルニ足ラス故ニ毫モ依ル  
 へキノ證アルコトナシ既ニ然レハ上告者ト被上告忠左衛門トノ間ニ行ハレタル豚兔類賣買  
 事業ハ合併商業ニ非サルコト證據明白ナルモノナリ之ヲ奈何ソ被上告第十號第十一號證カ  
 被上告忠左衛門ノ手ニ存スルノ事實アルノミヲ以テ直ニ合併商業損益分擔契約アリシモ  
 ノト判定スルコトヲ得ヘケンヤ況ンヤ元右衛門カ被上告忠左衛門ニ渡シタル被上告第九號  
 證記載ノ金六百五十圓ノ内金五百圓ハ上告人ニ仕拂フヘキ委託金ナルコト被上告者カ被上  
 告第一號證ヲ受取リ田村半十郎ニ依頼シテ同人ヨリ上告人ニ對シ上告第一號證ヲ出サシ  
 メタルノ事實ト被上告者カ其第一號證ヲ受取リ上告第一號證ヲ出シタルコトハ法院ノ強迫  
 ニ成リタリ或ハ二重ノ仕拂ナリト云フモ毫モ其證據ヲ舉ケル能ハサルノ事實及ヒ元右衛  
 門カ上告第十四號證ノ宣告ヲ受ケタル事實トチ參酌シ明々瞭々タルコト於テチヤ

第三條

東京上等裁判所ハ裁判狀第二條ニ於テ曩キニ上告人カ横濱裁判所ヘ上訴シタル横取吟味  
 願(則上告第  
 十二號證)ハ明治十年十一月十日則上告者カ其受書ヲ呈シタルキニ結了セシモノト判  
 定シ裁判狀第四條ニ於テ被上告第二號第三號第二十號證記載ノ金額ヲ被控訴兩人ヨリ償  
 却スヘシト裁判シタリ是又何タル不當ノ裁判ナリヤ凡ソ償金ハ(第一)果シテ該損金ノア  
 リシヤ否ヤノ事實(第二)該損金ハ適當ニ仕拂ハレタルモノナルヤ否ヤノ事實(第三)及ヒ  
 該損金ハ實ニ訴訟方一方ノ故造等ノ行爲ニヨリ生シタルモノナルヤ否ヤノ事實ヲ定メサ  
 ルヘカラス然ルニ被上告第二號第三號第二十號證ノ如キハ皆ニ一片ノ受取書ニ過キズヤ

テ之ヲ以テ直ニ被上告人ハ此ノ如キ損害ヲ受ケタルモノト看做スヲ得ヘカラス況ンヤ  
之ヲ適當ノ仕拂ナリト見做スヲ得ンヤ被上告者カ掲ケル所ノ第二號第三號證ハ共ニ差  
添人日當書物認料タルニ過ス然ルニ其額ハ九十二圓餘ニ登ル豈ニ過大金金額ナラスヤ業  
已ニ被上告者ハ上告人ヨリ係ラレタル横取吟味願ノ審問ハ漸ク四五回ニシテ然ル后再審  
ノ上願ヲナシタルモ審問十數度ニ過キカリシヲ東京上等裁判所ニ明言セリ其申供即チ  
左ノ如シ

德次郎ヨリ相係ル吟味願一件ニ付原被初對審ノ上審問ヲ受ケタルハ明治七年二月廿六  
日ト記憶致候德次郎ハ該吟味願ノ金額ヲ相渡シ候ハ明治七年三月八日ニ有之候右吟味  
願ノ始メヨリ三月八日ニ至ル迄自分儀五六回ノ御取調ヲ蒙リ候ニ相違無之候事自分儀  
横濱裁判所ニ再度願書ヲ呈シ德次郎元右衛門兩人ハ係リ再吟味願出候ハ明治七年三月  
下旬ニ有之候事右吟味願結局ノ日ハ明治十年十一月十日ニシテ此日元右衛門處刑相成  
候事該吟味願ノ爲メ自分或ハ元右衛門ニ於テ取調ヲ受候ハ數十度ノ事トハ相考候得共  
何分何ケ度ノ取調ヲ受ケタルコナルヤ記憶更ニ無之候事(明治十三年九月二日)德次郎ヨ  
リ係ラレ候吟味願ノ儀ハ明治七年二月廿三日ヨリ訴ヘラレ同三月八日ニ其結局ニ相成  
リ其以來ノ御取調等ハ右吟味願ノ爲メ自分ヨリ差出シ候再審上願ノ爲メニ御取調有之  
儀ニ御座候(明治十二年三月三日被上告口供)  
右ノ申立ニ依レハ上告人ヨリ被上告忠左衛門ニ係リタル吟味願(則チ上告第  
十三號證)ハ明治七年  
三月八日ニ於テ一旦其局ヲ結ヒタルヲ争フヘカラサルモノナルニ被上告第二號證ニ於テ

ハ同年三月二日ヨリ十四日ニ至迄連日ノ費用ヲ登錄シアリ且又該横取吟味願一件并ニ再  
審上願事件ニ關スル書類ヲ今回横濱裁判所ヨリ東京上等裁判所ニ廻送相成リタル際之ヲ  
閱スルニ被上告忠左衛門カ願書却下ノ受書一葉ノ存スルアリト雖モ其他毫モ上書等ノ類  
存在セザリシナリ然ラハ被上告忠左衛門カ被上告第二號第三號證ノ如ク仕拂チナシタリ  
ト云モ信用スヘカラサルナリ被上告忠左衛門ハ明治九年七月頃舊五小區戸長ヲ拜命シ同  
年十月頃四五小區合併四小區戸長ヲ拜命シ明治十一年十一月頃ニ至ル迄則チ郡區改正仰  
出サレ候マテ勤續キタリ(明治十二年九月廿六日被上告者口供)ト申立タリ然ラハ戸長ノ繁務トシテ被上告  
二十號證記載ノ金額ヲ費用スル程ノ閑アリテ横濱裁判所々在ノ(區内ニ滞留シ得ヘカラ  
ス旁以是等ノ費用アリシト云ハ素ヨリ信用シ難キナリ好シ假リニ該二號三號二十號證記  
載ノ金額ノ如ク費用シタルモノナリトスルモ奈何セシ該金額ハ果シテ當然ノ仕拂ナリト  
ハ認メ難キナリ且又上告人ノ如キハ決シテ該損金ヲ償却スルノ義務アラサルナリ其故ハ  
被上告於テ主張スル處ニヨルニ上告人ハ曾テ元右衛門ト故造シテ該損失ヲ蒙ラシタリト  
云フニアレヒ之レ素ヨリ無稽ノ語ナリ曩日忠左衛門ト上告第十三號證ノ如ク訴ヘタルハ  
上告人ナリ然レモ被上告忠左衛門ハ其際上告第一號證ヲ親戚半十郎ヨリ上告人ニ差入レ  
上告人ノ請求ヲ満足セシメタリ爾來被上告忠左衛門ハ元右衛門及ヒ上告者ニ係リ再審上  
願ヲナシ元右衛門ノ如キハ上告第十四號證ノ宣告ヲ受ケタリ然ラハ則チ被上告忠左衛門  
カ上告人ニ上告第十三號證ノ如ク訴ヘラレ又ハ上告人及元右衛門ニ係リ再審上願ヲ爲シ  
タルカタメ費用シタル金額ハ上告人ニ於テ之ヲ負擔スルノ謂レナキヲ以テナリ

第四條

東京上等待判所ハ全裁判所明治十二年第七十六號一件ノ如キ争訟アルノ場合ニ於テ被上告忠左衛門カ初審廳ニ於テノ請求ニ關ハラス終審廳ニ至リ俄然其請求ヲ轉シ金百圓ト上告第一號證トノ返償ヲ求ムルト申立タルヲ採用シタルハ東京上等待判所自カラ未ダ初審廳ノ裁判ヲ經サルモノヲ裁判シタル不法ノ裁判ナリ且亦該百圓ノ如キハ上告人於テ受取リタルモノニ非ラサルヲ上告第二號證ノ三百五十圓ハ其實上告第十六號證ノ三百圓ナルトハ事實ニ照シテ判然タルニ該金員ヲ受取リタルモノ、如ク裁判セシハ不相當ノ裁判ナリ

第五條

畢竟スレハ本件争訟ノ如何ニ關シテハ種々枝葉ノ論モアルヘシト雖モ之ヲ要スルニ被上告於テ第一〔渡金取戻〕ノ請求ヲナシ遂ケントスルニハ被上告第一號證ヲ受取リ親戚田村半十郎ヲシテ上告第二號證ヲ上告人ヘ差入レシメタルコトハ當時法庭ノ強迫ニ成リタリトノコト又ハ誤テ上告第二號證ヲ以テ精算ヲナシ遂ケタル豚代金ヲ二重ニ仕拂タルモノナルコトノ二個ノ情實ヲ證明シ獨リ上告人ニ向テ之カ請求ヲサハルヘカラス然ラサレハ被上告忠左衛門カ曩日上告人ヨリ被上告第一號證ヲ請取リ親戚田村半十郎ヲシテ上告第一號證ヲ上告人ニ差入レシメタルハ則相當ノ原由アリテ然リシモノト推定スヘキハ法理ノ當然ニシテ元右衛門ノ如キ被上告人ト直接ノ關係ヲラサルナリ然ルニ被上告ハ之レ法庭ノ威迫ナリ之レニ重拂ヒナリ(但シ其申立時々變更ス)ト喋々スレモ一モ其證ヲ舉グルコト能ハス其證ヲ舉

クルコト能ハサル又ミナラヌ上告第二號證ノ金額ハ本件争訟ノ豚代金トハ別口ナリト明言シ或ハ被上告ノ親戚タル半十郎ハ東京上等待判所ニ出頭シテ曩ニ上告人ト忠左衛門トノ紛議ニ關係シタルコト明言シ被上告忠左衛門於テモ亦上告第十三號證ノ爲メニ取調ヲ受タルハ五六回ニ過キスト明言ス然ハ則被上告者ハ二重ノ仕拂ヲナシタルニ非サルハ勿論法庭ノ強迫ニ依リテ止ヲ得ス親戚半十郎ヲシテ上告人ニ上告第一號證ヲ交付シタルニ非サルコト論ヲ俟ヌ又被上告ニ於テ本接第二〔損害要領〕ノ要求ヲナシ遂ケントセハ該要領金額ハ果ソ適實ノ仕拂ニシテ而カモ相當ニ要スヘキ費用ナリシコト證明スルハ勿論該要領金額ヲ生シタル所以ハ實ニ上告人ト元右衛門ト故造シテ獨リ被上告人ヲ陷レタルモノナルコト證明セヌンハアルヘカラス然ルニ被上告人ハ一モ之ヲ證明シ能ハサルナリ然ルニ東京上等待判所カ本訴ニ關シテハ尤モ必要ナル此ノ如キ論點ニ對シテハ何等ノ判決ヲモ與ヘラレザリシハ是蓋シ原被抗爭ノ點ニアラサル處ニ無用ノ裁判ヲ下シタル不法ノ裁判ナリ

判決

第一條

本案ハ上告者及板谷元右衛門ヨリ會テ被上告者ニ對シ爲シタル吟味願ハ無實ニ出タル者ナルニ因リ其吟味願ノ爲メニ一時冤罪ヲ蒙ラントスルノ場合ニ臨ミ止ムヲ得ス渡シタル金額ノ返還及ヒ之レカ爲メニ蒙リタル損害ノ賠償ヲ上告者及元右衛門ニ係リ要求スル者ニシテ其吟味願ノ無實ニ出テシ者タルコトハ原判文第一條ニ說示シタル理由ノ如ク本訴争論ノ豚類賣買ハ上告者ト被上告者トノ合併商業ニ係ル者ニシテ元右衛門トノ賣買ハ被上告者カ擔任



シタル者タルコト其吟味願ノ主タル證據即チ被上告第九號證「内金五百圓德次郎分」ノ九字ハ元右衛門カ記入變造シタルコト被上告第十二號證トニ照シテ判然タリ而シテ上告者及元右衛門カ吟味願ヲ爲セシ手續タル明治七年二月廿三日上告者ハ元右衛門ヨリ被上告者へ宛タル手紙ヲ證トシテ神奈川裁判所へ元右衛門ハ被上告第九號證ノ本紙ヲ變造シ之ヲ證トシテ八王子檢事出張所へ吟味願ヲ爲シタルモノナリ其同日ニ於テ同事ノ吟味願ヲ爲スノミナラス故ラニ他人ノ記シタル證書ヲ變造シテ之レカ證據ト爲セリ加之元右衛門ヨリ被上告者ニ宛タル手紙ヲ上告者ノ父徳兵衛ニ渡シタルハ明治六年十二月廿二日ナレハ被上告第九號證（實際授受シタルハ廿日ナリ）ノ通り元右衛門ヨリ金六百五十圓ヲ被上告者へ渡シタルト同日ナリ然ルニ其手紙ニハ豚代金五百圓先日依託致シ置クニ今以テ先方へ御届之レナキハ甚タ不都合云々ト記シタリト夫レ即日チ指テ先日ト唱フヘキヤ又其日ニ授受シナカラ今以テ御届之レナキハ甚タ不都合云々トノ督促ノ語ヲ用ユヘキヤ又徳兵衛カ其手紙ヲ要シ携ナカラ之チ後日ノ證ニセント遂ニ被上告者ニ渡サ、ルノミナラス一見タモ爲サシメサリシ斯ノ如事柄ヲ僅カ一日内ニ惹起シ得ヘキヤ苟モ相通謀スル所アルニアラサルヨリハ實際現出スヘキ事ニアラス是ニ由テ之ヲ觀レハ無實ノ吟味願ヲ上告者ト元右衛門ノ兩人馴合ニテ爲シタルコトモ亦明カナリ然ラハ則チ上告者ハ元右衛門ト共ニ本訴ノ賠償返還ノ責ニ當ラサルチ得サルハ勿論ナリトス

上告者ハ被上告者トノ間ニ於ケル豚兔賣買取引ハ上告第二號證ノ如ク決算ノ上金三百五十圓ヲ被上告者ヨリ入金シタルハ當時該商業上ノ決算ニヨリ差入ルヘキ金額アリシモノニシ

テ其際被上告者ハ田村半十郎チテ上告第一號證ヲ上告者ニ交附セシメタルモノナレハ上告第二號證ノ外ニ尙ホ上告者ニ對シ渡スヘキ金額アリシコト瞭然タリト云フモ唯其上告第二號證ト同時ニ上告第一號證ヲ田村半十郎チテ交附セシメタリト云フノミチ以テ果シテ上告第二號證ノ外ニ尙未上告者へ渡スヘキ金額アリト爲スチ得ヘカラサルノミナラス上來説明スル如ク本訴ノ主點ハ上告者ト被上告者トノ間ニ係ル取引ノ豚代金ニ就キ争フモノニ非ス又彼ノ上告第二號證三百五十圓ノ計算ニ就テ争フモノニモ非ラサレハ右ノ申立ハ畢竟本訴ノ賠償返還ノ點ニハ關セサルモノトス右ノ理由ナレハ原判文第四條ノ判決ハ不當ニアラ

第二條

上告第二號證ハ上告者ト被上告者トノ間ニ於ケル豚兔類取引上ヨリ成立チタルモノナリト雖モ該證ハ一時三百五十圓ヲ渡シ一切出入ナキモノト爲シタル證書ニシテ必スシモ之レニ損益分擔等ノ事柄ヲ記載セサルヘカラサルモノニアラサレハ其記載ナシト云フチ以テ直ニ合併商業ニ非スト爲スチ得ス而シテ其合併商業ヲ爲シタルモノト認メサルチ得サルコト原判文第一條ノ理由ノ如ク然リトス

第三條

被上告者カ上告者ト元右衛門トノ吟味願ヲ受ケタルハ明治七年二月廿三日ナリ而シテ被上告者ハ明治七年三月八日一旦被上告第一號證ノ如ク金五百圓（現金百圓及金四百圓田村半十郎預カリ證書）ノ授受ヲ爲シタルモ引續キ再審上願ヲ爲シタリト然ルニ其三月八日ニ至ルマテニ被上告者カ糾問

ヲ受ケタルハ五六回ナルニ被上告第二號證ニハ三月二日ヨリ十四日マテ連日ノ費用ヲ記載シアルハ其當ヲ得サルモノ、如シト雖モ個ハ其事件ニ付差添ヲ求メタルノ費用ナレハ是等ノ場合ニ於テハ假令訟庭ニ出サル日ト雖モ其契約ニ依リ拂ハサルヲ得サルコトナキヲ保チ難シ且其上願タル即チ上告者及元右衛門カ無實ノ吟味願ヲ爲シタルニ起因スルモノニシテ該件ノ審理ハ延テ明治十年十一月十日ニ及ヒ始メテ歸結ニ至リ終始三年強半ノ久シキニ涉リタルモノナレハ被上告第二三號及第廿號證ノ如ク實際費用シタル上ハ強チ之ヲ當然ノ仕拂コアラスト云フヲ得可カラス然リ而シテ上告者カ元右衛門ト共ニ是等要價ノ責メニ任セサルヲ得サルコト前第一條ニ說明ヲ與ヘタルカ如シ

第四條

被上告者ハ始審廳ニ於テ金五百圓ノ返還ヲ求メ控訴ニ至リ當時實際授受シタル金百圓ト上告第一號證トノ返還ヲ求メタルモ其第一號證ハ當時被上告者カ渡スヘキ現金ニ代ヘ田村半十郎チシテ之ヲ交附セシメタルコト上告者ハ勿論本訴關係人ハ皆認メテ異論ナキ所ナレハ固ヨリ彼ノ新ニ訴訟範圍外ノ求メテ爲スモノト同視スヘキモノニアラス況ソヤ其訴名チ異ニスルモ現ニ元右衛門ヨリ上告第一號證ヲ以テ預ケ金ノ請求ヲ爲シ既ニ始審ノ裁判ヲ經テ同時ニ控訴ノ審理ヲ爲シタルニ於テナヤ又上告第二號證ノ三百五十圓ハ上告第十六號證ノ如ク三百圓ナル事實アリト云フヲ以テ右百圓ハ授受シタルモノニアラスト爲スヲ得ヘカラス何トナレハ他ニ之ヲ認ムヘキ徵憑ナキニ依リ唯彼レニ勘辨減額シタルハ是レモ減額シタリトハ必ス可カラサルコトナレハナリ

第五條

夫レ上告者ト元右衛門ト聯合無實ノ吟味願ニ及ヒ爲メニ被上告者ハ止ムヲ得ス被上告第一號證ノ如ク金五百圓(現金百圓及金四百圓田村半十郎預カリ證書)ノ授受ヲ爲セシモノタルコト前第一條ニ說明シタルカ如シ畢竟是等ノ事實ヲ認定シタル上原判文第四條ノ如ク判決シタルモノナレハ原裁判所カ特ニ其點ノ理由ヲ說示セザリシト云フヲ以テ本案ヲ破毀スヘキ事由ト爲シ難シ

第六條

前數條ノ理由ナルヲ以テ東京上等裁判所ニ於テ言渡シタル終決裁判ハ不當ニアラス依テ破毀セサルモノナリ  
第五百九十四號

○流地證取消並ニ質地受戻上告ノ判文(明治十五年四月廿日上告  
十五年十二月廿七日申渡)

千葉縣下總國香取郡香取村士族

上告者

香 取 保 禮

東京府神田區錦町一丁目十番地

寄留岐阜縣平民

渡 邊 義 雄

右代言人

千葉縣下總國香取郡香取村平民

尾 形 是 眞

被上告者

東京府神田區今川小路二丁目十

上告代言人カ東京控訴裁判所ノ裁判ヲ不法ナリトシ本院ニ向テ之カ破毀ヲ要ムルノ主點ハ左ノ如シ

一 被上告乙第一二號證書ハ論地ヲ官有ナラサシメシメカ爲メ明治七年七月中被上告者ヨリ騙取セラレタルモノニシテ明治三年庚午十二月中論地ヲ真正ニ流地ト爲スノ目的ヲ以テ之ヲ交付ナシタルモノニアラサルナリ明治三年庚午十二月中流地ニ相成ラサルハ其翌年ナル明治四年ノ質地與印帳即チ上告甲第十五號證ニ據レハ甲第十六七號證ノ如ク論地二筆ハ明治四年辛未二月中ニ於テ向フ五ケ年間上告者ヨリ被上告者へ質入レ爲シアルト上告甲第六號證ノ如ク論地ニ對スル明治四年ノ貢租上納方ニ付原被告間ニ於テ諍訟ヲ起シ此貢租ハ上告者ヨリ上納ナシタルト以上二個ノ證憑ニ於テ明白ナリト云フヘキナリ然ルチ東京控訴裁判所ハ此證憑有ニモ拘ラス單ニ被上告乙第一二號證書ノ文詞ノミニ拘泥シ裁判セラレタルハ審理ヲ盡サ、ル不法ノ裁判ナリトノ事

一 明治六年第五十一號公布但書ノミニ注目シ他ニ之ニ關スル法律規則無シトモ其地所質入期限ノ長短如何ニ拘ラス明治五年二月十五日以前ニ於テ差入タル質地ハ總テ流地ニ歸スヘキモノ、如シト雖モ此公布ニ樞要ナル關係ヲ有スル明治六年第十八號公布第十四條及ヒ該公布第十五條ヲ增補ナシタル明治六年第六十七號公布并ニ明治六年司法省第四十六號布達アリ之ヲ對照スル時ハ明治五年二月十五日以前ニ係ル質地ト雖モ

其期限ノ明治六年七月三十一日以後ニ及フモノハ地所質入規則ニ准據シ證書ノ書替ヘチ爲シ流地トナルヘキモノニアラサルナリ然ルチ東京控訴裁判所ハ此等ノ公布及ヒ布達アルニモ拘ラス論地ハ明治五年二月十五日以前ノ質入レナレハ受戻ノ權ナシト斷定セラレタルハ裁判法律ニ違フトノ事

一 論地ハ元來香取神宮神官ノ祖先ニ於テ開墾セシ地所ニシテ明治七年內務省乙第七十二號明治九年同省乙第八十七號乙第一百十九號達ニ依リ被上告乙第五號證ノ如ク自費開墾ノ廉チ以テ上告者ヨリ拂下ケテ出願シ之カ採用ヲ得タルモノナリ然レハ被上告乙第二四號證ノ如ク該地ノ原因取調書又ハ其拂下ケノ請書等ヲ被上告者等ヨリ地方廳へ差出シ之カ地券受ケテ手續ヲ爲シタルモ其拂下ケテ受ケタルモノハ即チ上告者ナレハ論地ノ所有者ナル上告者外ナル者ニ於テ右等ノ書面ヲ差出シ又ハ手續ヲ爲シタルトテ固ヨリ上告者ニ對シテハ無効ノ所爲ナリトス然ルチ東京控訴裁判所ハ是等ノ理由アルニモ拘ラス單ニ被上告者カ地券受ノ手續ヲ爲シタルトノ表面ナル形跡ニノミ拘泥シ論地所

有權移轉ノ證憑トセラレタルハ不法ノ裁判ナリトノ事  
被上告者ハ上告ノ不理ナルヲ論駁シ東京控訴裁判所ノ裁判ヲ辯護シタリ

辯明

上告者ニ於テハ被上告乙第一二號證書ハ論地ヲ官有ナラサシメシメカ爲メ明治七年七月中被上告者へ騙取セラレタルナリト云ヒ被上告者ニ於テハ該第一二號證書ハ正シク明治三年十二月中流地ノ證書ニ受取リタルナリト云モノナレハ此場合ニ於テハ上告者被上告

者カ提出スル證據書ニ憑リ果シテ論地ハ明治三年十二月中流地ニ歸シタルヤ否ヲ審明シ以テ之カ裁判ヲ爲サ、ル可ラス抑モ上告甲第十五號證即チ村役場ニ存置シアル所ノ質地與印帳ニ依レハ論地ハ明治四年二月中被上告者ヘ向フ五ヶ年間質地ニ差入レタルトノ登記アリ若モ論地ハ明治三年十二月流地トナリタルモノナレハ其翌年ナル明治四年二月ニ至リ之レヲ質地ニ爲スヘキノ道理ナク又果シテ流地トナリタルモノナレハ其流地以來ハ論地ニ對スル賃租等ハ當然被上告者ニ於テ負擔スヘキ等ナルニ絶テ之レカ證據アルコトアラヌ却テ上告者ハ其甲第六號證ヲ掲テ明治四年ノ賃租上納方ニ付上告被上告ノ間ニ諍訟ヲ起シ終ニ上告者ヨリ上納スルコトニ至レリト申述セシニ被上告者ハ別段之カ反證ヲモ舉示セサルノミナラス被上告乙第一二號證書ニ依ルモ「然ル上ハ御水帳名寄帳共貴殿名前ニ書改メ永々御所持可被成候」云々トアルニ被上告者ノ名前ニ書改タル水帳名寄帳等ハ更ニ之ヲ提供セサルナリ然ハ此以上ノ事實ヲ審明スルコトアラサレハ設ヒ被上告者カ論地券狀申受ケノ手續ヲ盡シタルトテ未タ其地券ノ下附ヲ得タルモノニモアラサルノミナラス其地券受ケノ手續ヲ盡シタリト云フ其手續ニ於テモ上告者カ異議アル所ナレハ是等ノ顛末モ亦審究スルニアラサレハ直チニ被上告乙第一二號證書ヲ真正ノモノト斷定スルヲ得ス然ルチ原裁判所ハ是等ノ點ヲ審究セシメテ單ニ「不正ニ成立チタルノ證ナキ限ハ漫ニ之ヲ取消スチ得ス」云々ト申渡シタルハ未タ審理ヲ盡サ、ル裁判ナリトス

明治六年第五十一號公布但書ニ「壬申二月十五日以前取引ノ質地ニテ年季明不受戻時ハ從前之通流地タルヘキ事」トアレハ明治五年壬申二月十五日以前ニ於テ授受セシ質地ノ

明治六年七月三十一日マテニ其期限切レトナルヘキモノヲ指シシモノニシテ即チ明治六年第十八號公布地所賃入書入規則第十四條ニ「當今賃入又ハ書入ニ致シ置年期中ノ分ハ總テ前文規則ニ照準シ當七月限り證文相改可申事」トアリ又明治六年第六十七號公布ヲ以テ増補シタル右賃入書入規則第十五條ニ「是迄賃入書入ニ致シ置候分ハ前約ノ年季据置不苦尤證文面等前文規則ニ觸レ候廉ハ總テ相改可申事」トアリ又明治六年司法省第四十六號達ニ「從前質地ヨリ起ル訴訟ハ證文中ニ年季明不受戻候ハ、流地可致旨ノ文言有之分ハ期限ヨリ二ヶ月右文言無之分ハ十ヶ年ノ内訴出候ハ、受戻申付來候處當八月ヨリ以後ハ流地文言ニ不拘年季明不受戻シテ訴訟ヲナス時ハ明治六年第五十一號布告ニ基キ二ヶ月又ハ十ヶ年ノ猶豫ヲ與ヘス直ニ糶賣ノ手續ヲ以テ裁判可致事」トアレハ其期限ノ明治六年七月三十一日以後ニ係ル質地ハ總テ右地所賃入書入規則第十四條第十五條ニ基キ證書ノ書改メヲ爲シ又借主返金スルコト能ハサル場合ニ於テハ流地ノ處分ニ歸セスシテ右司法省ノ達ニ因リ糶賣ノ手續ヲ以テ之カ處分ヲ爲スヘキ筋ナリトス然ルチ原裁判所ハ「明治五年二月十五日已前ニ係ル質地ニシテ年季明ケ之ヲ受戻サス」云々ト申渡シタルハ法律ノ適用ヲ誤リタル裁判ナリトス

判決

右辯明ノ筋合ナルコト付東京控訴裁判所カ本訴ニ對シ申渡シタル裁判ヲ破毀シ之ヲ名古屋控訴裁判所ヘ移スニ依リ同裁判所ノ裁判ヲ受クヘキモノナリ

但シ上告ニ係ル入費ハ被上告者ノ負擔タルヘシ

第五百九十五號

二七八

○流地證取消并ニ質地受戻上告ノ判文(明治十五年四月廿日上告  
十五年十二月廿七日申渡)

千葉縣下總國香取郡香取村士族

上告者

香 取 保 禮

東京府神田區錦町一丁目十番地

寄留岐阜縣平民

右代言人

渡 邊 義 雄

被上告者

千葉縣下總國香取郡佐原村平民

伊 能 茂 左 衛 門

東京府神田區今川小路二丁目十

五番地平民

右代言人

志 摩 萬 次 郎

上告代言人カ東京控訴裁判所ノ裁判ヲ不法ナリトシ本院ニ向テ之カ破毀ヲ要ムルノ主點ハ  
左ノ如シ

一被上告乙第一號證書ハ論地チ官有ナラサラシメシカ爲メニ明治七年中被上告者ヨリ騙  
取セラレタルモノニシテ明治三年庚午十二月中論地チ真正ニ流地ト爲スノ目的ヲ以テ  
之ヲ交付ナシタルモノニアラサルナリ明治三年庚午十二月中流地ニ相成ラサルコトハ其  
翌年ナル明治四年ノ質地與印帳即チ上告甲第十四號證ニ據レハ甲第十五六號證ノ如ク

論地ハ明治四年中ニ在テ被上告者ヘ質入レアルコト上告甲第三四號證ノ如ク論地ニ對  
スル明治四年ノ貢租チ上告者ニ於テ負擔上納セシコト右甲第十六號證ノ草案ハ甲第一  
號證ニシテ此一號證ハ甲第五號證ノ通り被上告者ノ自筆ニ係リシコト被上告者ヨリ上  
告者ヘ差入レタル甲第六號ノ計算書ニ甲第一號證ノ金額チ記載アルコト以上四個ノ證  
憑ニ於テ明白ナリト云フヘキナリ然ルチ東京控訴裁判所ハ此證憑アルニモ拘ラス單ニ  
被上告乙第一號證書ノ文詞ノミニ拘泥シ裁判セラレタルハ審理チ盡サミル不法ノ裁判  
ナリトノ事

一明治六年第五十一號公布但書ノミニ注目シ他ニ之ニ關スル法律規則ナシトセハ其地所  
質入レ期限ノ長短如何ニ拘ラス明治五年二月十五日以前ニ於テ差入レタル質地ハ總テ  
流地ニ歸スヘキモノ、如シト雖モ此公布ニ樞要ナル關係チ有スル明治六年第十八號公  
布第十四條及ヒ該公布第十五條チ増補ナシタル明治六年第六十七號公布并ニ司法省  
第四十六號布達アリ之チ對照スル時ハ明治五年二月十五日以前ニ係ル質地ト雖モ其期  
限ノ明治六年七月三十一日以後ニ及フモノハ地所質入書入規則ニ准據シ證書ノ書替ヘ  
チ爲シ流地トナルヘキモノニアラサルナリ然ルチ東京控訴裁判所ハ此等ノ公布及ヒ布  
達アルニモ拘ハラス論地ハ明治五年二月十五日以前ノ質入レナレハ受戻シノ權ナシト  
斷定セラレタルハ裁判法律ニ違フトノ事

一論地ハ元來香取神宮神官ノ祖先ニ於テ開墾セシ地所ニシテ明治七年內務省乙第七十二  
號明治九年同省乙第八十七號乙第九十號達ニ依リ被上告乙第五號證ノ如ク自費開墾

三七九

ノ廉チ以テ上告者ヨリ拂下ケテ出願シ之ヲ採用ヲ得タルモノナリ然レハ被上告者乙第三四號證ノ如ク該地ノ原因取調書又ハ其拂下ケテ請書等ヲ被上告者等ヨリ地方廳へ差出シ之カ地券受ケテ手續ヲ爲シタルモ其拂下ケテ受ケタルモノハ即チ上告者ナレハ論地ノ所有者ナル上告者外ナル者ニ於テ右等ノ書面ヲ差出シ又ハ手續ヲ爲シタルトテ固ヨリ上告者ニ對シテハ無効ノ所爲ナリトス然ルチ東京控訴裁判所ハ是等ノ理由アルニモ拘テス單ニ被上告者カ地券受ケテ手續ヲ爲シタルトノ表面ナル形跡ニノミ拘泥シ論地所有權移轉ノ證據トセラレタルハ不法ノ裁判ナリトノ事

被上告者ハ上告ノ不理ナルヲ論駁シ東京控訴裁判所ノ裁判ヲ辯護シタリ

辯明

上告者ニ於テハ被上告者乙第一號證書ハ論地ヲ官有ナラサシメシメカ爲メ明治七年七月中被上告者へ騙取セラレタルナリト云ヒ被上告者ニ於テハ該第一號證書ノ正ク明治三年十二月中流地ノ證書ニ受取タルナリト云フモノナレハ此場合ニ於テハ上告者被上告者カ提出スル證據書ニ憑リ果シテ論地ハ明治五年十二月中流地ニ歸シタルヤ否ヲ審明シ以テ之カ裁判ヲ爲サ、ル可ラス抑モ上告者第十四號證即チ村役場ニ存置シアル處ノ質地與印帳ニ依レハ論地ハ明治四年八月中被上告者へ向フ五ヶ年間質地ニ差入レタルトノ登記アリ而シテ其質地證書ノ草稿即チ上告者第一號證ハ甲第五號證ノ如ク被上告者カ自筆ニ係リタルトノ由ナリ上告者第六號證即チ明治四年八月十九日附テ以テ被上告者へ差入レタル計算書ニ據ルモ「金百七十五兩此度田地質地賃分」ト明記アリ此百七十五兩ノ金額ハ被

上告者カ自筆ニ係リタルト云質地證書ノ草稿ナル甲第一號證ニ記載スル金額ト符合セリ若モ論地ハ明治三年十二月流地トナリタルモノナレハ其翌年ナル明治四年八月ニ至リ被上告者ニ於テ之カ質地證書ノ草稿及ヒ計算書ヲ附與ス可キ道理ナク又果シテ流地トナリタルモノナレハ其流地以來ハ論地ニ對スル貢租等ハ當然被上告者ニ於テ負擔スヘキ筈ナルニ絶テ之カ證據アルコトヲ却テ上告者ハ其甲第三四號證ヲ掲ケ以テ明治四年ノ貢租ハ上告者ニ於テ上納セリト申述セルニ被上告者ハ別段之カ反證ヲモ舉示セサルノミナラス被上告者乙第一號證書ニ據ルモ「然ル上ハ御水帳名寄帳共貴殿名前ニ書改メ永々御所持可被成候」云々トアルニ被上告者ノ名前ニ書改メタル水帳名寄帳等ハ更ニ之ヲ提供セサルナリ然レハ此以上ノ事實ヲ審明スルコトアラサレハ設令ヒ被上告者カ論地券狀申受ケテ手續ヲ盡シタリトテ未タ其地券ノ下附ヲ得タルモノニモアラサルノミナラス其地券受ケテ手續ヲ盡シタリト云フ其手續ニ於テモ上告者カ異議アル所ナレハ是等ノ顛末モ亦審究スルニアラサレハ直チニ被上告者乙第一號證書ヲ真正ノモノト斷定スルヲ得ス然ルチ原裁判所ハ是等ノ點ヲ審究セシテ單ニ「不正ニ成立チタルノ證ナキ限ハ漫ニ之ヲ取消スル得ス」云々ト申渡シタルハ未タ審理ヲ盡サ、ル裁判ナリトス

明治六年第五十一號公布但書ニ「壬申二月十五日以前取引ノ質地ニテ年季明不受戻時ハ從前之通流地タルヘキ事」トアルハ明治五年壬申二月十五日以前ニ於テ授受セシ質地ノ明治六年七月三十一日マテニ其期限切レトナルヘキモノヲ指シモノニシテ即チ明治六年第十八號公布地所賃入書入規則第十四條ヨリ「當今賃入又ハ書入ニ致シ置年期中ノ公

ハ總テ前文規則ニ照準シ當七月限リ證文相改可申事トアリ又明治六年第百六十七號公布ヲ以テ増補シタル右質入書入規則第十五條ニ「是迄質入書入ニ致シ置候分ハ前約ノ年季據置不苦尤證文面等前文規則ニ觸レ候廉ハ總テ相改可申事」トアリ又明治六年司法省第四十六號達ニ「從前質地ヨリ起ル訴訟ハ證文中ニ年季明不受戻候ハ、流地可致者ノ文言有之分ハ期限ヨリ二ヶ月右文言無之分ハ十ヶ年ノ内訴出候ハ、受戻申付來候處當八月ヨリ以後ハ流地文言ニ不拘年季明不受戻シテ訴訟ヲナス時ハ明治六年第五十一號布告ニ基キ二ヶ月又ハ十ヶ年ノ猶豫ヲ與ヘス直糶賣ノ手續ヲ以テ裁判可致事」トアレハ其期限ノ明治六年七月三十一日以後ニ係ル質地ハ總テ右地所質入書入規則第十四條第十五條ニ基キ證書ノ書改メヲ爲シ又借主返金スルヲ能ハサル場合ニ於テハ流地ノ處分ニ歸セスシテ右司法省ノ達ニ因リ糶賣ノ手續ヲ以テ之カ處分ヲ爲スヘキ筋ナリトス然ルチ原裁判所ハ（明治五年二月十五日已前ニ係ル質地ニシテ年季明ケ之ヲ受戻サス）云々ト申渡シタルハ法律ノ適用ヲ誤リタル裁判ナリトス

判決

右辯明ノ筋合ナルニ付東京控訴裁判所カ本訴ニ對シ申渡シタル裁判ヲ破毀シ之ヲ名古屋控訴裁判所ヘ移スニ依リ同裁判所ノ裁判ヲ受クヘキモノナリ但シ上告ニ係ル入費ハ被上告ノ負擔タルヘシ  
第五百九十六號

○流地證取消并ニ質地受戻上告ノ判文（明治十五年四月廿日上告  
全十五年十二月廿七日申渡）

上告者

千葉縣下總國香取郡香取村士族 香 取 保 禮

東京府神田區錦町一丁目十番地

寄留岐阜縣平民

右代言人

渡 邊 義 雄

千葉縣下總國香取郡佐原村平民

被上告者

加 瀬 庄 次 郎

東京府神田區今川小路二丁目十

五番地平民

右代言人

志 摩 萬 次 郎

上告代言人カ東京控訴裁判所ノ裁判ヲ不法ナリトシ本院ニ向テ之カ破毀ヲ要ムルノ主點ハ左ノ如シ

一被上告乙第一號證書ハ論地ヲ官有ナラサシメシメカ爲メニ明治七年中被上告者ヨリ騙取セラレタルモノニシテ明治三年庚午十二月中論地ヲ真正ニ流地ト爲スノ目的ヲ以テ之ヲ交付ナシタルモノニアラサルナリ明治三年庚午十二月中流地ニ相成ラサルコトハ其翌年ナル明治四年ノ質地與印帳即チ上告甲第十四號證ニ據レハ甲第十五號證ノ如ク論地ハ明治四年中ニ在テ被上告者ヘ質入レアルコト上告甲第三四號證ノ如ク論地ニ對スル明治四年ノ貢租チ上告者ニ於テ負擔上納セシコト以上二個ノ證憑ニ於テ明白ナリト

云フヘキナリ然ルチ東京控訴裁判所ハ此證憑アルニモ拘ラヌ單ニ被上告乙第一號證書  
 ノ文詞ノミニ拘泥シ裁判セラレタルハ審理ヲ盡サ、ル不法ノ裁判ナリトノ事  
 一明治六年第五十一號公布但書ノミニ注目シ他ニ之ニ關スル法律規則ナシトセハ其地所  
 質入レ期限ノ長短如何ニ拘ラヌ明治五年二月十五日以前ニ於テ差入レタル質地ハ總テ  
 流地ニ歸スヘキモノ、如シト雖モ此公布ニ樞要ナル關係ナ有スル明治六年第十八號公  
 布第十四條及ヒ該公布第十五條ヲ增補ナシタル明治六年第六十七號公布并ニ司法省  
 第四十六號布達アリ之ヲ對照スル時ハ明治五年二月十五日以前ニ係ル質地ト雖モ其期  
 限ノ明治六年七月三十一日以後ニ及フモノハ地所質入書入規則ニ准據シ證書ノ書替ヘ  
 ナ爲シ流地トナルヘキモノニアラサルナリ然ルチ東京控訴裁判所ハ此等ノ公布及ヒ布  
 達アルニモ拘ラヌ論地ハ明治五年二月十五日以前ノ質入レナレハ受戻シノ權ナシト斷  
 定セラレタルハ裁判法律ニ違フトノ事

一論地ハ元來香取神宮神官ノ祖先ニ於テ開墾セシ地所ニシテ明治七年內務省乙第七十二  
 號明治九年同省乙第八十七號乙第一百十九號達ニ依リ被上告乙第七號證ノ如ク自費開墾  
 ノ廉チ以テ上告者ヨリ拂下ケテ出願シ之カ採用ヲ得タルモノナリ然レハ被上告乙第五  
 六號證ノ如ク該地ノ原因取調書又ハ其拂下ケテノ請書等ヲ被上告者等ヨリ地方廳ヘ差出  
 シ之カ地券受ケノ手續ヲ爲シタルモ其拂下ケテ受ケタルモノハ即チ上告者ナレハ論地  
 ノ所有者ナル上告者外ナル者ニ於テ右等ノ書面ヲ差出シ又ハ手續ヲ爲シタルトテ固ヨ  
 リ上告者ニ對シテハ無効ノ所爲ナリトス然ルチ東京控訴裁判所ハ是等ノ理由アルニモ

拘ラヌ單ニ被上告者カ地券受ケノ手續ヲ爲シタルトノ表面ナル形跡ニノミ拘泥シ論地  
 所有權移轉ノ證憑トセラレタルハ不法ノ裁判ナリトノ事

被上告者ハ上告ノ不理ナルヲ論駁シ東京控訴裁判所ノ裁判ヲ辯護シタリ

辯明

上告者ニ於テハ被上告乙第一號證書ハ論地チ官有ナラサシメシカ爲メ明治七年七月中  
 被上告者ヘ騙取セラレタルナリト云ヒ被上告ニ於テハ該第一號證書ハ正ク明治三年十二  
 月中流地ノ證書ニ受取タルナリト云モノナレハ此場合ニ於テハ上告者被上告者カ提出ス  
 ル證據書ニ憑リ果シテ論地ハ明治三年十二月中流地ニ歸シタルヤ否ヲ審明シ以テ之カ裁  
 判ヲ爲サ、ル可カラス抑モ上告甲第十四號證即チ村役場ニ存置シタル所ノ質地與印帳ニ  
 依レハ論地ハ明治四年十一月中被上告者ヘ向フ五ヶ年間質地ニ差入タルトノ登記アリ若  
 シモ論地ハ明治三年十二月流地トナリタルモノナレハ其翌年ナル明治四年十一月ニ至リ  
 之チ質地ニ爲スヘキノ道理ナク又果シテ流地トナリタルモノナレハ其流地以來ハ論地ニ  
 對スル貢租等ハ當然被上告者ニ於テ負擔スヘキ筈ナルニ絶テ之カ證憑アルニアラス却テ  
 上告者ハ其甲第三四號證ヲ掲ケ以テ明治四年ノ貢租ハ上告者ニ於テ上納セリト申述セシ  
 ニ被上告者ハ別段之カ反證ヲモ舉示セサルノミナラス被上告乙第一號證書ニ依ルモ「然  
 ル上ハ御水帳名寄帳共貴殿名前ニ書改永々御所持可被成候」云々トアルニ被上告者ノ名  
 前ニ書改メタル水帳名寄帳等ハ更ニ之ヲ提供セサルナリ然レハ此以上ノ事實ヲ審明スル  
 ニアラサレハ設ヒ被上告者カ論地券狀申受ケノ手續ヲ盡シタルトテ未タ其地券ノ下附チ



得タルモノニモアラサルノミナラス其地券受ケノ手續ヲ盡シタリト云フ其手續ニ於テモ  
上告者カ異議アル所ナレハ是等ノ顛末モ亦審究スルニアラサレハ直チニ被上告乙第一號  
證書ヲ真正ノモノト断定スルヲ得ス然チ原裁判所ハ是等ノ點ヲ審究セスシテ單ニ「不正  
ニ成立タルノ證ナキ限ハ漫ニ之ヲ取消ヲ得ス」云々ト申渡シタルハ未タ審理ヲ盡サ、ル  
裁判ナリトス

明治六年第五十一號公布但書ニ「壬申二月十五日以前取引ノ質地ニテ年季明不受戻時ハ  
從前之通流地タルヘキ事」トアルハ明治五年壬申二月十五日以前ニ於テ授受セシ質地ノ  
明治六年七月三十一日マテニ其期限切レトナルヘキモノヲ指シセシモノニ即チ明治六  
年第十八號公布地所質入書入規則第十四條ニ「當今質入又ハ書入ニ致シ置年期中ノ分ハ  
總テ前文規則ニ照準シ當七月限り證文相改可申事」トアリ又明治六年第六十七號公布  
チ以テ増補シタル右質入書入規則第十五條ニ「是迄質入書入ニ致シ置候分ハ前約ノ年季  
据置不苦尤證文面等前文規則ニ觸候廉ハ總テ相改可申事」トアリ又明治六年司法省第四  
十六號達ニ「從前質地ヨリ起ル訴訟ハ證文中ニ年季明不受戻候ハ、流地可致旨ノ文言有  
之分ハ期限ヨリ二ヶ月右文言無之分ハ十ヶ月ノ内訴出候ハ、受戻申付來候處當八月ヨリ  
以後ハ流地文言ニ不拘年季明不受戻シテ訴訟ヲナス時ハ明治六年第五十一號布告ニ基キ  
二ヶ月又ハ十ヶ月ノ猶豫ヲ與ヘス直ニ糶賣ノ手續ヲ以テ裁判可致事トアレハ其期限ノ明  
治六年七月三十一日以後ニ係ル質地ハ總テ右地所質入書入規則第十四條第十五條ニ基キ  
證書ノ書改メヲ爲シ又借主返金スルコト能ハサル場合ニ於テハ流地ノ處分ニ歸セスシテ右

司法省ノ達ニ因リ糶賣ノ手續ヲ以テ之カ處分ヲ爲スヘキ筋ナリトス然ルチ原裁判所ハ  
〔明治五年二月十五日已前ニ係ル質地ニシテ年季明ケ之ヲ受戻サス〕云々ト申渡シタルハ  
法律ノ適用ヲ誤リタル裁判ナリトス

判決

右辯明ノ筋合ナルニ付東京控訴裁判所カ本訴ニ對シ申渡シタル裁判ヲ破毀シ之チ名古屋控  
訴裁判所ヘ移スニ依リ同裁判所ノ裁判ヲ受クヘキモノナリ  
但シ上告ニ係ル入費ハ被上告者ノ負擔タルヘシ

第五百九十七號

○流地證取消并ニ質地受戻上告ノ判文(明治十五年四月廿日上市告  
十五年十二月廿七日申渡)

千葉縣下總國香取郡香取村士族

香 取 國 雄

東京府神田區錦町一丁目十番地

寄留岐阜縣平民

渡 邊 義 雄

千葉縣下總國香取郡佐原村平民

伊 能 茂 左 衛 門

東京府神田區今川小路二丁目十  
五番地平民

上告代言人カ東京控訴裁判所ノ裁判ヲ不法ナリトシ本院ニ向テ之カ破毀ヲ要スルノ主點ハ左ノ如シ

一被上告乙第一號證書ハ論地ヲ官有ナラサシメシメカ爲メニ明治七年中被上告者ヨリ騙取セラレタルモノニシテ明治三年庚午十二月中論地ヲ真正ニ流地ト爲スノ目的ヲ以テ之ヲ交付ナシタルモノニアラサルナリ明治三年庚午十二月中流地ニ相成ラサルコトハ其翌年ナル明治四年ノ質地與印帳即チ上告甲第十號證ニ據レテ甲第十一號證ノ如ク論地ハ明治四年中ニ在テ被上告者ヘ質入レアルコトト上告甲第三號證ノ如ク論地ニ對スル明治四年ノ貢租チ上告者ニ於テ負擔上納セシコト以上二個ノ證憑ニ於テ明白ナリト云フヘキナリ然ルチ東京控訴裁判所ハ此證憑アルニモ拘ラス單ニ被上告乙第一號證書ノ文詞ノミニ拘泥シ裁判セラレタルハ審理ヲ盡サハル不法ノ裁判ナリトノ事

一明治六年第五十一號公布但書ノミニ注目シ他ニ之ニ關スル法律規則ナシトセハ其地所質入レ期限ノ長短如何ニ拘ラス明治五年二月十五日以前ニ於テ差入レタル質地ハ總テ流地ニ歸スヘキモノ、如シト雖モ此公布ニ樞要ナル關係ヲ有スル明治六年第十八號公布第十四條及ヒ該公布第十五條ヲ增補ナシタル明治六年第六十七號公布并ニ司法省第四十六號布達アリ之ヲ對照スル時ハ明治五年二月十五日以前ニ係ル質地ト雖モ其期限ノ明治六年七月三十一日以後ニ及フモノハ地所質入規則ニ准據シ證書ノ書替チ爲シ流地トナルヘキモノニアラサルナリ然ルチ東京控訴裁判所ハ此等ノ公布及ヒ布達

アルニモ拘ラス論地ハ明治五年二月十五日以前ノ質入レナレハ受戻シノ權ナシト斷定セラレタルハ裁判法律ニ違フトノ事

一論地ハ元來香取神宮神官ノ祖先ニ於テ開墾セシ地所ニシテ明治七年內務省乙第七十二號明治九年同省乙第八十七號乙第九十九號達ニ依リ被上告乙第四號證ノ如ク自費開墾ノ廉チ以テ上告者ヨリ拂下ケテ出願シ之カ採用ヲ得タルモノナリ然レハ被上告乙第二三號證ノ如ク該地ノ原因取調書又ハ其拂下ケノ請書等ヲ被上告者等ヨリ地方廳ヘ差出シ之カ地券受ケノ手續チ爲シタルモ其拂下ケテ受ケタルモノハ即チ上告者ナレハ論地ノ所有者ナル上告者外ナル者ニ於テ右等ノ書面チ差出シ又ハ手續チ爲シタルトテ固ヨリ上告者ニ對シテハ無効ノ所爲ナリトス然ルチ東京控訴裁判所ハ是等ノ理由アルニモ拘ラス單ニ被上告者カ地券受ケノ手續チ爲シタルトノ表面ナル形跡ニノミ拘泥シ論地所有權移轉ノ證憑トセラレタルハ不法ノ裁判ナリトノ事

被上告者ハ上告ノ不理ナルヲ論駁シ東京控訴裁判所ノ裁判ヲ辯護シタリ

辯明

上告者ニ於テハ被上告乙第一號證書ハ論地ヲ官有ナラサシメシメカ爲メ明治七年七月中被上告者ヘ騙取セラレタルナリト云ヒ被上告者ニ於テハ該第一號證書ハ正ク明治三年十二月流地ノ證書ニ受取リタルナリト云フモノナレハ此場合ニ於テハ上告者被上告者カ提出スル證據書ニ憑リ果シテ論地ハ明治三年十二月中流地ニ歸シタルヤ否チ審明シ以テ之カ裁判チ爲サハルヘカラス抑モ上告甲第十號證即チ村役場ニ存置シアル所ノ質地與印

帳ニ依レハ論地ハ明治四年八月中被上告者へ向フ五ヶ年間質地ニ差入レタルトノ登記アリ若シモ論地ハ明治三年十二月流地トナリタルモノナレハ其翌年ナル明治四年八月ニ至リ之ヲ質地ニ爲スヘキノ道理ナク又果シテ流地トナリタルモノナレハ其流地以來ハ論地ニ對スル貢租等ハ當然被上告者ニ於テ負擔スヘキ筈ナルニ絶テ之カ證據アルニアラス却テ上告者ハ其甲第三號證ヲ掲ケ以テ明治四年ノ貢租ハ上告者ニ於テ上納セリト申述セシニ被上告者ハ別段之カ反證ヲモ舉示セサルノミナラス被上告乙第一號證書ニ依ルモ「然ル上ハ御水帳名寄帳共貴殿名前ニ書改永々御所持可被成候」云々トアルニ被上告者ノ名前ニ書改メタル水帳名寄帳等ハ更ニ之ヲ提供セサルナリ然レハ此以上ノ事實ヲ審明スルニアラサレハ設ヒ被上告者カ論地券狀申受ケノ手續ヲ盡シタルトテ未タ其地券ノ下附ヲ得タリト云フニアラサルノミナラス其地券受ケノ手續ヲ盡シタリト云フ其手續ニ於テモ上告者カ異議アル所ナレハ是等ノ頓末モ亦審究スルニアラサレハ直チニ被上告乙第一號證書ヲ真正ノモノト斷定スルヲ得ス然ルチ原裁判所ハ是等ノ點ヲ審究セスシテ單ニ「不正ニ成立チタルノ證ナキ限ハ漫ニ之ヲ取消スヲ得ス」云々ト申渡シタルハ未タ審理ヲ盡サ、ル裁判ナリトス

明治六年第五十一號公布但書ニ「壬申二月十五日以前取引ノ質地ニテ年季明不受戻時ハ從前ノ通流地タルヘキ事」トアルハ明治五年壬申二月十五日以前ニ於テ授受セシ質地ノ明治六年七月三十一日マテニ其期限切レトナルヘキモノヲ指シセシモノニ即チ明治六年第十八號公布地所質入書入規則第十四條ニ「當今質入又ハ書入ニ致シ置年季中ノ分ハ

總テ前文規則ニ照準シ當七月限り證文相改可申事」トアリ又明治六年第六十七號公布チ以テ増補シタル右質入書入規則第十五條ニ「是迄質入書入ニ致シ置候分ハ前約ノ年季据置不苦尤證文面等前文規則ニ觸レ候廉ハ總テ相改可申事」トアリ又明治六年司法省第四十六號達ニ「從前質地ヨリ起ル訴訟ハ證文中ニ年季明不受戻候ハ、流地可致旨ノ文言有之分ハ期限ヨリ二ヶ月右文言無之分ハ十ヶ年ノ内訴出候ハ、受戻申付來候處當八月ヨリ以後ハ流地文言ニ不拘年季明不受戻シテ訴訟ヲナス時ハ明治六年第五十一號布告ニ基キ二ヶ月又ハ十ヶ年ノ猶豫ヲ與ヘス直ニ糶賣ノ手續ヲ以テ裁判可致事」トアレハ其期限ノ明治六年七月卅一日以後ニ係ル質地ハ總テ右地所質入書入規則第十四條第十五條ニ基キ證書ノ書改メヲ爲シ又借主返金スルヲ能ハサル場合ニ於テハ流地ノ處分ニ歸セスシテ右司法省ノ達ニ因リ糶賣ノ手續ヲ以テ之カ處分ヲ爲スヘキ筋ナリトス然ルチ原裁判所ハ「明治五年二月十五日已前ニ係ル質地ニシテ年季明ケ之ヲ受戻サス」云々ト申渡シタルハ法律ノ適用ヲ誤リタル裁判ナリトス

判決

右辯明ノ筋合ナルニ付東京控訴裁判所カ本訴ニ對シ申渡シタル裁判ヲ破毀シ之ヲ名古屋控訴裁判所へ移スニ依リ同裁判所ノ裁判ヲ受クヘキモノナリ

但シ上告ニ係ル入費ハ被上告者ノ負擔タルヘシ

第五百九十八號

○流地證取消並ニ質地受戻上告ノ判文（明治十五年四月廿日上告  
十五年十二月廿七日申渡）

千葉縣下總國香取郡香取村土族

香 取 國 雄

東京府神田區錦町一丁目十番地

寄留岐阜縣平民

渡 邊 義 雄

千葉縣下總國香取郡香取村平民

額 賀 大 重

東京府神田區今川小路二丁目十

五番地平民

志 摩 萬 次 郎

上告者

右代言人

被上告者

右代言人

上告代言人カ東京控訴裁判所ノ裁判ヲ不法ナリトシ本院ニ向テ之カ破毀ヲ要ムルノ主點ハ左ノ如シ

一被上告乙第一二號證書ハ論地ヲ官有ナラサシメシメカ爲メニ明治七年七月中被上告者ヨリ騙取セラレタルモノニシテ明治三年庚午十二月中論地ヲ真正ニ流地ト爲スノ目的ヲ以テ之ヲ交付ナシタルモノニアラサルナリ明治三年庚午十二月中流地ニ相成ラサルハ其翌年ナル明治四年ノ質地與印帳即チ上告甲第十六號證ニ據レハ甲第十七八號證ノ如ク論地ハ明治四年辛未二月中ニ於テ向テ五ヶ年間上告者ヨリ被上告者へ賃入レ爲シアルコト上告甲第七號證ノ如ク論地ニ對スル明治四年ノ貢租上納方ニ付原被告間ニ於

テ爭訟ヲ起シ此貢租ハ上告者ヨリ上納ナシタルコト以上二個ノ證憑ニ於テ明白ナリト云フヘキナリ然ルチ東京控訴裁判所ハ此證憑有ニモ拘ラス單ニ被上告乙第一號證書ノ文詞ノミニ拘泥シ裁判セラレタルハ審理ヲ盡サハル不法ノ裁判ナリトノ事  
一明治六年第五十一號公布但書ノミニ注目シ他ニ之ニ關スル法律規則無シトセハ其地所賃入期限ノ長短如何ニ拘ラス明治五年二月十五日以前ニ於テ差入タル質地ハ總テ流地ニ歸スヘキモノ、如シト雖モ此公布ニ樞要ナル關係ヲ有スル明治六年第十八號公布第十四條及ヒ該公布第十五條ヲ增補ナシタル明治六年第六十七號公布并ニ明治六年司法省第四十六號布達アリ之ヲ對照スル時ハ明治五年二月十五日以前ニ係ル質地ト雖モ其期限ノ明治六年七月三十一日以後ニ及フモノハ地所賃入書入規則ニ准據シ證書ノ書替ヘテ爲シ流地トナルヘキモノニアラサルナリ然ルチ東京控訴裁判所ハ此等ノ公布及ヒ布達アルニモ拘ラス論地ハ明治五年二月十五日以前ノ賃入レナレハ受戻ノ權ナシト斷定セラレタルハ裁判法律ニ違フトノ事

一論地ハ元來香取神宮神官ノ祖先ニ於テ開墾セシ地所ニシテ明治七年內務省乙第七十二號明治九年同省乙第八十七號乙第九十九號達ニ依リ被上告乙第四號證ノ如ク自費開墾ノ廉チ以テ上告者ヨリ拂下ケテ出願シ之カ採用ヲ得タルモノナリ然レハ被上告乙第二三號證ノ如ク該地ノ原因取調書又ハ其拂下ケノ請書等ヲ被上告者等ヨリ地方廳へ差出シ之カ地券受ケノ手續ヲ爲シタルモ其拂下ケテ受ケタルモノハ即チ上告者ナレハ論地ノ所有者ナル上告者外ナル者ニ於テ右等ノ書面ヲ差出シ又ハ手續ヲ爲シタルトテ固ヨ

リ上告者ニ對シテハ無効ノ所爲ナリトス然ルニ東京控訴裁判所ハ是等ノ理由アルニモ拘ラス單ニ被上告者ガ地券受ノ手續ヲ爲シタルトノ表面ナル形跡ニノミ拘泥シ論地所有權移轉ノ證據トセラレタルハ不法ノ裁判ナリトノ事

被上告者ハ上告ノ不理ナルヲ論駁シ東京控訴裁判所ノ裁判ヲ辯護シタリ

辯明

上告者ニ於テハ被上告乙第一號證書ハ論地ヲ官有ナラサラシメシカ爲メ明治七年七月中被上告者へ騙取セラレタルナリト云ヒ被上告者ニ於テハ該第一號證書ハ正シク明治三年十二月中流地ノ證書ニ受取リタルナリト云モノナレハ此場合ニ於テハ上告者被上告者カ提出スル證據書ニ憑リ果シテ論地ハ明治三年十二月中流地ニ歸シタルヤ否ヲ審明シ以テ之カ裁判ヲ爲サル可ラス抑モ上告甲第十六號證即チ村役場ニ存置シアル所ノ質地奥印帳ニ依レハ論地ハ明治四年十一月中被上告者へ向フ五ヶ年間質地ニ差入レタルトノ登記アリ若モ論地ハ明治三年十二月中流地トナリタルモノナレハ其翌年ナル明治四年十一月ニ至リ之レヲ質地ニ爲スヘキノ道理ナク又果シテ流地トナリタルモノナレハ其流地以來ハ論地ニ對スル貢租等ハ當然被上告者ニ於テ負擔スヘキ等ナルニ絶テ之レカ證據アルニアラス却テ上告者ハ其甲第七號證ヲ掲ケ明治四年ノ貢租上納方ニ付上告被上告ノ間ニ訴訟ヲ起シ終ニ上告者ヨリ上納スルコトニ至レリト申述セシニ被上告者ハ別段之カ反證ヲモ舉示セサルノミナラス被上告乙第一號證書ニ依ルモ「然ル上ハ御水帳名寄帳共貴殿名前ニ書改メ永々御所持可被成候」云々トアルニ被上告者ノ名前ニ書改タル水帳名寄

帳等ハ更ニ之ヲ提供セサルナリ然ハ此以上ノ事實ヲ審明スルニアラサレハ設ヒ被上告者カ論地券狀申受ケノ手續ヲ盡シタルト未タ其地券ノ下附ヲ得タリト云フニモアラサレノミナラス其地券受ケノ手續ヲ盡シタリト云フ其手續ニ於テモ上告者カ異議アル所ナレハ是等ノ頗末モ亦審究スルコトアラサレハ直チニ被上告乙第一號證書ヲ真正ノモノト斷定スルヲ得ス然ルニ原裁判所ハ是等ノ點ヲ審究セシテ單ニ「不正ニ成立チタルノ證ナキ限ハ漫ニ之ヲ取消スヲ得ス」云々ト申渡シタルハ未タ審理ヲ盡サ、ル裁判ナリトス  
明治六年第五十一號公布但書ニ「壬申二月十五日以前取引ノ質地ニテ年季明不受戻時ハ從前之通流地タルヘキ事」トアルハ明治五年壬申二月十五日以前ニ於テ授受セシ質地ノ明治六年七月三十一日マテニ其期限切レトナルヘキモノヲ指シシモノニシテ即チ明治六年第十八號公布地所質入書入規則第十四條ニ「當今質入又ハ書入ニ致シ置年期中ノ分ハ總テ前文規則ニ照準シ當七月限リ證文相改可申事」トアリ又明治六年第六十七號公布ヲ以テ増補シタル右質入書入規則第十五條ニ「是迄質入書入ニ致シ置候分ハ前約ノ年季据置不苦尤證文面等前文規則ニ觸レ候廉ハ總テ相改可申事」トアリ又明治六年司法省第四十六號達ニ「從前質地ヨリ起ル訴訟ハ證文中ニ年季明不受戻候ハ、流地可致旨ノ文言有之分ハ期限ヨリ二ヶ月右文言無之分ハ十ヶ年ノ内訴出候ハ、受戻申付來候處當八月ヨリ以後ハ流地文言ニ不拘年季明不受戻シテ訴訟ヲナス時ハ明治六年第五十一號布告ニ基キ二ヶ月又ハ十ヶ年ノ猶豫ヲ與ヘス直ニ糶賣ノ手續ヲ以テ裁判可致事」トアレハ其期限ノ明治六年七月三十一日以後ニ係ル質地ハ總テ右地所質入書入規則第十四條第

十五條ニ基キ證書ノ書改メヲ爲シ又借主返金スルヲ能ハサル場合ニ於テハ流地ノ處分ニ歸セスシテ右司法省ノ達ニ因リ糶賣ノ手續ヲ以テ之カ處分ヲ爲スヘキ筋ナリトス然ルチ原裁判所ハ「明治五年二月十五日巳前ニ係ル質地ニシテ年季明ケ之ヲ受戻サス」云々ト申渡シタルハ法律ノ適用ヲ誤リタル裁判ナリトス

判決

右辯明ノ筋合ナルニ付東京控訴裁判所カ本訴ニ對シ申渡シタル裁判ヲ破毀シ之ヲ名古屋控訴裁判所ヘ移スニ依リ同裁判所ノ裁判ヲ受クヘキモノナリ但シ上告ニ係ル入費ハ被上告者ノ負擔タルヘシ

第五百九十九號

○流地證取消并ニ質地受戻上告ノ判文（明治十五年四月廿日上告  
十五年十二月廿七日申渡）

千葉縣下總國香取郡香取村士族

香 取 國 雄

東京府神田區錦町一丁目十番地

寄留岐阜縣平民

渡 邊 義 雄

千葉縣下總國香取郡香取村平民

尾 形 是 眞

東京府神田區今川小路二丁目十

右代言人

被上告者

五番地平民

志 摩 萬 次 郎

右代言人

上告代言人カ東京控訴裁判所ノ裁判ヲ不法ナリトシ本院ニ向テ之カ破毀ヲ要ムルノ主點ハ左ノ如シ

一被上告乙第一號證書ハ論地ヲ官有ナラサシメシメカ爲メニ明治七年七月中被上告者ヨリ騙取セラレタルモノニシテ明治三年庚午十二月中論地ヲ眞正ニ流地ト爲スノ目的ヲ以テ之ヲ交付ナシタルモノニアラサルナリ明治三年庚午十二月中流地ニ相成テサルハ其翌年ナル明治四年ノ質地奥印帳即チ上告甲第十六號證ニ據レハ甲第十七號以下ノ證ノ如ク論地ハ明治四年辛未二月中ニ於テ向フ五ヶ年間上告者ヨリ被上告者ヘ質入シ爲シアルトト上告甲第七號證ノ如ク論地ニ對スル明治四年ノ貢租上納方ニ付原被告間ニ於テ諍訟ヲ起シ此貢租ハ上告者ヨリ上納ナシタルトト以上二個ノ證憑ニ於テ明白ナリト云フヘキナリ然ルチ東京控訴裁判所ハ此證憑アルニモ拘ラス單ニ被上告乙第一號證書ノ文詞ノミニ拘泥シ裁判セラレタルハ審理ヲ盡サ、ル不法ノ裁判ナリトノ事

一明治六年第五十一號公布但書ノミニ注目シ他ニ之ニ關スル法律規則ナシトセハ其地所質入レ期限ノ長短如何ニ拘ラス明治五年二月十五日以前ニ於テ差入レタル質地ハ總テ流地ニ歸スヘキモノ、如シト雖モ此公布ニ樞要ナル關係ヲ有スル明治六年第十八號公布第十四條及ヒ該公布第十五條ヲ增補ナシタル明治六年第百六十七號公布并ニ明治六年司法省第四十六號布達アリ之ヲ對照スル時ハ明治五年二月十五日以前ニ係ル質地ト

雖モ其期限ノ明治六年七月三十一日以后ニ及フモノハ地所質入書入規則ニ准據シ證書  
ノ書替ヘテ爲シ流地トナルヘキモノニアラサルナリ然ルチ東京控訴裁判所ハ此等ノ公  
布及ヒ布達アルニモ拘ハラス論地ハ明治五年二月十五日以前ノ質入レナレハ受戻シノ  
權ナシト斷定セラレタルハ裁判法律ニ違フトノ事

一論地ハ元來香取神宮神官ノ祖先ニ於テ開墾セシ地所ニシテ明治七年內務省乙第七十二  
號明治九年同省乙第八十七號乙第百十九號達ニ依リ被上告乙第四號證ノ如ク自費開墾  
ノ廉チ以テ上告者ヨリ拂下ケテ出願シ之カ採用チ得タルモノナリ然レハ被上告乙第二  
三號證ノ如ク該地ノ原因取調書又ハ其拂下ケテ請書等チ被上告者等ヨリ地方廳ヘ差出  
シ之カ地券受ケノ手續チ爲シタルモ其拂下ケテ受ケタルモノハ即チ上告者ナレハ論地  
ノ所有者ナル上告者外ナル者ニ於テ右等ノ書面チ差出シ又ハ手續チ爲シタルトテ固ヨ  
リ上告者ニ對シテハ無効ノ所爲ナリトス然ルチ東京控訴裁判所ハ是等ノ理由アルニモ  
拘ラス單ニ被上告者カ地券受ケノ手續チ爲シタルトノ表面ナル形跡ニノミ拘泥シ論地  
所有權移轉ノ證據トセラレタルハ不法ノ裁判ナリトノ事

被上告者ハ上告ノ不理ナルヲ論駁シ東京控訴裁判所ノ裁判ヲ辯護シタリ

辯明

上告者ニ於テハ被上告乙第一號證書ハ論地チ官有ナラサラシメンカ爲メ明治七年七月中  
被上告者ヘ騙取セラレタルナリト云ヒ被上告者ニ於テハ該第一號證書ハ正ク明治三年十  
二月中流地ノ證書ニ受取タルナリト云フモノナレハ此場合ニ於テハ上告者被上告者カ提

出スル證據書ニ憑リ果シテ論地ハ明治三年十二月中流地ニ歸マタルヤ否チ審明シ以テ之  
カ裁判チ爲サ、ル可ラス抑モ上告甲第十六號證即チ村役場ニ存置シアル處ノ質地與印帳  
ニ依レハ論地ハ明治四年二月中被上告者ヘ向フ五ヶ年間質地ニ差入レタルトノ登記アリ  
若シモ論地ハ明治三年十二月中流地トナリタルモノナレハ其翌年ナル明治四年二月ニ至リ  
之チ質地ニ爲スヘキノ道理ナク又果シテ流地トナリタルモノナレハ其流地以來ハ論地ニ  
對スル賃租等ハ當然被上告者ニ於テ負擔スヘキ筈ナルニ絶テ之カ證據アルニアラズ却テ  
上告者ハ其中第七號證チ掲ケ明治四年ノ賃租上納方ニ付上告被上告ノ間タニ證訟チ起シ  
終ニ上告者ヨリ上納スルコトニ至レリト申述セシニ被上告者ハ別段之カ反證チモ舉示セサ  
ルノミナラス被上告乙第一號證書ニ依ルモ「然ル上ハ御水帳名寄帳共貴殿名前ニ書改永  
々御所持可被成候」云々トアルニ被上告者ノ名前ニ書改メタル水帳名寄帳等ハ更ニ之チ  
提供ヒサルナリ然レハ此以上ノ事實チ審明スルニアラサレハ設ヒ被上告者カ論地券狀申  
受ケノ手續チ盡シタルトテ未タ其地券ノ下附チ得タリト云フニモアラサルノミナラス其  
地券受ケノ手續チ盡シタリト云フ其手續ニ於テモ上告者カ異議アル所ナルハ是等ノ顛末  
モ亦審究スルニアラサレハ直チニ被上告乙第一號證書チ真正ノモノト斷定スルチ得ス然  
ルチ原裁判所ハ是等ノ點チ審究セズシテ單ニ「不正ニ成立チタルノ證ナキ限ハ漫ニ之チ  
取消スチ得ス」云々ト申渡シタルハ未タ審理チ盡サ、ル裁判ナリトス

明治六年第五十一號公布但書ニ「壬申二月十五日以前取引ノ質地ニテ年季明不受戻時ハ  
從前之通流地タルヘキ事」トアルハ明治五年壬申二月十五日以前ニ於テ授受セシ質地ノ

明治六年七月三十一日マテニ其期限切レトナルヘキモノヲ指シセシモノニシテ即チ明治六年第十八號公布地所質入書入規則第十四條ニ「當今質入又ハ書入ニ致シ置年期中ノ分ハ總テ前文規則ニ照準シ當七月限リ證文相改可申事」トアリ又明治六年第百六十七號公布ヲ以テ増補シタル右質入書入規則第十五條ニ「是迄質入書入ニ致シ置候分ハ前約ノ年季据置不苦尤證文而等前文規則ニ觸レ候廉ハ總テ相改可申事」トアリ又明治六年司法省第四十六號達ニ「從前質地ヨリ起ル訴訟ハ證文中ニ年季明不受戻候ハ、流地可致旨ノ文言有之分ハ期限ヨリ二ヶ月右文言無之分ハ十ヶ月ノ内訴出候ハ、受戻申付來候處當八月ヨリ以後ハ流地文言ニ不拘年季明不受戻シテ訴訟ヲナス時ハ明治六年第五十一號布告ニ基キ二ヶ月又ハ十ヶ月ノ猶豫ヲ與ヘス直ニ糶賣ノ手續ヲ以テ裁判可致事」トアルハ其期限ノ明治六年七月三十一日以後ニ係ル質地ハ總テ右地所質入書入規則第十四條第十五條ニ基キ證書ノ書改ヲ爲シ又借主返金スルヲ能ハサル場合ニ於テハ流地ノ處分ニ歸セスシテ右司法省ノ達ニ因リ糶賣ノ手續ヲ以テ之カ處分ヲ爲スヘキ筋ナリトス然ルチ原裁判所ハ〔明治五年二月十五日巳前ニ係ル質地ニシテ年季明ケ之ヲ受戻サス〕云々ト申渡シタルハ法律ノ適用ヲ誤リタル裁判ナリトス

判決

右辯明ノ筋合ナルニ付東京控訴裁判所カ本訴ニ對シ申渡シタル裁判ヲ破毀シ之ヲ名古屋控訴裁判所ヘ移スニ依リ同裁判所ノ裁判ヲ受クヘキモノナリ但シ上告ニ係ル入費ハ被上告者ノ負擔タルヘシ

第六百號

○貸金催促上告ノ判文(明治十五年五月十日上告 十五年十二月廿七日申渡)

宮城縣陸前國牡鹿郡石卷本町第一國立銀行支店支配人

上告人

内 山 義 道

東京府京橋區加賀町十六番地士族

代言人

鳩 山 和 夫

仙臺裁判所管内石卷治安裁判所

長判事補

石 田 益 志

被上告人

上告ノ理由

第一條

上告者ハ被上告ヘ金圓ヲ貸得ヘキ正當ノ理由アリシヤ否ヤノ點ハ殊更ニ之ヲ推究スルヲ必要セサルモノトス何トナレハ日本現今ノ法律ニシテ金圓ヲ所有スルモノハ理由ナクシテ之ヲ他人ヘ貸與ス可ヘカラスト爲スモノアラサレハナリ故ニ此條ニ於テ推究スヘキハ借受者カ官衙ナルヲ以テ尋常普通ノ法律ヲ適用ス可カラサルヤノ一點アルノミ而シテ被上告者カ控訴廳ニ於テ爲シタル辯論ニ由レハ本訴貸借ハ明治十年第五十一號布達ニ準據シ



正當ノ手續ヲ經タルモノニ非ザルカ故ニ被上告ニ於テ之ヲ返辨スルノ義務ナシト主張ス  
ト雖モ元來明治十年第五十一號布達ハ太政官カ一般人民ニ對シテ布告シタル法律ニ非  
シテ僅ニ官院省使ニ對シテ與ヘタル一個ノ達書ニ過キサルカ故ニ一般人民ニ於テ之ヲ知  
ルノ義務ナキモノナリ然ラハ則チ上告者カ其布達ヲ知ラズシテ相當ナル手續ヲ踏マサル  
トテ其權利ヲ失フノ謂レアラフヤ若シ然ラズトセハ被上告ハ謂レナク本訴請求ノ金額ヲ  
得上告者ハ謂ハレナク該金額ヲ失フノ結果ヲ來スヘシ豈法律上斯ノ如キノ理アル可ケン  
ヤ又一步ヲ讓リ前掲第五十一號布達ハ人民カ之レヲ知ルノ義務アルモノトスト雖モ該達  
ハ爲替出納ニ關スルモノニシテ貸借ニ關スルモノニ非サルカ故ニ本件ニ適用スヘキモノ  
ニ非サルナリ然ラハ則チ上告者ハ被上告ニ金圓ヲ貸渡スニ於テ毫モ障礙ナキハ明カナ  
リ

### 第二條

被上告ハ借得ヘキ正當ノ職權アルヤ否ヤノ點ヲ推究スルニ法律上諸官院省カ金圓ヲ借受  
ルヲ禁スルノ明文アルヲナシ假リニ十年第五十一號布達ヲ以テ貸借ニ關スルモノトナ  
スモ這ハ僅ニ爲替出納等ノ手續ヲ定メタルモノニシテ之ヲ禁シタルニ非ス否之ヲ許シタ  
レハコソ其手續ヲ定メタルモノナリ而シテ該達タルヤ固ヨリ事務取扱ノ内規則ニ過キサレ  
ハ之ヲ實行セサルトテ官衙外ノ人ニ對シテ毫モ影響ヲ及ホスヘキモノニ非ス而シテ習慣ニ  
就テ之ヲ考フルニ上告者ト被上告者トノ間ニ貸借ノ取引アリタルコトハ上告者ガ提供シ  
タル證據書類ヲ以テ之ヲ見ルキヘナリ然ラハ則チ法律ノ明文既ニ之ヲ禁セス又習慣之ヲ認

許スルニ於テハ被上告者カ金圓ヲ借受ルニ於テ其職權ヲ越ヘサリシハ明カナルモノトス  
又假リニ被上告ハ相當ノ手續ヲ經スシテ金圓ヲ借受タルハ其職權ヲ越ヘタルモノトナ  
ト雖モ是レ僅ニ義務者一方ノ過失ナルカ故ニ以テ權利者ノ權利上ニ影響ヲ及ホスヘキモ  
ノニ非ルナリ

### 第三條

控訴裁判所ハ上告者ハ石卷區裁判所會計課印ヲ信用シ菊池武則ニ貸渡シタルモノト認定  
セラレタリト雖モ是レ證據ニ反シタル認定ニシテ甚ダ不都合ナルモノト云ハサルヲ得ス  
何トナレハ第一號證ニ〔當廳ニ納金云々〕ノ語アリ其結尾ニ至テ石卷區裁判所會計課ト記  
シ會計課ノ印ヲ捺シ又第二號證ニ〔右ハ當區裁判所入用ト云々〕ノ語アリ且ツ石卷區裁  
判所會計課長菊池武則トアリテ菊池カ一己ノ資格ヲ以テ借受タルモノニ非スシテ被上告  
カ負債主ナルヲ信シタレハコソ金圓ヲ貸渡シタルモノナレハナリ然ルチ控訴廳ハ菊池  
カ一己ノ資格ヲ以テ借受タリト認定セラレタルハ證據ニ違反シタルモノト云ハサルヲ得  
ス

### 第四條

控訴廳ハ〔體裁上ヨリ視ルモ條理ニ照スモ云々〕ト裁判セラレタリト雖モ所謂體裁トハ官  
衙ノ章程或ハ事務取扱ノ規則等ヲ指スモノトセハ既ニ第一條第二條ニ於被上告ハ金圓ヲ  
借受ルニ於テ其職權ヲ越サルノ理由ヲ陳述シタレハ再ヒ茲ニ之ヲ贅スルヲ要セス而シテ控  
訴廳カ所謂條理トハ如何ナル物ヲ指定スルヤハ之ヲ推定スルニ苦ムト雖モ通常普通ノ條

理ナルモノニヨレハ負債主カ負債ヲ返辨スルハ最モ條理ニ適シタルモノトナスカ如シ

第五條

前條々ノ理由ナルニ付原裁判ハ破毀セラレシコトヲ乞フト

辯明

本訴ハ左ノ條件ヲ審究スルヲ緊要トス

第一 各裁判所詰會計官吏ノ職務權限如何ノ事

第二 石卷區裁判所詰會計官吏故菊池武則カ上告者ヨリ金圓ヲ借入ル、ニ某區裁判所會計課長ノ名ヲ冒シ又會計課ノ印章ヲ押捺セシ證書ヲ授與シタル上ハ武則カ職務權限ノ如何ニ關セス又其所爲ノ正否ニ關セス貸主ニ對シテハ武則ヲ使用セシ官廳ヨリ辨償スヘキ義務アリヤ否ノ事

右第一項凡ソ各裁判所詰會計官吏ノ職務ハ其廳ノ定額金ヲ以テ廳費ヲ支出スルト裁判上徵收スル處ノ金錢ヲ處辨スルノ外他ノ借入レ金ヲ要スルノ因由アラス依テ其職權ナキ事ハ論ヲ俟タサルモノトス

第二項各裁判所詰會計官吏ノ職務權限ニ於ケル前項ニ辯明セシカ如クナル上ハ石卷區裁判所詰會計官吏故菊池武則カ會計課長ノ名ヲ冒シ會計課ノ印章ヲ押用セシ證書ヲ以テ官用ト詐稱シテ上告者ヨリ金圓ヲ借入タルモ官廳ハ之レヲ辨償スヘキ義務アラス如何トナレハ權外ノ所爲ハ一己ノ所爲タルヲ以テナリ然ラハ則チ故菊池武則ハ其身分會計官吏ニシテ其廳ノ印章ヲ用ヒ上告人ヲ欺カントストモ上告人ニ於テ武則カ職務權限如何ニ注意セハ決シテ

詐術ニ陷シ入レラルヘキ理由アラス上告人茲ニ注意セサリシハ固ヨリ其落度タレハ今更官廳ヨリ辨償ヲ得ント求ムル事能ハサルモノトス

本按ノ要旨斯ノ如クナル上ハ上告人カ縷々陳述スルノ每條ニ對シテハ一々辯明ヲ爲サス

判決

右ノ理由ナルヲ以テ宮城控訴裁判所カ被告廳ニ義務ナシト判決セシハ至當コソテ破毀スヘカラサルモノトス

第六百一號

○惡水除水盛定杭高低爭論上告ノ判文 (明治十五年五月十八日上告 十五年十二月廿七日申渡)

埼玉縣武藏國北葛飾郡松伏村總

代兼同村平民

石川 宇 右衛門

同縣同國同郡上赤岩村總代兼同

村平民

飯 島 久 造

同縣同國同郡下赤岩村岩尾岩島

岩松三組總代兼同村平民

山 崎 文 次 郎

同縣同國同郡廣島村上組十一軒

三〇五

村總代兼廣島村平民

平井治 右衛門

同

同縣同國同郡田島村總代兼同村平民

種村 貞通

同

同縣同國同郡大川戸村總代兼同村平民

增田 吉三郎

同

東京府京橋區三十間堀三丁目五番地平民

藤井 伸三

右代言人

埼玉縣武藏國北葛飾郡川藤村八子新田鍋小路村上内川村下内川

村南廣島村ノ内下組下赤岩村ノ

内岩平組以上七ヶ村總代兼八子

新田一番地平民

中村 武敬

被上告人

同總代兼同縣同國同郡上内川村

三十八番地平民

岡田 督造

同

同總代兼同縣同國同郡川藤村六

十五番地平民

鈴木 九右衛門

東京府神田區今川小路二丁目十

五番地平民

志摩 萬次郎

右代言人

惡水除水盛定杭高低爭論一件東京控訴裁判所ノ裁判ヲ不當ナリトスル上告ノ主意ヲ要スレハ左ノ二項ナリトス

第一 舉證ノ責任ヲ誤認サレタル事

第二 證據ヲ外ニシテ臆斷サレタル事

第一條

抑被上告者ハ本件ノ起訴者ニシテ其存在セル古杭ハ朽腐シテ標準トナスニ足ラサルトノ事ヲ主張スル者ナリ凡ソ證據ハ或ル事項ニ反對ノコトヲ主張スル者之ヲ舉クヘキハ一般ノ法理アリ故ニ被上告者ニ於テ斯ク現存セル古杭ノ朽腐シテ標準トナスニ足ラサルトノ事ヲ主張セシニハ宜シク先其朽腐シテ標準トナシ能ハサルノ實證ヲ舉クヘキナリ否ラサレハ上告者ニ舉證ノ責ハ來タラサルナリ然ルニ其端緒ヲタニ舉ケサルニ原裁判所ハ〔古杭

中第七十六番親杭ノ外ハ目下杭頭朽腐シ標準ト爲シ難キ趣被告主張スルコ原告(上告者)ニ於テ其朽腐セサル反證ヲ舉ケサル隄ハ第四番第六番第六十九番ノ杭ハ朽腐ニ屬シ準據ナリ難キ者ト見做サ、ルヲ得ス)ト法理ノ庇蔭アリテ未ダ舉證ノ責ノ來タラサル上告者ニ舉證ノ責ヲ負ハサレタリ是其舉證ノ責任ヲ誤認サレタル不當ノ裁判ナリトス  
尙爰ニ一ノ論スヘキアリ夫ノ現存セル論杭四箇ハ皆立換ノ標準タルヲ得ヘキハ勿論ナリト雖モ暫ク被上告者ニ就テ論センニ被上告者カ原裁判所ヘ進呈シタル明治十四年十二月一日付ナル爭論杭并原被案内線ノ測量圖ト云フチ一見スルニ其六十九番杭ハ七十六番杭ト同シク(頭釘アリ)ト登記シアリ又前同年四月十三日被上告者カ原裁判所ニ於ケル口供ニ(現在シタル杭ノ内七十六番杭ハ其杭頭ニ釘ヲ十字形ニ打チ附ケ有之全古形通りノ杭ト認メ候得共其他ノ杭ハ全ク杭頭朽損シ釘モ無之舊形ヲ失シタルモノニ有之候唯六十九番杭ノ頭ニハ釘モ打附有之候得共右ハ七十六番杭ノ高サト格別低キ故堤ノ高低ヲ定ムル標杭トハ難認候)トアリ由是觀之六十九番杭ハ朽腐セサルナリ但其高度被上告者カ主張スル所ニ合ハサルヨリ標準トナシ難キヲ主張シタルヤ明白ナリ然ハ則チ被上告者ハ七十

六番杭ノ外皆朽腐シテ標準ト爲シ難シト主張シタル者ニアラサルナリ然ルニ前掲ノ如ク裁判サレタリ不當モ亦實ニ太シトス况ヤ其低シトスルモノ夫ノ勾配ノ爲メ低クカルヘキ理由アリテ低キモノナルニ於テナヤ  
第二條  
本訴論杭ノ高度ハ第一番ヨリ七十六番ニ至ル迄均一ナルコアラソ第一番ヨリ五十番五

十番ヨリ六十番六十番ヨリ七十六番ト三段ノ勾配アルコトハ上告第一號證ニ載テ詳カナリ又其第二號證ニ(先規仕來之通り古杭ニ習御建直被仰付候尤朽腐古形無之分ハ前後杭頭ヨリ水盛被仰付云々難有仕合ニ奉存候)トアリテ其建換古杭ニ習ヒタルモノナレハ夫ノ勾配ヲ襲用シタルヤ言テ俟タサルナリ又其第三號四號モ亦之ニ同シ特ニ其第五號證ニハ(八間堀土手杭之儀田地ニ不抱古杭頭ニ習ヒ云々立替御願可申候)トアリテ田地地形如何ニ變換高低スルモノ之ニ拘ハラズ猶古杭ニ習フヘシトノヲ約シタルナリ是亦夫ノ勾配ヲ襲用セルモノト云フヘキナリ又被上告者ノ終審ノ答書第一條ニ(抑本訴争フ所ノ惡水除定杭七十六本ヲ打立タル當時ノ契約ハ先ツ親杭四本ノ杭頭ヲ定メ次ニ七十二本ノ杭頭ニ及ホスモノトス而シテ其此ノ如クスル所以ノモノハ其第一番親杭ヨリ五十番親杭ノ間並六十番親杭ヨリ七十六番親杭ノ間ハ上流ヨリ下流ニ向テ各杭順次均一ノ等差アリテ而シテ其五十番親杭ヨリ六十番親杭ノ間ハ上流下流ニ拘ハラズ皆水平ニシテ等差ナキヲ以テ實地適當ノ水盛トス故ニ是ヲ實施センニハ先基礎タルノ親杭ヲ定メ後チ各杭昂低ノ度ヲ得ルヲ便法トスルニ在リ若シ之レニ反シ基礎タル親杭ノ規標タルニモ拘ハラズ又等差(一)ヨリ五十番ノ間并ニ六十番)ト水平(五十番ヨリ六十)トノ箇所チ分タズ猥リニ之レヲ引付ントスルキハ獨リ甲乙一號證ニ背戾スルノミナラス惡水除ハ反テ惡水ヲ灌入スル所ト變シ實地大ナル災害ヲ現出セン)トアリ本訴論杭ノ高度ニ三段ノ勾配アルコトハ斯ク諸證ニ明載スル所ニシテ被上告者モ亦之ヲ自認ス然ルニ原裁判所ハ此等ノ證據及自認ヲ除外シテ(第一番杭ヲ松高橋際ノ石杭ヨリ三寸五分高ニ取建テ而シテ其一番ノ杭頭ヨリ第

七十六番ノ杭頭へ直線ヲ取リ之ニ準據シ各杭ヲ取建テ杭頭ヲ定ムヘキ儀ト可相心得ト  
判決サレタリ是其無據ノ臆斷トシ以テ不當ノ裁判トナス所ナリ

第三條

原裁判所ノ意或ハ論所ノ杭數七十六本ナルニ僅ニ四本ノミノ存在ニテハ之ヲ以テ他ノ七  
十二本ヲ建足シ能ハストシテ斯ク一直線ノ果斷ヲ下サレタルモノナランカ若シ然ランニ  
ハ疎漏ナル見解ト云ハサルヘカラス抑論杭ハ先ツ第一番五十番六十番七十六番ノ四本ヲ  
建テ之ヲ親杭トシ其間ハ各親杭ニ準シ建ツハキナリ而シテ現存シテ而カモ被上告者カ「杭  
頭ニ釘ヲ十字形ニ打附ケ有之全ク古形通り」ト明言セル七十六番杭ハ親杭ニシテ又夫ノ現  
存シテ被上告者カ「頭釘アリ」ト自認シ朽腐セサルノ六十九番杭ハ七十六番ナル現存ノ親  
杭ト六十番ナル親杭トノ勾配ニ依テ建テラレタルノ間杭ナリ然ハ則チ七十六番ナル現在  
親杭ト夫ノ六十九番ナル現存間杭トノ勾配ヲ以テ六十番ナル親杭ノ高度ハ計定シ得ラル  
、ナリ六十番ナル親杭ノ高度已ニ計定セラレタラシニハ此六十番ト五十番トハ上告第一  
號證ニ依レハ同高度ナルヲ以テ五十番ナル親杭ノ高度ヲモ亦計定シ得ラル、ナリ斯ノ如  
クシテ親杭二本(七十六番ナル現存親杭トモ二本)ノ高度ハ已ニ計定シ得ラル、ナリ而シテ殘ル所ハ唯第一  
番ナル親杭一本ノミ是亦夫ノ第四番六番ナル現在間杭ノ勾配ヲ以テ計出シ得ラル、ナリ  
斯ノ如クナレハ現存セル杭ハ唯僅ニ四本ノミナルモ之ヲ以テ他ノ七十二本ノ高度ヲ計定  
スルニ容易ナルト前述ノ如ク然リ然ルニ原裁判所ハ古例舊慣又ハ原被ノ申供如何ニ關ス  
ルトナク漫ニ上告第五號證中ナル松高道ノ石杭ニ係ルモノヲ假用シテ第一番杭ノ高度ト

シ此ヨリ七十六番杭迄一直線ニスヘント臆斷サレタリ實ニ疎漏ニシテ不當ノ極ト云フヘ  
キナリ

明治十五年十月十一日上告退申書

上告狀第五條中ニ「殘ル所ハ唯第一番ナル親杭一本ノミ是亦夫ノ第四番六番ナル現在間  
杭ノ勾配ヲ以テ計出シ得ラル、ナリ」ト記セシハ舊杭ニ據テ新杭ノ高サヲ計出シ易キヲ  
寫シタルマテニシテ上告者ハ此第一番杭ニ限リ其高サヲ第四番及第六番ナル現在杭ヨリ  
計出スヘキヲ主張スルモノニアラサルナリ又其末段ニ「漫ニ上告第五號證中ナル松高橋  
際ノ石杭ニ係ルモノヲ假用シテ第一番杭ノ高度トシ此ヨリ七十六番杭迄一直線ニスヘシ  
ト臆斷サレタリ實ニ疎漏ニシテ不當ト云フヘキナリ」ト記シタルハ第一番杭ヨリ七十六  
番杭ニ至ル迄チ一直線ニナスヘシト裁判セラレタル其一直線ト云フチ不當トスルノ意ニ  
シテ第一番杭ノ高サヲ上告第五號證ニ依リ計出サレシチ不當トスルコハアラサルナリ故  
ニ上告者ハ第一番杭ヲ松高橋際ノ石杭ヨリ計出スルコトハ原裁判ニ同意ナリトス但其不當  
トスルモノハ第七十六番及六十九番ナル現在杭ニシテ而カモ舊形ヲ損セサル兩杭ヨリ六  
十番及其六十番ト同高サナル五十番ナル兩親杭ノ高サヲ計出スヘキナルニ之ヲ爲サスシ  
テ唯一直線トナサレタル是ナリ

明治十五年十二月十四日退申書

第一條

被上告者ハ上告者カ上告第一號證ナル實曆度ノ親杭間杭ト云フチ廢シ唯現存前後ノ杭頭

ヨリ杭頭ニ至ルチ一直線ニセシテ一致シタルモノ、如クニ申立レ上告者ハ上告第一號證ヲ外ニシテ斯ルコト一致セサルナリ個ハ原裁判所ニ於ケル書類ヲ一見セハ輒チ知テハナリ然リ而シテ上告者ハ起訴者ナル被上告者ノ要求即チ第一番杭チ松高橋ノ石杭ヨリ三寸五分高ニシテ此一番杭ヨリ七十六番杭迄チ一直線ニセント云フチ上告第一號證以下ニ〔古杭ニ習〕トアルヲ以テ荷モ古杭現存セハ之ニ倣ハサルヲ得スト拒ミタルナリ故ニ上告者ハ上告第一號證ナル親杭間杭ト云フチ捨テ唯前後ノ杭頭ニ倣ハンコト一致シタルモノニアラストス

第二條

被上告者ハ上告者ノ指示線ノ如クニシテハ堤ノ形チ中窪ニシテ實際不都合ナリト申立レ且論所ハ上告第二條ニ開陳セシ如ク上流ニハ七分三分ノ堰トテ出水ノ際トテモ七分ヲ堰止メ其上三分ヲ流カスノ堰アリ其流末ハ舊利根川水ニ接シ此ニモ尙一ノ留メ堰アリ此堰ハ出水アルニ方レハ利根川水論所ナル惡水路中へ逆進スルヲ以テ之ヲ防ク爲メ用ニ設ケアルナリ故ニ出水アレハ則チ之ヲ堰止ム實際斯ノ如クナルヲ以テ出水ノ際上流ヨリハ三分ノ餘水流レ込テ休セス而シテ下流ハ逆進ノ水ヲ防ク爲メ留メ堰ヲ留メアリテ其上流ヨリ流レ込ム水ノ漏ル、所ナシ故ニ論所ニ係ル堤チ上流ヨリ一直線ニ築キ夫ノ三分ノ餘水皆其流末ニ落合來ランニハ忽ニ逆水留メノ堰チ決シ最大水害ヲ致スナリ是レ其中窪ナル所以ナリトス又其堤ノ中窪ナルハ其中窪ナル所ヨリ越水セシムルモノニシテ此越水タルヤ堤防ノ流決スルカ如クナラス僅カニ溢レ流ル、モノニシテ其末終ニ舊ニ合半領境ナ

ル七十間堀ニ入り決シテ多ク害チナサ、ルナリ是其水害チ平分スルモノニシテ夫ノ留メ堰破レテ利根川逆水ノ耕地ニ汎濫スルト其害孰レカ大ナル多辯チ竣タスシテ知テハナリ是レ論所ニ係ル堤ノ中窪ナルヘキ理由アリテ中窪ナルニテ決シテ實際不都合ナルモノニアラストス

第三條

被上告者ハ寶曆度杭ノ高低ハ原裁判ノ指示線ト小異ナレ上告者ノ指示線トハ大異ナリト申立レ上告第一號證即寶曆度ノ地盤ハ上告第五號證ニ於ケルカ如ク寛政度ニ於テ早已ニ若干ノ高低チ生ス故ニ其後今日迄ニハ尙ホ幾許カ高低シタル知ルヘキナリ然リ而テ同證ニ四本ノ親杭田地形ヨリ二尺五寸五分又ハ三尺四寸五分トアルモ今日ニテハ地盤已ニ其舊ニアラストシテ如何ニ高低シタルカ知ルニ由ナキナリ然ハ則被上告者カ今日ニ在テ其地盤ノ變換高低チ不問ニ措キ單ニ寶曆度杭ノ寸尺ノミチ以テ其高低差違チ説クハ被上告者ノ臆測ニ出タル無據ノ妄言ト云ハサルヲ得ス故ニ上告者カ指示スル所ノ高低線コソ寶曆度ノ遺形ニシテ此他ニ寶曆度杭ノ高低チ知ルヘキモノナク又其高低ニ差違ナキモノナリノ事

被上告者ハ原裁判ノ不當ナラサル旨チ述テ之ヲ辯護セリ

辯明

右兩造ノ陳供及ヒ其他ノ書類ニ據テ審按スルニ本訴定杭ノ起因タルヤ甲乙第一號證即チ寶曆度濟口證ニ〔此度濟方ノ儀古來田地地形ハ三尺ト申儀ハ雙方申口ニ付右三尺相用云々

田地形を高二尺五寸五分ノ假杭相建云々中通リ者前後方土地位低ク有之候ニ付云々田地  
 形を三尺四寸五分ノ假杭相立云々トアリ由是觀之ハ登時定杭ハ地盤ノ高低ニ隨テ長短  
 アリシモ高サハ平均三尺ニシテ且各杭頭ハ水面ヨリ一體ニ平等ナリシヲ知リ得ヘキナ  
 リ而シテ其平等ヲ保持セシカ爲メ古杭頭ヲ規準トナシ數回建更ヘ來リタルコトハ乙第二號  
 乃至第五號證ノ如ク瞭然ニシテ且其杭頭タル一體ノ地勢ニ隨ヒ上流ヨリ下流ニ向ヒ次第  
 ニ低下ナルハ勿論ナルヘシト雖モ今上告者カ申立ル如ク堤ノ兩端ハ高ク其中央ハ凹形ナ  
 リシトコトハ竟ニ視ルヘキ證緒ヲモナケレハ現今ノ杭頭モ亦水面ヨリ一體ニ平等ナルモ  
 ノト假サ、ルヲ得ス然ルニ上告者カ主張スル六十九番杭タルヤ下流ノ親杭タル七十六番  
 杭ヨリ著シク低下ニシテ右甲乙數證杭頭平等ノ旨趣ニ背クモノナレハ個ハ今標準ト假シ  
 難シ左スレハ本訴ノ定杭タル下流ノ七十六番杭ヲ除クノ外ハ悉ク當時ノ適度ヲ失シ高低  
 ナ定ムルノ標準ト假スヘキモノニ非ス又乙第五號證ノ旨趣ニ據レハ寶曆度濟口證ノ如ク  
 田地形ヨリ定杭ノ高度ヲ測定シ得ヘキモノニ非トス之ニ依テ兩造カ原裁判所ニ於テ假シ  
 タル口供ニ就テ考按スレハ上告者ハ現在ノ古杭ヲ標準トシテ各杭頭ヲ定ムヘシト云ヒ被  
 上告者ハ乙第五號證即チ寬政度爲取替證ニ依リ一番親杭ヲ松高橋際ノ石杭ヨリ三寸五分  
 高ニ取建テ其一番杭頭ヨリ第七十六番杭頭ヘ見通シ之ニ準據シテ各杭頭ヲ定ムヘシト云  
 ヒ蓋シ兩造ノ論點ハ各々其據ル所ヲ異ニスレト結局現在ノ古杭又ハ松高橋ノ石杭ヲ標準  
 トスルニ過スシテ之ヲ甲乙第一號證及ヒ乙第二號乃至第五號證ニ參照スルニ被上告者ノ  
 申立ハ宛モ甲乙數證ノ旨趣ニ適應スルモノト假サ、ルヲ得ス何ントナレハ該數證ニ於ル

モ各杭頭ハ水面ヨリ平等ノ高サニシテ且古杭ノ朽腐シテ標準ト假シ難キモノハ前後ノ古  
 杭ニ準據シテ杭頭ヲ定ムヘシトノ旨趣ニ外ナラサレハナリ旁以原裁判所カ「第一番親杭  
 ナ松高橋際ノ石杭ヨリ三寸五分高ニ取建テ而シテ其一番ノ杭頭ヨリ第七十六番ノ杭頭ヘ  
 直線ヲ取り之ニ準據シテ各杭ヲ取建テ杭頭ヲ定ムヘシ」ト言渡シタルハ相當ノ裁判ナリ  
 トス  
 但上告第一條舉證ノ責任ヲ誤認サレタリトコトハ本文辯明ノ如ク六十九番杭ノ標準ト  
 ナシ難キ以上ハ原裁判ヲ破毀スヘキ限ニ非ス且上告追申書ニテ四番六番杭ハ自ラ消滅  
 シタレハ茲ニ辯明ヲ須ヒス

判決

右辯明ノ如クナルヲ以テ東京控訴裁判所ノ裁判ハ破毀スヘキ理由ナシトス  
 但上告入費ハ上告者ヨリ辨償スヘシ

第六百二號

○講金不渡上告ノ判文(明治十五年五月廿二日上告  
 全十五年十二月廿七日申渡)

大坂府河内國若江郡森河内村平

民

上告人

今村彌榮次

同府東區大手通一丁目十三番地

平民

右代人

野 本 重 兵 衛

同府河内國高安郡樂音寺村平民

被上告人

貴 島 源 吾

東京府京橋區元數寄屋町三丁目

一番地寄留愛媛縣士族

右代言人

河 村 認

上告要領

第一 原裁判所判文中ニ「原告於テ該講八會目ニ落札シ被告第二號證ト講金トテ授受シ而シ九會目ヨリ之ヲ改正セシモノト見解ヲ下サ、ルヲ得ス何トナレハ原告番外第二號證ニ據ルモ八會目落札金君〜周旋人津田彌平持參云々九會目ヨリ落札渡金ノ證文御持參云々ト之レアリ」トアレモ上告番外第二號證ハ本訴ノ起訴ヲ見合セシトテ藤井一三五ヨリ求メタル依頼狀ニ枝葉ニ屬スルモノナリ然ルニ斯ノ如ク主眼ノ證據トシテ論セラレタルハ不當ナリ

第二 同判文中ニ「原告於テ落札シ九會目ヨリ被告第一號證第五項ニ據リ改定セシ上ハ原告現ノ加入員同一ニシテ之カ實掛ケヲ爲スハ當然ナルノミナラス原告第二號證ハ被告第一號證ノ仕法帳ト異ナリ殊ニ無印ニシテ被告於テ看認サル限リハ證左トナスニ足ラス」トアレモ被告上告第一號證ハ紙色新ナルノミナラス普通講金ハ加入員ニ對シ損害ヲ掛ケサルヲ誓フヘキニ之ニ反シ其第五項ニ豫メ講難不意ニ振涌候〜ハ云々ト規定ス

ルカ如キハ實際アル可カラサルヲナレハ旁真正ノモノニアラサルヲ明ナリ又被告上告第三號證ニ落札トアレハ豫定ノ金高ヨリ幾分カ入札上減少スヘキニ然ラサルハ該證モ亦信シ難キモノナリ又該被告上告第一號證ニ調印アルモ彼レ自カラ調印スルヲ得ルモノナレハ瞬時數十冊ヲ出來スルヲ得ヘシ上告第二號證ハ印野七十郎ヨリ借受ケタル仕法帳ト同様十年前ノ紙色ヲ帶ヒ同筆同文ノモノニシテ遠シ十年前ヨリ之ヲ作爲ス可キ理ナケレハ最モ確實ノモノナリ

假ニ被告上告第一號證ヲ真正ノモノトスルモ凡ソ講金ハ講元ニ利益ヲ得ルヲ目的トスルモノナルニ被告上告者カ申立ノ如ク第九會目ヨリ仕法ヲ更改セシモノトスルキハ總計金二萬二千八百六十一圓餘ノ損失ヲ生スルニ至ル是レ實際アル可カラサルヲナリ況ヤ其更改ハ講難金千二百圓ヲ償フ爲メナリト被告上告者ノ明言アルニ於テオヤ尙其更改シタルニ非サルコト上告番外第九號證ニ半額ニテ二百五十圓トアルニ於テモ判然タリ

又上告者モ其更改ナリシ員中ニ加ハリタルモノトセンカ凡ソ講金ノ入札ハ己レノ掛金ヲ除キ他ノ集金ニ向テ入札ヲ爲スモノナレハ落札主ハ己レノ掛ケ金ヲ爲スノ道理ナシ又其改定以前ヨリ實掛金ヲ還込ム可キ謂レナシ然レハ上告者カ第八會目ニ實掛金ヲ爲シタルハ是レ其更改ノ員中ニ加ハラサルノ證ナリ又上告番外第七號證中君過日右講如何成行候哉御尋被下云々トアルニ依ルモ其更改ノ員ニ加ハラサルヲ明ナリ

第三 同判文中ニ「被告第二號證ニ金五百圓也正ニ受取早々本紙證書相改此假書ト引替



可申候依如件ト明記シ當時講金チ原告カ受領セシヲ論テ俟ス」トアレモ被上告第二號證ト上告番外第一號證ト無印ニテ交換爲シ置キタルモ津田喜十郎等ニ於テ本證書チ改メサルニヨリ共ニ取消シタルモノナリ

其取消シタルコトハ上告番外第七號證追啓ニ雙方紛ラシキ證書取消シ申テ宜敷哉ニ存入候トアルニ於テ明カナルノミナラス第八會目ニ上告者カ實掛金チ爲シ以後依然トシテ實掛金チ爲シタルニ於テモ亦判然タリ

若シ第八會目ニ上告者カ落札セシモノナリセハ第九會目ヨリ空掛金チ爲サ、ルヘカテサルニ之チ實掛金ニ爲シ置クノ謂レナク又講法ノ如ク質物ノ證書チ取り置ク可キニ數年無印ノ假證書ノ儘差置クヘキノ謂レナシ

第四 判文中ニ「右辯明ノ理由ナルヲ以テ原告ノ訴旨相立ヌ到底始審裁判ノ如ク相心得可モノ也」トアルハ始審裁判書ニ「又滿會ニ相成候ハ、掛込金チ相渡云々トアルハ改正后ノ滿會ニ至レハ其掛金渡ストノ趣意ナリト心得ヘシ」トアルヲ指シタルモノナルヤ判然タリ然ルニ始終審廳共被上告者ノ答辯チ採用セラレタルモノナレハ滿講渡金貳百八十圓チ渡スヘシト判決セラレヘキノ其掛金チ渡スノ趣意ナリ云々ト判定セラレタルハ不當ナリ且其掛金云々ト云フハ上告者カ初會ヨリ第十一會迄掛込タル金員チ渡ストノ趣意ナルカ又八九會目改定後ノ掛金ナルカ其判意曖昧トシテ適從シ難シ又被上告第一號第三號證ニ依レハ明治十三年五月ハ滿會ナルニ判決ニ其滿會ノ年月チ説明セラレサルハ不當ナリ

第五 同判文但書ニ「原告提供スル每證ニ於テハ別ニ判語チ與ヘス」トアリ凡ソ民事ノ訴訟ハ各證據ニ依リ判定ヲ與ヘラルヘキノナルニ無謂之チ排斥セラレタルハ不法ナリ  
被上告者ハ上告ノ不當ナルヲ縷述シ併セテ原裁判チ辯護セリ

判決

第一條

上告番外第二號證ハ藤井一三五ヨリ起訴ノ見合チ求メタル依頼狀ニシテ上告者ニ於テ之チ主タル證據トスルノ意ニアラサリシモ凡ソ證據ノ取捨ハ裁判官ノ鑒識ニアルモノニシテ該證中取ルヘキノ事實ノ揭ケ以テ判定ノ材料ト爲シタルハ不當ニアラス

第二條

上告第二號證即講仕法帳ハ無印ノモノニテ被上告者ノ認メタルモノニアラサレハ唯印野七十郎所持ノモノト同一ニシテ紙面古色アリト云フノミチ以テハ未タ被上告者ニ對シ證據ト爲スチ得ス

上告者ニ於テ被上告第一號證ハ紙色ノ新ナルト其第五項ノ如キ事際アルヘカラサル豫約アルトチ以テ真正ノモノニアラスト論シ又被上告第三號證ハ落札ノ金高ニ減少ナキヲ以テ信チ措キ難キモノナリト云フモ其第一號證紙色新ナルト云フノミチ以テ輒シ排斥シ難キハ勿論其第五項ノ如キハ講員ノ協議次第ニ成ルモノナレハ必シモ實際アルヘカラサル事柄ナリト云フチ得ヘカラス而テ其第五項ノ豫約ハ加入入即講員數名ノ證印アル被上告第三號證ノ如

ク既ニ講法ヲ改定セシ事跡ニ照應スルモノナリ又其第三號證落札金ニ減少ナキハ上告番外第二號證ノ如ク第九會目ハ二百圓次會ヨリ十圓増シトノ規定アルニ由ルモノニシテ落札トアルハ上告者カ第八會目ニ取當リ人トナリシハ入札セシニアラサルモ自他共ニ落札人ト稱呼スルカ如ク其取當リ人ノ稱呼ト看做スチ得然ラハ右兩號證ハ上告第二號證ト同視スヘキモノニアラス

上告者ニ於テ若シ第九會目ヨリ講法ヲ改メタルモノトスルキハ講元ニ二萬二千餘圓ノ巨額ノ損失ヲ生スト云フモ被上告者ノ陳述スル改定法ニ依レハ斯ノ如キ損失ヲ生スルコトナシ是レ畢竟上告者カ縱ニ爲シタル根據スル所ナキ不當ノ計算ナリ

上告番外第九號證ニ半額ニテ二百五十圓トアルハ講員數名ノ證印アル被上告第二號證ニ抵觸セリ而テ其番外第九號證ハ印野七十郎カ上告者ノ求メテ受ケテ差出シタル一己ノ書面ニシテ他ニ之ヲ認ムヘキモノナキニ依リ信スルニ足ラサルモノナリ上告者カ第八會目ニ實掛金ヲ爲シタルハ被上告第二號證ノ如ク當會取當リ金五百圓ヲ受取リタルニ因ルモノナリ何ントナレハ自己ノ掛金ヲ除ク時ハ其金額丈ケ取當リ金ノ内減少スヘキニ上告者ハ其全部五百圓ヲ受取リタレハナリ

上告番外第七號證中ニ君過日右講如何成行候哉御尋被下云々ノ字句アルヲ以テ一概ニ其員ニ加ハラサルモノト云フチ得ストナレハ上告者ハ承諾上既ニ其員ニ加リタル上果シテ其方法ノ如ク滞リナク行ハル、ヤ否ヤ其成行チ尋問セシ文意ニ解釋スルチ得可ケレハナリ

第三條

被上告第二號證ハ上告者ヨリ被上告者貴嶋源吾ニ差入レタル講金五百圓ノ領收證ニシテ上告番外第一號證ハ津田喜十郎吉田伊一ヨリ證人二名ノ連署ヲ以テ上告者ニ差入レタル金五百圓ノ借用證書ナレハ假令當時互ニ交換セシモノトスルモ其性質ノ異ナルモノナレハ其後喜十郎等ニ於テ上告番外第一號證ヲ本證書ニ改メサリシト云フチ以テ被上告第一號證ヲ取消シタルモノト認ムルチ得ス

上告番外第七號證退啓ニ雙方紛ハシキ證書取消シ申チ宜敷哉ニ存入候トノ字句アルモ抑モ其講法ノ改定タル上告者カ取當リノ金圓及ヒ本講積立金トモ津田喜十郎ノ爲メニ消耗セラレタルニ起因スルモノニシテ既ニ改定ナリシ上ハ其以前ノ證書類ノ取消チ求メタレハトテ之ヲ以テ一旦上告者カ落札セシ事蹟ノ消滅スヘキモノニアラス

既ニ其講法ヲ改定シ上告者ハ更ニ實掛ヲ爲スヘキ者トナリタル上ハ空掛金ヲ爲サスシテ實掛金ヲ爲シタルハ固ヨリ當然ノコトナリ落札人ヨリ質物ノ證書ノ取立ツルハ其返金ノ抵償トスルニ外ナラス然ルニ上告者ハ上來説明スル如ク講法ノ改定ニ因テ更ニ實掛ヲ爲スヘキ者トナリ第八會目取當リ金ノ返金即チ空掛ヲ爲スヘキ義務ノ釋放チ受ケタルモノナレハ假證書ノ儘ニ差置キアルモ怪シムニ足ラス

第四條

原裁判所カ到底始審裁判ノ如ク相心得可キモノナリト言渡シタルハ原告ノ敗訴タルコト猶始審裁決ノ如シトノ謂ニシテ畢竟曲直結局ヲ示シタルニ過キス故ニ終審判決ニ明示セサル始

審判決ノ理由ニ從フヘキ限ニアラス  
又上告者ノ要求相立ダスト判定セシ上ハ別ニ滿會ノ年月ヲ説明スヘキ理由アラサルナリ

第五條

裁判言渡ハ緊要ナル證據ニ據リ理由ヲ明示シテ其理非ノ判決ヲ與フルモノニシテ必シモ提  
供スル諸般ノ證據ニ對シ一々説明ヲ與フルニ及ハサルモノナレハ其證據ニ對シ一々判語ヲ  
與ヘストアルヲ以テ不當ト謂フヲ得ス  
右ノ筋合ナルヲ以テ大坂控訴裁判所ニ於テ言渡シタル終決裁判ハ破毀スヘキ理由ナシト  
ス

但上告ニ係ル入費ハ上告者償却スヘシ

第六百三號

○小作米金催促并ニ地所引揚上告ノ判文(明治十五年六月九日上告  
十五年十二月廿七日申渡)

千葉縣下總國印旛郡大森村七

十七番地平民

宮 島 宗 十 郎

東京府京橋區西紺屋町九番地平

民

林 和 一

千葉縣下總國印旛郡大森村二

右代言人

上告人

百十九番地平民

石 井 長 作

被上告人

上告ノ要旨

第一 上告者カ甲第一二號證ニ依リ小作米金ノ増額ヲ請求スルハ契約ニ明示シタル事柄  
ナリ何トナレハ該證ニ(萬一入附米不納仕候歟其他不條理ノ件有之候ハ、地所御引揚  
相成候モ毫モ異論申間敷)トアリ即チ不條理云々ノ事柄ヲ履行セント要求スルモノナ  
ルニ原裁判所ハ單ニ明示セル丈ケノ小作米金ニ止ルモノト判定セラレタルハ證書ノ適  
用ヲ誤リタルモノナリトノ事

第二 入額ノ出額ヲ償フ能ハサルヲ以テ其増額ヲ求ムルニ該リ之カ要求ヲ拒ムハ不條理  
ナレハ契約ノ明文ニ基キ地所引揚ルルハ既ニ結約ニ明記スル所ナリ然ルチ原裁判所判  
文ノ如ク増額ヲ求ムルハ契約外ナリトシ法律ノ保護ヲ與ヘストセハ其増額ヲ拒ムハ不  
條理ナラスト云ニ何ソ異ナランヤ果シテ不條理ナラストセハ契約ニ明記スル所ノ地所  
引揚モナス能ハサル結果ヲ來シ到底法律ノ保護ヲ受クヘキ契約ノ明文モ終ニ畫餅ニ屬  
ストノ事

第三 甲第一二號證ニ明示セル事柄ニ就テ其増額ヲ要メ而シテ其事實ヲ證明スルカ爲メ  
甲第三四五號證ヲ呈供セシモノナレハ原裁判所ハ宜ク此事實ヲ推及審明セサルヘカラ  
ス然ルチ偏ニ甲第一二號證ノ適用ヲ狹メ見解ヲ降サレタルニ依リ其事實ヲ徵スヘキ證  
憑ヲ無視スルニ至リシナリ夫入額ヲ償フ能ハサルハ被上告者モ之ヲ認メ唯比隣相當ノ

巨額ニハ應シカタシト云ニ在リ然ルニ原裁判所ハ此争點ニ對スル事實ヲ審明セス其證據モ辯明ヲ附セサリシハ審理不盡ノ裁判ナリトノ事

第四 本案ニ付新契約ヲ爲スニ非レハ増額スル能ハス其新契約ハ相互ノ諾否ニ放任ノ法律ノ關與スル所ニ非ストセハ法庭ニ於テステ甘諾セサル被上告者ナレハ何レノ時カ入額ノ出額ヲ償フノ結果ヲ看ンヤ果シテ然ラハ止テ得ス更ニ出訴セサルヲ得ス而シテ契約ヲ變換新結スルハ相互ノ諾否ニ放任シテ法律ノ關與セサルハ論ヲ俟サレ且前陳ノ如キ情實アル本案ニ適用スヘキモノニアラス若シ原裁判ノ確定スルニ於テハ再三ノ訴訟ヲ醸生スルニ至ラン之レ破毀ヲ求ムル所以ナリトノ事

辯明

原判文ニ契約ノ効力ハ其契約ニ明示シタル事柄ニ適用スヘシテ之ヲ他ノ事柄ニ推及スヘカラス云々トアルニ對シ上告者カ甲第一二號證ニ依リ小作米金ノ増額ヲ要求スルハ其明文ニ不條理ノ件有之候ハ、云々トアル事柄ヲ履行セント求ムルモノナリト云ト雖モ右證書ノ文意ハ被上告者カ不條理ノ所爲アル節ハ其地所ヲ引揚ヘントノ趣旨ニシテ曾テ契約ナキ小作米金増額ノ求メニ應セサルトテ直チニ不條理ノ所爲トナスヲ得ス故ニ相當ノ理由アルニ於テハ將來増額ノ約定ヲ爲ント求ルハ格別現ニ約定ナキ小作米金ノ増額ヲ求其求メニ應セサレハ地所ヲ引揚ント要求スルハ不當ナルニ依リ原裁判所カ結局始審裁決ノ通相心得云々ト判定シタルハ不當ノ裁判ト爲スヲ得ス  
但右ノ外陳述スル處ロアリト雖モ以上ノ辯明ニ歸着スルヲ以テ一々辯明ヲ與ヘス

判決

前條ノ筋合ナルヲ以テ東京控訴裁判所ノ裁判ハ破毀スヘキ理由ナシトス  
第六百四號

○抵當貸金催促上告ノ判文(明治十五年十一月三十日上告)  
(全十五年十二月廿七日申渡)

山梨縣甲斐國東八代郡白井河原  
村四十番地平民大久保彌右衛門  
代人

東京府神田區小川町一番地寄留  
山梨縣士族

上告人

曾 谷 一 規

山梨縣甲斐國西山梨郡工町一番  
地寄留東京府士族

代言人

藤 田 正 義

山梨縣甲斐國東八代郡白井河原  
村二十二番地平民

被上告人

中 澤 清 吉

上告要領

原裁判狀中(甲乙兩證ハ何レモ戸長角田宗孝ノ公證アリテ共ニ真正ト認メ得ヘシ且甲第

二號證ニ依レハ原告ト中澤「ミツ」トハ別戸異産ノ者ナリ然シテ乙號證中澤「ミツ」ノ所有地ヲ明治十一年二月ヨリ明治十二年一月ニ至ルノ間ニ於テ原告所有トナシタル證アルニアラサレハ依然中澤「ミツ」ノ所有地ト謂ハサルヲ得ス其所有主中澤「ミツ」カ認印ナキ甲第一號證ハ其書入ノ効力ナキヲ以テ該證書ハ書入ナキ證書ト異ルナキモノナリ故ニ原告ノ申立ハ事理ニ適シタルモノトス」ト裁判セラレタリ抑モ甲第一號證ハ被上告者(控訴原告)所有ノ屋敷地三畝廿四歩ヲ書入レ戸長ノ奥書アル公證ニシテ毫モ疑ヲ容ルヘキナシ且其印影ハ被上告者ノ實印ニシテ借用ノ金圓ハ返戻スヘシト明言シ原裁判所モ亦速ニ返金スヘキノ判文ヲ與ヘラレタルニ非スヤ而シテ獨リ其抵當ニ於テ其効力ヲ有セサルノ理ナキヲ信ス何トナレハ右抵當ノ地所カ當時中澤「ミツ」ノ所有ナリセハ被上告者カ之レヲ抵當ニスヘキ權ナク戸長モ亦之ヲ公證スヘキノ理アラサレハナリ夫レ中澤「ミツ」ハ明治十年八月中離別トナリ長女「マツ」ナル者相續シ尋ヒテ被上告者ヲ養子ト爲シ戸主ト定メタル「甲第二號證即チ戸籍簿寫ノ通りナリ依テ乙號證ノ成立ヲ按スルニ明治十一年二月迄地券狀ハ中澤「ミツ」ノ名義ニアリタレハ當時其儘山梨縣廳ヘ地券書換ヲ請願セシ際田畑ノ一筆仕譯書ニ戸長ノ公證ヲ受ケタルモノヲ携帶セシニ外ナラサルト信ス何トナレハ被上告者ノ名義ニ地券書換ヲ請願セシハ明治十一年二月十七日ニシテ乃チ乙號證ト同年月ナレハナリ爾來貢租諸費ニ至ル迄皆被上告者ノ上納スル處ニシテ既ニ地券狀モ同人ヘ下附セラレタリ故ニ乙號證成立ノ翌年即チ明治十二年一月十九日日本訴甲第一號證ノ成立タル所以ナレハ若此際該地ハ中澤「ミツ」ノ所有ナリト云ハ、其證據ヲ舉ケスハアル可ラス是

法律ノ原則ナリ否ヲサレハ爭テカ十一月二月ノ田畑仕譯書ヲ以テ十二年一月ノ公證ヲ破ルノ効力アラシヤ原裁判所ハ爰ニ着目セズ唯乙號證ニモ戸長ノ公證アルト云フヲ以テ漫然甲第一號證抵當ノ効ナキモノト認メラレタルハ謂ツヘシ失當モ甚シト夫レ如斯原裁判所ハ乙號證ヲ以テ甲第一號證ノ抵當ヲ無効ニ爲シタルノミナラス純然タル權利者ナル上告者ヨリ訴訟入費ヲ償却セシメラレタルハ實ニ不當ノ裁判ナリトノ事  
被上告者ハ上告ヲ不當トシ原裁判ヲ辯護シタリ

判決

本件上告甲第一號證ノ借用證文ハ被上告者ニ於テ己レノ實印ナルニヨリ返濟スヘキヲ自認シタレハ此貸借上ニ異論ナキモノナリ然レモ之ニ書入タル抵當ノ地所ハ被上告者ノ所有ニ非サルヲ以テ書入ノ解除ヲ得ント乙號證ヲ以テ其所有ニ非ルヲ證セリ依テ本件ノ一案ヲ斷析スルハ乙號證成立ノ性質等ヲ詳カニシ果シテ書入ノ地所ハ中澤「ミツ」(ミツトアル)ノ所有ナリヤ又ハ被上告者ノ所有ナルヤヲ判定スルヲ以テ緊要トス然ルニ乙號證ノ文詞ヲ查閱スルニ中澤「ミツ」カ所有地一筆限仕譯書ニシテ中澤「ミツ」離縁ニ付代人中澤「マツ」ト記名シ山梨縣令ニ宛タル書面ナリト雖トモ何等ノ場合ニ用ヒ如何ナル故ニヨリ被上告者ノ手ニ存在スルヤ仔細ニ審究セサレハ之ヲ知ルニ由ナシトス猶且該證日附ノ明治十一年二月十七日ナルヲ以テ之ヲ上告甲第二號證即中澤家ノ戸籍簿ニ徵シテ推考スルニ中澤「ミツ」ハ明治十年八月九日離縁其生家巨摩郡花輪村田中新兵衛方ニ復籍シ同時日ニ於テ中澤「マツ」之レカ相續ヲ爲シタレハ乙號證成立ノ當時「ミツ」ニ於テ中澤ノ姓ヲ冒スヘキ理由

ナシ夫レ如斯該證ハ完全セサル而已ナラス書入ノ地所ハ從來中澤家ノ固有ナルカ將タ「ミツ」カ所有スル處ニシテ離縁復籍ノ際其實家ニ持歸リタルカ是レ亦審究スルコト非レハ未ダ上告甲第一號證ノ書入ヲ以テ無効ナリト認定スルノ原由ナク又以テ別戸異産ト認定スルノ根據ナキモノトス然ルニ原裁判所ハ是等必要ヲ審理ヲ遂ケスシテ被上告中澤清吉ト中澤「ミツ」トハ別戸異産ノ者ナリ故ニ中澤「ミツ」カ認印ナキ甲第一號證ハ其書入ノ効力ナキヲ以テ該證書ハ書入ナキ證書ト異ナラサルモノト裁判シタルハ不當ノ裁判ナリ右ノ理由ナルヲ以テ原裁判ヲ破毀シ名古屋控訴裁判所ヘ移スニヨリ其裁判所ノ裁判ヲ可受者也

但上告入費ハ被上告者ヨリ償却スヘシ

第六百五號

○小作金直増要求上告ノ判文(明治十五年七月十一日上告 全十五年十二月廿七日申渡)

埼玉縣武藏國北足立郡中尾村九

十八番地平民

上告人

饗庭喜右衛門

東京府日本橋區蠣殼町二丁目十

七番地平民

右代言人

浦田治平

埼玉縣武藏國北足立郡浦和宿三

十五番地平民

被上告人

石内伊太郎

上告要領

原裁判所ハ判文ニ「其結約後ニ於テ課租ヲ増加セラレ爲メニ地主ノ所得ヲ減少スルニ至ルキハ其小作金モ亦之ヲ増加シテ以テ相補フヲ得ヘキハ地主當然ノ權分ナリ何トナレハ課租ノ増加セシハ蓋シ改租ノ趣旨ニ基キ地位ト租額ト相適當セシメタルヲ勿論ナレハ獨リ之ヲ小作人ニ利シテ地主ニ損スルノ理由ナクハナリ」ト明示シタルハ凡契約ハ法律ニ背カサル限リハ何等ノ「結成」ト雖モ總テ利害ハ契約者雙方ニ放任シ措クヘキモノニシテ一方ノ隨意ヲ以テ約東意外ノ事柄ヲ要求スルノ道理ナキコトハ則契約ノ本然ニシテ敢テ贅言ヲ竣タサルナリ故ニ本件被上告人ノ要求ニ於ケルモ亦然リ若シ夫レ租稅ノ増加ヲ原因トシ以テ小作直増ヲ要ムルノ權アリトセハ本件ノ契約ハ蓋シ無キニ若カサルヘシ豈ニ斯クノ如キ道理アラシヤ況ヤ被上告人ハ上告人ニ對シ約定ノ外増金等ハ無之候ト明言シ上告第一號證ヲ差入アルニ於テヤ然ルニ原裁判所ハ上告第一號證特約アルニモ拘ハラス却テ被上告人ニ小作直増ヲ要求スルノ權利アリト言渡シタルハ不當ナリトス然リ而シテ判文ノ末項ニ至リテハ「地主所得ノ小作純益ハ當初契約ノ際雙方合意ノ額即チ十三圓九十一錢(十五圓ノ小作金中ヨリ永一貫八十八文七分九厘ノ課租ヲ除去ス)ヨリ少ナルヘカラス又之ニ起ユヘカラス」ト明示シ以テ本訴小作ノ契約ハ斯ノ如キ合意ヨリ成立シタルトノ解釋ヲ下セリ是レ前後抵觸スル裁判ト云ハサルヲ得ヌ何トナレハ既ニ前段ニハ租額ノ増加ニ原因シ被上

告人即地主ハ小作直増ヲ要求スルノ權利アリト明示シ後段ニ至リテハ契約當時ノ合意ノ金額ニ超過スヘカラスト明示シタルヲ以テナリ右ハ被上告人カ小作金直増ヲ要求スルノ權ハ獨リ小作人ニ利シテ地主ニ利セサルトノ道理ナシト云フニ基クトノ意カ將々兩造ノ合意アルカ故ニ上告人ハ之レヲ増サ、ルヘカラスト云フノ意カ蓋シ原裁判所ノ判旨兩岐ニ涉ルヲ以テ之レヲ解釋スルコト苦シムナリ而シテ獨リ小作人ニ利シテ地主ニ利セサルトノ道理ナシトセンカ上告第一號證アルヲ如何セン又兩造ノ合意則契約ノ旨意ニ基キ上告人ハ増金ヲ爲スヘキ義務アリトセンカ之レ却テ直増ハスマシト明言シアレハ何ソ直増ヲ爲スノ義務アリト云フコト得ンヤ由是視之ハ本訴小作金直増ハ其合意ヨリ起因スルトノ解釋ハ之レ中正ノ解釋ニアラスシテ則偏頗ノ判斷ト云ハサルヘカラスト何トナレハ上告第一號證ニ「約定ノ外増金等無之候」ト記載シ被上告人ヨリ上告人ニ差入レアレハナリ加之該二書（上告第一號證被上告第一號證）ハ同日ノ成立ニシテ互ニ之ヲ交換セシモノナレハ一方ノ隨意ヲ以テ契約外ノ事柄ヲ要求スルノ權利アルヘカラスト然ルニ原裁判所ハ上告第一號證ヲ排斥シ管々被上告人ノ一方ニノ權利アル契約ナリト解釋シ上告第一號證ノ効力ヲ抹却シ去リタルハ之レ違法ノ解釋ニシテ不法ノ裁判ナリトノ事

判決

上告第一號證ヲ按スルニ約定ノ外増金等ハ無之候トアルハ年ノ豊凶或ハ近隣小作米ノ高下等ノ如キ尋常ノ事故ニ由テハ増金ヲ求サルヘシトノ意ニシテ一般ノ地租改正ニ由テ租額増加シ又事故アリテ土地ニ賦課スル村費ノ増加セシ如キ場合ト雖モ決シテ増金ヲ求メサルヘシト云フノ意ニアラスルヘシ何トナレハ是等ノ事件ハ一ニ政府ノ特令ニ出テ、契約者雙方ノ豫想セサリシコト推定スヘケレハナリ然リ而シテ地租ノ増加タル所謂偏重偏輕ノ弊ナカラシムルニ出テ其地位相當ノ標準ヲ取リタルモノナルニ因リ其土地收穫ノ全部ヨリ之ヲ仕拂フヘキ筋合ナレハ得ル所ニ限リアル地主即彼上告者ニ於テハ其増加セシ租税及ヒ土地ニ賦課スル村費ノ員額ニ準シテ其小作金ノ増加ヲ請求スルヲ得ヘキナリ然レハ上告者ト被上告者トノ間ニ於テハ小作金ノ額ヲ十五圓ト定メ尋常ノ事故ニ由テハ増金ヲ求メサルヘシトノ契約アルニ依リ其豫定ノ額ノ内當時ノ貢租村費ヲ引去リタル殘餘ヲ以テ地主ノ純益ト爲シ之ヲ増損セサルニ止メ一ニ租税民費ノ増減ノ高ニ從ヒ小作金高モ互ヒニ増減ヲ求ムルヲ得ヘキ條理ナリトス然ラハ原裁判所カ是等ノ事理ヲ明示シテ小作ノ純益ハ當初契約ノ際雙方合意ノ額即チ十三圓九十一錢ヨリ少カラサルヘカラスト又タ之ニ超ニヘカラスト判決セシハ不當ニアラス

右ノ筋合ナルニ依リ原裁判所ニ於テ言渡シタル終決裁判ハ破毀スヘキ理由ナシトス  
第六百六號

○村借償却地價割金請求上告ノ判文（明治十五年八月八日上告全十五年十二月廿七日申渡）

三重縣伊勢國一志郡本村平民

同村負債支消委員

太田利八

東京府京橋區瀧山町十一番地寄

右代言人

留埴玉縣士族

澤田俊三

三重縣伊勢國一志郡小戸木村六

番地平民

被上告人

海津九藏

同村二十番地平民

松本吉太郎

同村十六番地平民

飯田庄吉

同

上告者カ名古屋控訴裁判所ノ裁判ヲ不法トシ本院ニ向ケ之カ破毀ヲ要ムルノ主點ハ左ノ如

一 上告第二號證中ニ掲グル所ノ議決ハ上告村ノ公借ニ係ル負債ヲ辨償センカ爲メ上告第  
十三號證即チ明治十一年四月廿四日附ナル三重縣甲第四十七號布達町村會規則ニ照準  
シ之カ議決ヲ爲シ其負債ノ幾分ヲ村内ノ土地ヲ所有スルモノニ賦課徵收セントスルノ  
議決ニシテ既ニ該規則第六條ニ依リ戸長ノ認可ヲ經タルモノナレハ即チ該議決ハ法律  
ト等キ効力ヲ有スルモノニシテ其地方長官ノ指令ニ依テ伸縮セラルヘキモノニアラス  
然ルチ原裁判所ハ一時戸長カ思料ノ決シ難キヨリ縣令ヘ伺ヒタル上告第二號證中ノ伺  
書ニ一村公借ノ御判決ヲ受ケ「云々」トアルト被上告番外第二號證ノ指令ニ「戸長伺ノ指

令ハ判決外ニ關係ナキモノト心得可シ」云々トアル文詞ニ固着セラレ其曩ニ判決セラ  
レタル以外ノ村借ハ被上告者ヘ對シ賦課徵收スルノ權ナシト申渡サレタルハ町村會ナ  
ル性質ノ見解ヲ誤レル不法ノ裁判ナリトノ事

一村借ノ事タル裁判ニ依テ始メテ其負擔ノ義務ヲ生スルモノニアラス既ニ借入シタル時  
之ヲ生スルモノナレハ假令ヒ未タ其判決ヲ經サルモ既ニ判決ヲ經タル村借ト同質同件  
ナル負債ハ共ニ之レヲ負擔セサルヘカラサルハ條理上然ラシムル所ナリトス故ニ村會  
ニ於テ未タ判決アラサル部分モ共ニ議決セシモノニシテ若シモ原裁判所ニ於テ其判決  
アラサル負債ハ果シテ村借ナルヤ否ノ疑ヒアルニ於テハ宜ク之カ審理ヲ遂ケラルヘキ  
筋ナルニ更ニ此審理ヲ遂ケラレサリシハ盡スヘキ審理ヲ盡サ、ル不法ノ裁判ナリトノ  
事

辯明

村會ニ於テ爲シタル議決ハ戸長ノ認可ヲ得テ初メテ其効ヲ生スルモノナレハ本訴ハ曩ニ  
上告村ニ於テ爲シタル議決ニ對シ戸長カ與ヘタル認可ハ果シテ一村ノ公借ナリト判決セ  
ラレタル部分ニ對シタルモノナリヤ否ノ一點ヲ審明スルニ止マルモノトス  
抑モ上告村ノ戸長清水昇カ三重縣令ヘ對シ伺出タル上告第二號證ノ書面ニ依レハ「從來  
當村ニ村負債多分有之云々各債主ヘ返辨滯滞スルヨリ出訴ニ相成一村公借ノ御判決ヲ受  
ケ依テ該金割方臨時村會議ニ附シ候處云々他ノ町村ヨリ該村ノ地所々有スルモノヘ賦課  
致取立候テ可然哉至急何分ノ御指令被成下度此段奉伺候以上」トアリテ即チ一村ノ公借



ナルト判決セラレタル部分ニ對シ之カ償却ノ賦課方法ヲ伺出タル書面ナリトス而シテ縣令カ之ニ對スル指令ニ「書面之趣村會ノ會議ニ附シ議決ノ末戸長ニ於テ認可ノ上ハ伺ノ通」トアリ此指令ノ旨趣タル被上告番外第三號證ノ指令ニ依レハ「戸長伺ノ指令ハ判決外ニ關係ナキモノト心得可シ」トアリ然レハ其戸長カ伺出タル書面ト云ヒ縣令カ付與シタル指令ト云ヒ當時村會ニ於テ議決シタル事柄ハ一村ノ公借ナリト判決セラレタル部分ノミニ關シ戸長カ此議決ニ對シ與タル認可モ亦此部合ノミニ對シタルモノナルコトハ甚タ明確ナリト云フヘキナリ然レハ此議決ヲ以テ判決外ニ係ル未定ノ借財マテモ被上告者ヘ對シ賦課徵收セントスル上告者ノ要求ハ不當ニシテ結局原裁判所カ「其賦課スヘキ金額ハ被告<sup>被上</sup>カ今回始審應ヘ照合セシ判定ニ繫ル部分ヲ限ルモノト了知スヘシ」ト申渡シタルハ相當ノ裁判ナリトス而シテ本訴ハ縣令カ付與シタル指令ニ對シ之カ當不當ヲ諍訟スルモノニアラサレハ縣令ノ指令ハ村會ノ議決ヲ伸縮スヘキ權ナシトノ上告者カ所論ハ全ク本訴ニ關係アラヌ又本訴ハ未定ナル村借ノ精算ヲ要求シタルモノニアラサレハ原裁判所カ曩ニ一村ノ公借ナリト判決セラレタル以外ノ村借ニ對シ之カ實否ノ如何ニ審究セサルモ固ヨリ審理不盡ノ裁判ナリト云フヲ得ス

判決

右辯明ノ筋合ナルコト付名古屋控訴裁判所カ本訴ニ對シ與ヘタル裁判ハ破毀スヘキ理由ナキモノトス

第六百七號

○質地受戻上告ノ判文(明治十五年二月廿五日上告  
全十五年十二月廿八日申渡)

神奈川縣武藏國多摩郡下恩方村  
十五番地平民中島仙助代言人  
東京府深川區深川佐賀町一丁目  
十八番地平民

上告者

田代久米吉

神奈川縣武藏國多摩郡二分方村  
三十三番地平民菅沼彌兵衛代言人

東京府京橋區本材木町三丁目五  
番地平民

被上告者

飯高宗三郎

質地請戻ノ訴訟東京控訴裁判所ノ裁判ヲ不法ナリトシ破毀ヲ求ムル上告ノ要領左ノ如シ  
抑本訴ノ質地ハ慶應二年ヨリ向フ十ヶ年則チ明治九年一月ノ期限ニシテ同年三月マテ流地トナラサルコトハ被上告人カ初審廳ニテ陳述スル所ナリ然ルニ該地ノ地券證ハ明治六年中已ニ被上告人ノ名義ニナシタルモノニシテ被上告人カ流地ニナリタリト申立ル以前名受チナシタル地券證ヲ以テ流地ノ證據トスルニ足ラサレハ該質地ハ流地ト認ムヘキ證據一モアルコトナキモノナリ然ルニ原裁判所ハ單ニ一葉ノ質地證文ノ文詞ヲ以テ流地ヲ甘諾

シタルモノトシ法律ノ保護ヲ望ムヘキ限ニアラスト裁判セシハ何等ノ間違ナルヤ了解スル能ハス若シ此裁判ヲ適當ナルモノトスルキハ彼ノ私約ハ公ケノ規則ニ依テ消滅スルト云原則ニ背反スルノミナラス法律ノ効用モ亦更ニナキモノナリ今假ニ質地ノ契約ヲ十ケ年ト定メタルモノアリトセンニ質地ニ關スル法令ハ三ケ年トアルニモ拘ラス私約ヲ履行セシメテ以テ公則ヲ捨テ十ケ年間受戻スル能ハサルモノトナスカ豈如斯不都合ナルノ理アラシヤ因テ上告人ハ質地ニ關スル法令ヲ舉ケテ原裁判ノ不法ナルヲ證明ス可シ夫レ第一號證ハ明治九年一月ノ期限ニシテ全年三月マテ流地ニナラサルハ被上告ノ陳述ニ因リ明瞭ナレハ明治六年中ハ固ヨリ年季中ナルモノナルヲ以テ明治六年第十八號公布地所賃入書入規則第十四條ニヨリ全年七月限リ證文ヲ書改ヘキハ當然ナルヲ原被告共等閉ニ付シ改正セシテ今日ニ及タレハ該質地ノ契約ハ原被告間ニ於テハ依然トシテ効力ヲ有スルモノト見做サ、ルヲ得ス既ニ書改メタルモノトセハ即チ壬申二月十六日以後ノ證書ニ掛ル質地ト同ク論スヘキハ自然ノ理ナリ左スレハ明治六年第五十一號公布本文及ヒ全年司法省第四十六號布達ニ依リ糶賣ノ處分ニ付スヘキモノナリトス而レハ糶賣ノ處分タルヤ元ト質置主ノ請戻ヲ能ハサルノ場合ニコソ適用スヘキモノナレハ今ヤ質置主カ該質代金ヲ返却シ之ヲ請戻サントスルニ至リテハ債主ノ之ヲ拒ムコト能ハサルノミナラス十分該地受戻得可キ權利アルコト明々白々タルモノナリ而レハ原裁判所ハ私約ニ因テ法律ノ保護ヲ望ムヘキノ限ニアラスト裁定シタルハ不法ノ裁判ナリトノ事

被上告者ハ上告ノ不當ナルヲ論シ原裁判ヲ辯護セリ

依テ辯明及ヒ判決ヲ與フル左ノ如シ

辯明

本訴甲第一號證ノ地所ハ質置主ニ於テ受戻得ヘキヤ否ヤヲ判定スルヲ以テ緊要ナリトス抑該質地ハ慶應二年四月上告者ヨリ藤内治兵衛ヘ十ケ年期即明治八年十二月マテノ期限ヲ約シ賃入シタルヲ尙又明治四年度藤内治兵衛ヨリ被上告者ヘ上告者ノ承諾上賃入ト爲シタリシ而シテ明治六年第十八號公布地所賃入書入規則發行ノ際原被告間ニ於テ證書々換ノ手續ヲ怠リ其儘經過ナシタルモノナリ故ニ本訴ノ質地證文ハ壬申二月十五日以前ナリト雖モ別ニ期限ニ至リ熟議ノ上流地シタリト見ルヘキモノアラサル限リト未タ以テ流地トスルヲ得サルモノトス如何トナレハ明治六年司法省第四十六號達ニ當八月ヨリ以後ハ云々トアル如ク同年月ヨリ以後ハ一般證書ヲ書換ヘ亦壬申二月十五日以前ノ質地證アルヘキ理ナシト見据裁判法ヲ定メラレタル以上ハ偶々右現則ニ違ヒ證書ヲ書換サルモノアルモ右布達ニヨリテ裁判セサルヲ得サルノ道理ナレハナリ然ルニ原裁判所ハ期限后協議有無ノ如何ニ關セス藤内治兵衛ヨリ被上告者ヘ差入タル證書ニ「年季明ケ子年正月ニ至リ元地主中嶋仙助方ヨリ受戻度申出候ハ、云々其節請戻不申候ハ、流地相成候間此證文ヲ以テ永々御支配可被成」トアル文詞ニ依テ期限ヲ默過セシハ相互甘諾ニ出タルモノナリトシ質置主ニ於テ請戻ヲ請求スルハ相互ノ承諾ニ戻レルヲ以テ法律ノ保護ヲ望ムヘキ限ニアラスト言渡タルハ不適法ノ裁判ナリトス

右ノ理由ナルニヨリ東京控訴裁判所カ本訴ニ對シ言渡シタル裁判ヲ破毀シ更ニ本院ニ於テ

判決スルヲ左ノ如シ

判決

本訴質地ハ明治六年司法省第四十六號達ニ照ラシ糶賣ノ處分ヲ爲スヘキモノナリ故ニ原告(上告者)ニ於テ質代金ヲ完済シ受戻ヲ請求スルニ於テハ被告(被上告者)ハ之ヲ抗拒スルノ權ナキモノナリ

但訴訟入費ハ總テ被告ニ於テ辨償スヘシ

第六百八號

○立木伐採差留上告ノ判文(明治十五年三月九日上告全十五年十二月廿八日申渡)

廣島縣備後國御調郡貝ヶ原村平民長尾莊助外五十六名總代兼同村平民

金野昌義

上告人

森鳩常太郎

安藤七三郎

東京府日本橋區青物町二十五番

地士族

仁杉英

右代言人

廣島縣備後國御調郡千堂村平民

石川喜八外三十一名代人兼同村平民

平民

内海權右衛門

同村平民花田麻助代言人

東京府深川區佐賀町一丁目十二番地寄留茨城縣士族

鴨志田直

立木伐採差留一件上告人ニ於テ大坂上等裁判所ノ裁判ヲ不法ナリトシ破毀ヲ求ムル上告ノ要領左ノ如シ

第一 凡ソ詞訟ハ一方カ其義務ヲ怠リ或ハ横ニ損害ヲ加ヘ又タハ契約ヲ制限スル處ニ侵入シ或ハ其事ヲ行ハサル等障礙アリテ初メテ起ルモノニシテ決シテ未來ヲ想像シ豫防ノ處置ヲ爲スヘキモノニアラサルナリ故ニ期限ヲ經過スルモ猶ホ借金ノ返辨ヲ爲サ、ルモノアルモ之ヲ裁判所ニ呼出シ其返辨ヲ請求スルハ素ヨリ至當ノ處置ナリト雖未ダ返濟期限前ナルモ彼ノ面貌ハ人相鑑ニ照セハ大惡人タレハ逆テモ期限ニ至リ返濟スヘキモノニアラスト思料スルニ付決シテ期限ニ返濟間違ハサル様裁判ヲ伏冀スト云ハ判官ハ之カ曲直ヲ判スルニ及ハス絶倒シテ止マン而已又タ彼ハ其ノ契約ニ制限スル處ヲ侵入シ障害ヲ加ヘタリ故ニ之カ契約ヲ解除シ或ハ之カ損害ノ償ヲ得ント訴フルモ其契約ノ制限ヲ侵入セシ證據ナキモハ則原告ノ敗訴タルヘキ而已然ルチ原裁判所ハ將來

立木伐採ヲ差留ルノ主旨ナレハ云々ト裁決セラレタリ夫レ立木ヲ伐採スルヲ得ルヤ否ハ第二第三號證文詞ニテ既ニ明確ニシテ上告者モ亦決シテ立木伐採ノ權アリト云ヒシコアラズ唯被上告者カ上告者ハ契約ニ違背シ柴草外ナル目通一尺モ有之樹木ヲ伐採セリトシテ起訴セシヲ以テ上告者ハ如斯樹木ヲ伐採セシコトナク唯柴草中ニ含有スヘキ萌芽ノ如キ雜木ヲ採採セシ而已ナレハ決シテ契約ニ違背セシコトナキヲ以テ被上告者ヨリ訴ヲ請フヘキ理ナキ旨ヲ辯論セシモノナレハ上告者カ目通一尺モ有之樹木ヲ伐採セシヤ否ハ則本訴緊要ノ點ニシテ果シテ上告者ハ被上告者陳言ノ通り大ナル樹木ヲ伐採セシトセハ則上告者ハ曲者タリ又タ斯ル樹木ヲ伐採セシコトナシト決定スル上ハ被上告者ハ曲者タルヘキヲ該樹木伐採云々ノコトハ無用ノ陳述ナレハ不採用ト裁定セラレタレハ是レ前ニ所謂彼ハ逆モ期限ニ返金スヘキ人相ニアラサレハ間違ハサル様裁判ヲ伏冀スト云フト一般ニシテ上告者ハ素ヨリ立木伐採ノ權ナキコトハ第二第三號證ニテ千萬熟知ナレハ別段其旨裁判ヲ請フルニ及ハス被上告者モ亦タ斯ル訴ヲ爲シテ上告者ヲ法庭ニ呼出スヘキモノニアラサレハ則チ被上告者曲者タラサルヲ得ス然ルチ原裁判所ハ其爭論ノ主點ヲ度外視シ爭論セサル契約ノ解釋ヲ爲シ訴訟入費ハ上告者ヲ曲者トシテ上告者ヨリ辨償スヘシトハ實ニ審理ヲ盡サス事實ヲ紊亂セル不法ノ裁判ナリト思料ス

第二 舊大坂上等裁判所ハ審理中前掲載ノ如ク目通一尺モ有之樹木ナキヲ證センカ爲メ實地檢査アラソコト再三上願スルト雖モ何ヲ以テ立木ノアリト否ヲ判定シ將來ノ判決

チノミ下サレシモノナルカ之レ本訴ノ目的原被曲直ノ要點ハ該目通一尺ノ樹木ヲ伐採シタルト否又立木成殖シタルト否トハ地ニ付視ルヘキコト外ナシ然レハ曾テ再三檢査アラソコトヲ請願スルニ採用ナラサルノミナラズ其辯明セラレサルノミカ度外ニ付シテ以テ判決ナリシハ最モ不法不盡ノ裁判ナリト思慮ス

被上告人ハ右申告ニ對シ原裁判不法ナラサル旨辯護セリ

辯明

原裁判書類ニ就キ本案原被兩造ノ爭點ヲ取調フルニ起訴以來控訴ニ至ル間ニ在テハ被上告者(始審原告)ハ本訴三助山ニ生スル肥草ノミ上告者(始審被告)ニ妨取ヲ許シタレト立木ヲ代採スル權利ナシト云ヒ上告者ハ該山柴草妨取ノ權利アレハ立木ハ其柴草中ニ含有スルモノナリト云ヒ互ニ立木ノ柴草中ニ含有スルヤ否ヲ爭ヒ而シテ其立木ニ區分ヲ立サリシ處控訴審理中即明治十四年十二月十四日ノ對審ニ至リ被上告者ニ於テ(本訴柴草ノ儀ハ年々發生スル處ノ小木ハ總テ此柴草ニ含有セシモノニシテ即チ契約ノ肥草ナレト原告(上告者)於テ該山ニ有之樹木凡ソ目通一尺位モ有之樹木ヲ伐採候ニ付被告(被上告者)ヨリ右伐採ヲ差留メ候筋合ニテ其伐採ハ今猶現存セリ依テ該樹木ハ向後原告(上告者)ニ於テ伐採不致様御裁判受度ト供述シ上告者ニ於テハ(本訴論山ニ於テハ從來柴草妨取ノ契約ニ付該山ニ生スル草ハ勿論柴ト唱ヘ年々發生スル處ノ小木鎌ニテ妨取位ノモノハ總テ妨取來リ候處被告(被上告者)於テ柴草ト稱スル小木スラ代採ヲ差留候儀ニテ不得已本訴ニ及タル所以ニシテ固ヨリ目通一尺モ有之樹木ハ該山ニハ無之假リニ該樹木アリトスル

モ伐取リ不申候得共右柴草ハ從前ノ約定ニ基キ取致度ト供述シタリ此供述ニ依レハ  
右三助山ニ年々發生スル小木ノ柴草中ニ含有スルコトハ兩造異議ナキ所ニシテ其爭點ハ唯  
該山ニ目通一尺位ノ樹木アルヤ否ヤト上告者カ右樹木ヲ伐採セシヤ否ヤノ二個ニ歸スル  
モノトス左スレハ原裁判所ハ右爭點ニ對シ審理判決セサルヘカラス何トナレハ其樹木ノ  
有無ト伐採ノ如何ハ本案曲直ノ分ル、所ナレハナリ然ルチ〔本訴ノ要點ハ將來立木伐採  
ヲ差留ルノ主者ナレハ既往ニ涉ルモノハ無用ノ陳述〕トシ此爭點ヲ審理判決セズ概シテ  
〔原告上告者〕ハ該山ノ樹木ヲ伐採スルノ權利無キモノト申渡タルハ要點ヲ失シタル不當  
ノ裁判ナリトス

判決

右ノ次第ニ付大坂上等裁判所カ本訴ニ與タル裁判ヲ破毀シ廣嶋控訴裁判所ニ移スニ依リ同  
裁判所ノ裁判ヲ受クヘキモノナリ

但上告入費ハ被上告者ヨリ辨償スヘシ

第六百九號

○共有山林地々券名義書換上告ノ判文(明治十五年五月廿九日上告  
全十五年十二月廿八日申渡)

愛知縣尾張國東春日井郡上末村

三十七番地平民落合市左衛門同

縣同國同郡同村同番地平民落合

小平治代官人

上告者

東京府京橋區采女町二十一番地

寄留山口縣士族

河村秀俊

愛知縣尾張國東春日井郡上末村

平民落合嘉助外百六名代官人

東京府京橋區桶町二十二番地寄

留福井縣士族

中嶋又五郎

被上告者  
共有山林地々券名義書換約定履行ト詞訟一件名古屋控訴裁判所ノ裁判ヲ不當ナリト上告ス  
ル要領左ノ如シ

第一條

終審判文ニ〔凡自己ノ實印押捺スルニ云々斯ノ如浮虛ノ申立ハ採用セス〕ニアレモ落合  
市左衛門ハ高力種英カ奸計ニ罹リ該甲第一四號證ニ捺印シタルモノナレハ固ヨリ不正ニ  
起因シタル調印ナリ又假リニ之ヲ正當ノ押印ナリトスルモ該證カ以テ直ニ論地山林ヲ共  
有地ナリトスルニ足ルヘキ證憑トハ云フ可ラス何者論地ノ所有主ハ落合小平治ナレハ其  
所有權ナキ市左衛門ニ於テ之カ處分ヲ得ヘキ道理ナクハナリ且ツ又市左衛門ハ論  
地ノ所有權ヲ有セサルモノナレハ元來被告タルノ道理ナキ而已ナラス實際其要求ニ應ス  
ル不能ハサモノナリ故ニ上告者ハ此點ニ付飽迄終審廳ニ向テ之レカ抗辯ヲ爲シタルニ當

ニ採用セラレサルノミナラス一篇ノ辯明ヲモ與ヘス漫然落合小平治ト同一ノ判決ヲ與ヘ  
タリ此豈不當ト謂ハサル可シヤ加之假令該證書ヘ市左衛門カ捺印シタリトテ此レ市左衛  
門ノ一身ニ止マリ毫モ小平治ニ關係ナキニ此ヲ以テ直ニ小平治モ承諾セシ如ク判定セシ  
ハ實ニ不法ノ裁判ナリトノ事

第二條

又同判文ニ(而シテ控該者カ當時買得權ヲ拋棄シタリト云モ其證據ノ看ル可キナク云々  
從テ該契約ヨリ生スル損害ノ賠償ハ被控訴者於テ負擔ス可キハ普通ノ文理ナリ云々本訴  
ノ賠償ハ原告於テ當時被告ヨリ落合重左衛門ヘ賣渡シタル山林地代價即チ金百五拾圓ノ  
賠償ヲ得ルニ止マルモノトス)トアレモ抑モ論地ハ乙第六七號證ノ如ク上告者カ公正ノ  
手續ヲ經テ其所有主タリシ里村英ヨリ買得セシモノナルカ故ニ所有ヲ確證タル地券狀モ  
落合小平治カ名義ナリ然レハ其所有主タル小平治ニ於テ該地ノ處置ヲ如何爲ストモ他ヨ  
リ之ニ故障ヲ容レラルヘキノ道理ナキハ萬々ナリトス然リ而シテ若シ被上告者ニ於テ買  
得權ヲ拋棄セサルモノト假定スレバ乙第九號證ノ如被上告者ノ一人ナル落合庄左衛門外  
四名等ニ於テ該山林地十町步(乙第六)ノ内分割シタル二町五反步ヲ買受クルノ道理ナシ  
トス然ルニ明治十二年五月中該地ノ賣買結了シタルヲ以テ看レバ上告者ト被上告者ノ賣  
買約定ニ全ク破壞シタルヲ明カナリ又被上告者カ論地ヲ買得スル權利ヲ放棄シタルヲハ  
乙第十號證ニ據ルモ判然タリ加之明治十一年十二月中論地ノ賣買結了セシモノト假定ス  
レバ乙第十一號證ノ如ク上告者ヲ該地ニ對シテ當然所有主ノ爲スヘキ事項ヲ實行セシニ

何ノ被上告者ニ於テ之ニ干與セサルノ理アラシキヤ是レ他ナシ訴地ハ乙第十二號十三號證  
ノ如ク上告者ノ所有確然タレハナリ又落合小平治ノ代言タリシ高力種英カ向キニ被上告  
者ハ甲第一四號證ノ如ク契約ヲ爲シタルニモセヨ上告人ニ於テハ當時被上告者ノ要求ニ  
應ス可ラサルヲ答辯スルノ權限ヲ委任シタル迄ナレハ該契約ノ如キハ全ク高力種英カ  
代言人ノ資格ヲ超ヘタル委任外ノ處置ニ其効力ナキハ勿論ナリ若シ甲第一四號證ヲ上  
告者即チ落合小平治ニ對シテ効力アルモノトスレバ實ニ代理人ノ權力ハ廣大ニシテ權附  
ノ區域ナキモノトナルヘシ何者法律上總理ト部理トノ設ケアルモ上陳ノ如ク該甲號證ヲ  
効力アルモノトスレハ總理或ハ部理代人ノ法律ハ全ク徒法ニ歸スレハナリ豈ニ如斯道理  
アラシキヤ又被上告第一四號證ヲ假リニ真正ノモノト看做スヤハ該證但書ノ如キハ概シテ  
之ヲ履行シ得ルモノニ非ス何者上告者ト落合重左衛門ノ間ニ於テハ賣買ノ契約全ク結了  
セシカ故ニ上告者ト雖モ強テ之レカ取戻シヲ爲スノ權利ナケレハ假令如何ナル豫約アル  
モ決果ニ於テ奏効ヲ看ルル能ハスノ其豫約ハ始メヨリナキニ同シケレハナリ然而ノ既ニ  
其豫約消滅スレハ從テ之ニ損害ヲ生スルノ理由ナクシテ終審判文ノ如ク損害ヲ償フヘキ  
道理毫モナケレハナリ況ンヤ該證書ハ奏効ノ證書ナルニ於テチヤ故ニ原裁判ハ不當ナリ  
トノ事

第三條

被上告者カ本訴ヲ提起シタルヤ其精神ハ地券書換及ヒ損害ノ賠償ヲ併セテ求ムルニ在リ  
然リト雖モ二箇ノ條件ヲ併セテ出訴シ得サルハ訴訟法ノ厚則ナリ又假キニ本件ノ如ク二

箇ノ事柄ヲ併セテ出訴シ得ルモノトスレハ訴訟用罫紙規則ニ抵觸スルモノト云ハサルヲ得ス何者ハ本訴ハ綠色罫紙ヲ用ユルハ相當ナルニ紫色罫紙ヲ用ヰタルハ該規則ノ精神ニ反スヘキモノナレハナリ之ニ由テ之ヲ看レハ本訴ハ元來受理スルヲ得可ラサル不法ノ訴訟ナリトノ事

被上告者ノ上告ノ不當ナルヲ論辯セリ因テ辯明并判決ヲ與フルヲ左ノ如シ

辯明

第一條 上告要旨第一項ヲ審按スルニ上告者ノ一人ナル落合市左衛門カ被上告第一四號證ニ捺印シタルハ當時實父小平治ノ代言人タル高力種英ト俱ニ被告トナリテ初審庭ニ出テ原被對審ヲ受タルノ末ニ係ルノミナラス其高力種英カ奸計ニ罹リタリトノ證左モアラサレハ斯ル浮虛ノ申立ハ固ヨリ採用スヘキノ限ニアラス然シテ右市左衛門ハ既ニ被上告第一四號證ニ捺印スル上ハ被上告者ニ對シ實父小平治ヲシテ該第一號證ノ契約ヲ履行セシムルノ義務ヲ負フタルノ筋合ナレハ本訴ノ被告トナルヘキハ亦論ヲ俟タサルモノトス

第二條 全要領第二項ヲ審按スルニ上告者ハ被上告第一四號證ハ當時小平治ノ代言人タル高力種英カ委任權外ノ專斷ナリト云ト雖モ該第一四號證ニハ前條辯明ノ如ク現ニ小平治ノ實子タルノミナラス當時小平治ノ代言人ト俱ニ被告セラレテ初審對質ヲ受ケタル落合市左衛門カ捺印ノ在ルアリ又小平治ニ於テ當時該第一四號證ニ據リ解訟ナリシヲ知得シナカラ被上告者カ再ヒ本訴起訴スルニ至ルマテ何等ノ故障ヲ申出サル等ノ景狀ニ據リ

其事實如何ヲ推測スレハ該第一四號證ノ成立ハ決ノ當時代言人ノ專斷ニ出タルモノニアラスト又上告者ハ被上告第一四號證ヲ假リニ眞正ノモノト看做ス時ハ該證但書ノ如キハ概シテ之ヲ履行シ得ルモノニ非ス云々ト申立ルト雖モ該第一四號證ニハ重左衛門ヨリ地所ヲ取戻スヲ得サル時ハ但書ノ契約ハ消滅スヘキノ文意ナクハ該但書ノ契約ヲ履行セスシテ若シ被上告者ニ於テ損害アリトセハ上告者ニ於テ其損害ヲ賠償スルハ固ヨリ當然ノ事ナリトス仍ホ他ニ申立ル事アリト雖モ以上辯明ノ如クナルヲ以テ其他ノ申立ハ本訴ニ要用ナリトセス故ニ之カ辯明ヲ省ク

第三條 全要領第三項ヲ審按スルニ本項ノ申立ハ上告者ノ權利ニ關係ナキ事柄ナルヲ以テ之ヲ上告ノ理由トスル事ヲ得ス

判決

右ノ筋合ナルニヨリ名古屋控訴裁判所ノ裁判ハ破毀スヘキ理由ナキ者也  
但上告入費ハ上告者ヨリ辨償ス

第六百十號

○共有山林地々券名義書換上告ノ判文 (明治十五年六月一日上告  
十五年十二月廿八日申渡)

愛知縣尾張國東春日井郡上末村  
落合嘉助外百四名總代兼同村平  
民落合善七落合幸三郎代官人  
東京府京橋區桶町二十二番地寄

上告人

留福井縣士族

中 嶋 又 五 郎

愛知縣尾張國東春日井郡上末村

三十七番地平民父落合小平治代

兼

被上告人

落 合 市 左 衛 門

共有山林地々券名義書換約定履行一件名古屋控訴裁判所裁判ヲ不當ナリトシ上告スル要領左ノ如シ

第一條

抑本訴ノ山林地タル一林共有ノ地所ナルヲ被告ハ當時本村ノ戸長タルニ乘シ地券受ノ際密カニ自己ノ名義ニ爲シタリシヲ其不正ノ所爲速ニ發見セシヨリ明治十二年九月中地券名義附換ノ訴ヲ起シタル處豈圖ンヤ被告ハ該山林地ノ内現反別四町七反五畝三步(舊反町五)ヲ被告カ分家ナル落合重左衛門ヘ賣却スヘキ内約ヲ結ヒタル趣申供シ退々對審ノ未被告モ既ニ其所爲ノ非ナルヲ悟リ甲第一號證ヲ原告等ヘ差入レ被告名義ノ分ハ勿論重左衛門ヘ賣却ノ分モ速ニ取戻シ一村共有ノ地券ニ改正スヘシトノ誓約ヲ爲シ且ツ甲第四號ノ解證願ヲ始審廳ヘ捧呈シテ一旦解訟ヲ爲シタリ然ルニ猶其約ヲ履行セサルヨリ本訴ノ訴ニ及ヒシ處被告ハ落合重左衛門ヘ賣却ノ分ハ取戻難行届旨答辯セシニ付無據其審理中甲第三號證ノ如ク近村戸長等ニ該山林地ヲ正實ニ評價セシヲ以テ之ヲ始審廳ヘ呈シ而

シテ原告等ハ甲第一號證ノ但書及甲第四號證ノ但書ニ基キ速ニ該地ヲ重左衛門ヨリ取戻シタル一村ノ共有ニ改正スル乎否ヲサレハ甲第三號評價書ノ如ク該地ノ相當代價ヲ辯償スル乎必其一ヲ執行スヘシトノ事

第二條

終審判文末段ニ「其共有者中ニ於テ爲シタル所爲ノ利害得失ハ其共有者中ニテ共ニ俱ニスヘキモノナレハ本訴ノ賠償ハ原告ニ於テ當時被告ヨリ落合重左衛門ヘ賣渡シタル山林地代價即金百五十圓ノ賠償ヲ得ルニ止ルモノトス」ト判決シタルハ太々不當ノ裁判ナリト思考ス抑終審廳カ本訴ノ損害金ハ被告カ躬カラ賣代金ト稱スル「百五十圓ノ賠償ヲ得ルニ止ル」トノ判決下シタル理由ハ「被告モ亦共有者ノ中ナレハ其共有者中ニ於テ爲シタル所爲ノ利害得失ハ其共有者中ノ俱ニスヘキモノナリ」ト云フノ一點ニ在レ凡ソ共有者中ノ爲シタル利害得失ハ共有者ノ共ニスヘキモノナリトノ理由ハ或共有者一般承諾ノ上爲サシメタル事實ニ對シ適用シ得ヘキモノナルモ本件ノ如キ一己私擅ニ爲シタル場合ニ於テハ毫モ適用シ得ヘカラサルノ理由ナリ抑本件ハ被告カ不正ノ所爲ヨリ一村ノ共有地ヲ密カニ其親戚中ヘ賣却セシモノナレハ被告カ義務タル甲第一號證ノ如ク該地ヲ取戻シテ一村ノ共有ニ復スル歟否ヲサレハ之カ相當代金ヲ賠償セサルヲ得サルハ論ヲ俟タサルノ理ナルヘシ何トナレハ不正ノ所爲ヨリ他人ヲ害シタルモ其損害ニ相當スル償ヲ爲サ、ルヲ得サルハ一般ノ條理ナレハナリ今ヤ上告人等ノ損失ニ係ル所ハ甲第三號證ノ如ク現反別四町七反五畝三步ノ山林地ニシテ其現價七百四十三圓四十七錢五厘ナレハ現



ニ被告ノ爲メ受ケタル損害ハ即チ金七百四十三圓四十七錢五厘ナリトス然ルニ終審廳カ  
 百五十圓ノ賠償ヲ得ルニ止ルモノトナセシハ果シテ何事ヤ百五十圓ハ被告ノ申供ニシテ  
 素ヨリ信スルニ足ラサレモ假リニ之ヲ信實ナリトスルモ密カニ親戚間ヘ賣渡シタル代金  
 ニシテ現ニ被告カ掌握スル所ノ金額ナリ左スレハ百五十圓ヲ出サシムルハ唯ダ被告カ掌  
 裏ニ在チ放タシムルニ過キサルノミ焉ソ之ヲ以テ失フタル山林地七反五畝三步ノ賠償ト  
 云チ得ン尤甲第三號證タル隣村戸長等ノ正實ナル評價書ニテ將來得ラルヘキ利益ヲ計リ  
 タルニ非ス唯ダ現ニ今日賣買シ得ラルヘキ相當ノ代價ヲ評價セシモノナレハ若シモ被告  
 カ正實ニ賣却シタランニハ必スヤ甲第三號證ノ金額ニ滿ツルヲ得ヘキナリ然レハ甲第三  
 號證ノ代金ハ日下直接ノ損害ナルニ付該金額ヲ賠償スルハ固ヨリ當然ノコナリ豈被告モ  
 共有者ノ一人ナリシトテ彼レカ不正ノ所爲ヨリ生シタル損害ニテモ猶俱ニセサルヲ得サ  
 ルヘシトノ條理アルヘケンヤ之レ終審廳カ判決ノ不當ナル所以ナリトノ事  
 被告上告者ハ上告ノ不當ナルコトヲ論辯セリ因テ辯明并判決ヲ與フルコト左ノ如シ

辯明

上告要領ノ旨趣ヲ審按スルニ若シ茲ニ一箇ノ共有物アラシニ其共有ノ一人タル者他ノ共  
 有物者ノ承諾ヲ經テ該共有物件ニ對シ爲シタル行爲ヨリ生スル利害得失ハ固ヨリ其共有  
 者中ニテ之ヲ共ニ俱ニスヘキ筋合ナリト雖モ元來上告者ハ被告上告者カ本訴地所ヲ落合重  
 左衛門ヘ賣渡シタルハ私擅ノ所爲ナリト申立ルモノナルニ付果シテ原裁判所ニ於テ上告者  
 ハ賠償ヲ得ヘキモノナリトセハ先之ニ右申立ニ反對スル理由ヲ擧テ其私擅ノ所爲ニ非サ

ルヲ判定シタルノ後ニアラサルヨリハ未ダ前上ノ理由ヲ掲ケ出シテ本訴賠償額ノ多寡ヲ  
 判定スルコトヲ得サルモノトス然ルニ原裁判所ハ右上告者ノ申立ニ對シテハ何等ノ判決ヲ  
 モ下サス遽ニ「其共有者中ニテ共ニ俱ニスヘキモノナレハ」云々ノ理由ヲ以テ上告者カ得  
 ヘキ賠償ノ多寡ヲ判定シタルハ不當ナリトス

判決

右辯明ノ如クナルヲ以テ名古屋控訴裁判所ノ裁判ヲ破毀シ東京控訴裁判所ニ移スニヨリ更  
 ニ同裁判所ノ裁判ヲ受ク可シ  
 但シ上告入費ハ被告上告者ニ於テ支辨スヘシ

第六百一十一號

○貸金催促上告ノ判文(明治十五年七月十五日上告  
 十五年十二月廿八日申渡)

廣島縣安藝國廣島區下流川町八  
 百五十五番邸士族

水野 野 野 野

東京府芝區田村町十九番地寄留

廣島縣平民

堀田 正 人

廣島縣安藝國廣島區幟町五百十

六番邸士族松野國樹後見人同區

小町千六十四番邸士族

被上告者

津田保之介

同縣同國同區幟町五百九十番邸士族

右代理人

辻信之介

上告ノ要領

第一 原裁判所ハ上告人ト同居セシ北川祖八郎カ上告人ノ家事ヲ世話セシ時ニ於テ成立シタル貸借ハ假令本人ハ知ラスト雖モ債主ニ抗抵スル權ナシト斷言セズレタリ抑モ何チ以テ此言ヲ發スルチ得ルカ原被兩造カ原裁判所ニ呈供シタル書類ヲ閱スルニ一モ事務管理ヲ委テタル事ノ證據ナシ凡ソ他人ノ家事ヲ世話スルモノハ本人ニ代リテ權利義務ヲ約スルチ得ルカ決シテ然ルモノニアラスト之レチ爲サント欲セハ必ス公正ノ手續ヲ履ミ然ル後初メテ之レチ爲スノ資格ヲ備フル者ニシテ止テ想像チ以テ定ムヘキモノナラズ然ルニ原裁判所ハ一ノ據ルヘキ證據モナク單ニ世話セシキニ於テ成立シタルト云モ亦其世話シタル證據ナクシテ被上告第一號證チ有効ナリト裁決セシハ不當ナリ

第二 凡ソ抵當典物ト爲スニ區戶長ノ奧印ヲ要スルハ二重ノ抵當典物ニアラサルチ保スル爲メカ將タ義務ノ違ヒナキチ保スル爲メカ決シテ義務ノ保證ニアラストシテ二重抵當ニアラサルチ保證スルモノナリ然則詐欺等ノ不正ニ成立シタル契約ノ證書ニ戶長奧印ノミ適正ナルカ爲メニ其契約ノ成立ヲ適正ナリト爲ス可ラス夫レ方式ハ其成立モ適正ニセストハ法律ノ格言ナリ然ルニ原裁判所ハ偽證タルコトハ不問ニ付シ單ニ公正ノ證書ナル故チ以テ之レカ償却ノ義務ニ伏從セサルチ得ス而シテ上告人ハ北川祖八郎ニ要償チ得ヘキモノ、如クセラレシハ不當ノ裁判ナリ

第三 又上告第一號乃至第四號證ハ上告人ト北川祖八郎トニ而已關係スルノミニシテ權利者ニ對スルノ反證トスルニ足ラスト判決セラレタリト雖モ第一號證ハ北川祖八郎ノ依頼ニ依リテ堀部善太郎カ上告者ノ實印チ彫刻シタル證ナリ故ニ順チ以テ之レチ言ヘハ裁判官ハ此事チ告發シテ相當ノ刑ニ處セシムルチ以テ至當トス抑モ上告者ハ始審ノ場合其實印ノ恰モ相似タルノ故ニ錯誤ノ申立アレハコソ更ニ控訴シタルナレハ此事ニ就テハ細カニ審問セラレヘキナリ又第二號證ハ亡北川祖八郎カ自筆ニ係ル勘定帳ナリ而シテ之レニ依レハ祖八郎カ擅ニ上告者ノ名チ以テ借用シタル金額チ自己ノ爲メニ費消シタルコト明瞭ナリ又第三號證ハ被上告人カ直接ニ上告人ト取引セシト云フチ駁スル爲メニ示シタル公正ノ證書ナリ又第四號證ハ第一號ト同一ノ効力アルモノナリ以上ノ諸證ハ上告人ノ義務ニアラストシテ北川祖八郎ノ一己ノ負債ナルチ證明スルニ足ルモノトス然ルニ之レチ足ラストスルハ物ニ相當スル證據法チ知ラサルモノナリ全體裁判官ハ被上告人カ所持スル證書ハ偽造ニアラスト認メタルモノカ將タ偽造物ナルモ公正ノ證書ナルト世話人タル證人ノ實ナル故ニ權利者ニ對抗スル能ハサルトセシモノナルカ其偽造證ニアラスト云フ辯明チ附セスシテ單ニ世話人云々ノ文チ以テ之チ視レハ其證書チ如何ニ認メテ判決セラレタルチ知ラス上告第一號乃至第四號證ハ何故チ以テ採用

セサルヤ又何ヲ以テ原告ト北川祖八郎トノミ關係セシモノナルヤ其然ル所以ノ理由  
ヲ付セサルハ不當ノ裁判ナリ

第四 上告人ノ如キハ士族ニシテ假令婦人ナリト雖モ戸主ノ身分ニシテ姓名自署スル  
ヲ知レリ然ルニ本證ハ本人ノ直筆ニアラス故ニ控訴狀ニ委シク請求シタルヲ以テ尤モ  
注意シテ調ヘサルヲ得ス現在上告人第一號證ノ如キハ最モ被上告第一號證ニ影響スル  
ト看破セサルヲ得ス又其實印ノ如キハ一步ヲ讓リテ上告人ノ印ニ違ヒナシト假定スル  
モ同居人ノ事ナレハ盜奪スルハ易キモノナリ又明治十年第五十號ノ法律ニ背キ直筆ニ  
モアラス又代書人ノ署名モナキ以上ハ果シテ誰人カ造リシモノカ之ヲ知ルニ道ナキナ  
リ夫レ如斯曖昧ナル證書ニシテ而カモ他ニ其義務アルコトノ證據ナク且外ニ確乎據ル可  
キ事ナキニ單ニ證書ヲ而已テ上告人ニ義務アリトハ解スルコトアタハサルナリ然ル  
ニ原裁判所ハ如斯無効ノ證書ヲ採用スルニ其理由ヲ附セサルハ不當ノ裁判ナリトノ  
事

被上告者ハ却テ上告ヲ不當ナリトシ以テ原裁判ヲ辯護シタリ  
判決

凡ソ契約ハ本人ノ承諾アルヲ要ス故ニ假令同居人ニシテ傍ラ其家計上ニ關涉スルカ如キ景  
狀アリト雖モ他人ト契約ヲ爲スニ方テハ必ズ本人ノ承諾ナカル可カラズ否ラサレハ同居  
ト其家計上ニ關涉スルトノ故而已ナリ以テ其名義ヲ假冒シテ他人ト契約ナスモ其契約ノ効力  
ナキモノトス

抑モ本訴ノ一案ヲ斷了スルハ被上告第一號即チ明治十二年三月二十六日附テ以被上告者へ  
差入レ之レアル借用(金二)證ハ果ソ上告者ノ承諾上ニ成立タルモノナルヤ將タ上告者カ抗  
拒スル如ク全ク其同居人北川祖八郎ノ所爲ニ係リ本人ノ知ラサル處ナルヤ否チ裁判スルチ  
以テ緊要トス然ルニ上告第一號并ニ其第四號證ニ憑ルキハ堀部善太郎カ北川祖八郎ノ依頼  
ニ依リ上告者ノ印章ヲ彫刻シタリト證言シ又其第二號證ヲ閱スレハ被上告ヨリ借得タル金  
額ハ悉ク祖八郎カ自己ノ爲メ費消シタルモノ、如シ又其第三號證ニ依據スレハ貸借ノ當時  
上告本人カ其授受ノ場合ニ關カラサリシ情況アリ故ニ此數證ノ事實ニ疑ヒナキニ於テハ被  
上告第一號證ニ對シ上告者其義務ニ從フノ責任ナキモノトス然ルニ原裁判所ハ上告第一號  
乃至第四號證ヲ以テ到底上告者ト北川祖八郎トニ關係セシモノニシテ北川祖八郎カ曾テ上  
告者ノ家事ヲ世話セシ時ニ於テ成立シ者ナレハ被上告第一號證ニ影響ナキモノト裁判ヲ與  
ヘタルハ不法ノ裁判ナリ  
右ノ理由ナルヲ以テ原裁判ヲ破毀シ更ニ大阪控訴裁判所へ移スニヨリ其裁判ヲ可受者也  
但上告入費ハ被上告ヨリ辨償スヘシ

第六百十二號

○約定履行上告ノ判文(明治十五年七月廿二日上告  
十五年十二月廿八日申渡)

大阪府北區常安町五番地松竹新

兵衛方寄留愛媛縣伊豫國温泉郡

松山御寶町十六番地士族

上告人

關 家 實 敬

三五六

大坂府攝津國東成郡蒲生村平民  
秋田伊兵衛代言人

東京府京橋區日吉町二十番地寄  
留大坂府士族

被上告人

藤 卷 正 太

約定履行之件大坂控訴裁判所ノ裁判ヲ不當ナリトシ上告スル要領左ノ如シ

第一條

原判文ニ「抑モ該契約ノ成立ヲ如何ニ推究スルニ當時原告家ニ於テハ屢盜難ニ罹リ恐怖  
狼狽ノ際ニ膺リ道理ニ適セサル過當ノ約ヲ爲セシモノト推知スルヲ得ヘシ云々ト判決セ  
ラレタレトモ原裁判所ハ何チ以テ過當ノ契約ト云カ毫モ過當ノ契約トノ證據ナキノミナラ  
ズ却テ上告者ニ於テハ上告第八號乃至第十六號證ノ如ク榮譽アル官職ヲ辭退シ其レカ爲  
メ今日ニアリテハ上告者家舉ツテ飢餓凍餒スルノ厄難ニ陥リ居ルニ非ラスヤ然ルチ原裁  
判所ハ過當ノ契約云々ト裁判セラレタルハ不法ノ裁判ナリトノ事

第二條

原判文ヲ熟閱スルニ原裁判所ニテ原被兩造カ互ニ證據書類ヲ以テ辯難抗擊セシ箇條即チ  
契約ノ過當ナルヤ否ヤ又タ上告者カ明治十四年九月發病セシチ以テ大阪府立病院ノ治療  
ヲ受ケタル疾病ハ輕症ナルヤ重症ナルヤノ爭點ヲ度外視シ更ニ判文ヲ與ヘス却テ原被兩  
造カ未ダ曾テ爭ハサル明治五年第二百九十五號公布ニ抵觸スヘキ契約トナシ且判文ニ  
「原被兩造ニアツテ他ニ正當ノ緣故アルニ非ラサレハ被告ノ一生涯ヲ引受ルノ理アルヘ  
カラス仍テ本訴ノ如キハ被告カ勞力ト原告カ給料ト交換ノ主義ニ過キスト認メサルヲ得  
サレハ世間普通ノ雇人ト看做スヘキナリ然レハ乃尋常雇人ノ契約ハ明治五年第二百九十  
五號公布ニ依リ一ケ年季タルヘキノ成規ニ抵觸スル者ナレハ云々」ト論シ原被正意ヲ以  
テ取結ヒタル原被第一號證ハ滿一ケ年季ヲ超過スレハ其効力ナキト云フ判決ヲ與ヘラレ  
タルハ法律ヲ誤認シタル裁判ナリトス其故如何ノトナレハ既ニ普通ノ雇人アルコトハ原裁  
判ヲ認ムル所ナリ左スレハ之レニ反スル殊別ノ雇人アルコトハ又以テ認ムル所ナラン而シ  
テ殊別ナル雇人トハ外國人雇人ノ如キ是ナリ然ルチ原裁判所ハ勞力ト給料交換主義ハ普  
通ノ雇人ト判文ヲ與ヘタルハ不法ノ裁判ナリトノ事

第三條

抑モ明治五年十月二日ニ布カレタル第二百九十五號布告ノ精神タルヤ該明文即チ「人身  
ヲ賣買イタシ終身又ハ身期ヲ限リ其主人ノ存意ニマカセ虐使致シ候ハ人倫ニ背キ有マシ  
キ事ニ付古來制禁ノ處從來年季奉公等種々ノ名目ヲ以テ奉公住爲致其實賣買同様ノ所業  
ニ至テ以テ外ノ事ニ付自今可爲嚴禁事トアル如ク表面ハ雇人ノ如クニシテ其實賣買同  
様ノ所業ヲナシ其レカ爲メ雇人タル者主人ノ存意ニ任セ虐使シ人倫ニ背クノ惡習アルヨ  
リ之レチ匡正センカ爲メ布カレタル公布ニシテ即チ雇人タル者ヲ保護シ且ツ惡習ヲ除却  
スルノ布告ナリトス果シテ該公布ノ精神爰ニ在リトセハ何ソ該公布ヲ以テ本訴ノ契約ヲ

三五七

論スルヲ得ンヤ決シテ得ヘカヲサレナリ尙且ツ原被告第一號證ノ精神タルヤ上告者カ官途ニアルヲ被上告カ強テ辭退セシメ且ツ被上告ノ危難ヲ防禦スル大任ヲ負フ身體ナレハ萬一ノ不幸ニ際會シ強盜等ノ爲メ身命ヲ棄ツルヤモ難計左スレハ妻子眷屬ヲ保養スルヲ能ハサルヲ以テ若シ奸賊ノ爲メ身命ニ危害ヲ及ボスヲアラス自分及ヒ妻子等ヲ引受ケ不自由ハ掛ケサルトノ主趣ナレハ上告者ニ不行狀等アルニ非ラサレハ上告者ヨリ該契約ヲ解除スルヲ許サ、ルヲハ結約シタルモノナリ夫レ此ノ大事故アルカ故ニ上告者ヨリハ何時ニテモ上告者第一號證ノ契約ヲ解除スルヲ得ルモ被上告者ヨリハ解除スルヲ得サルヲ決約シタル者ナリトス其明證ハ原被告各第一號證ニ就テ視ルモ明カナリ左スレハ明治五年第二百九十五號公布ノ精神ト全ク反對ノ點ニアル契約ナレハ該公布ニ秋毫モ抵觸スルヲナキモノナリ

右辯陳スル如ク原被告第一號證カ何ヲ以テ主人ノ存意ニ任セ雇人ヲ虐使スル契約ト云フカ何ヲ以テ又タ原被告各第一號證ノ契約カ人身賣買同様ノ所業ト云フカ又タ何ヲ以テ原被告各第一號證ノ契約カ人倫ニ背クト云フカ此三ヶ條ニ抵觸セサル限リハ秋毫モ明治五年第二百九十五號公布ニ抵觸スル者トナスヲ得ストノ事

被上告答辯要領

第一條

抑本件大阪控訴裁判所ニ於テ與ヘテレタル裁判ノ當否ヲ審糾スルニハ左ノ二項ヲ緊要ト思考ス

第一 上告者ニ怠惰不行狀アリタルヤ否ノ事

第二 上告者ハ被上告者ノ雇人ナルヤ否且明治五年第二百九十五號ノ法律ニ抵觸セシヤ否ノ事

右ノ二點ヲ審糾スルルキハ大阪控訴裁判所ノ裁判ハ適法ノ裁判タルヲ明瞭ト思考スルトノ事

第二條

上告者ハ被上告者ノ雇人ナレハ從テ被上告者一家族中ノ一人ニ過キサルヘシ然レハ家族タル身分ハ其家ノ長者(戶主)即チ被上告者ノ指揮ニ從フヘキハ道義上免ルヲ得サルヘシ然ルニ上告者ハ之ニ反シ昨十四年九月擅ニ被上告者ノ家ヲ出テ被上告第二號證ヲ差越シ爾后何等ノ照會モナク三週間餘モ歸宅セズ故ニ被上告者ハ上告第二號證ヲ遣シ一ト先解雇ノ儀ヲ照會ニ及タル次第ナリ夫レ如斯理由ナレハ兩造ノ責何レニ在ルヤ辯チ俟タスシテ甚著明ナレハ被上告者ハ其第一號證ニ據テ不行狀ノ上告者ノ雇人ヲ解カントスル所以ナリ而レモ上告者ハ當時疾病治療ノ爲ニ勤務ヲ欠キタル者ニテ正當ノ理由ニヨツテナリト申立ルモ抑モ疾病ニモ輕重難易ノ別アリ當時上告者ノ疾病ハ被上告第四號證ノ如胃加答兒證ニシテ其治療法ハ被上告第五號證ノ如可及運動ヲナスヲ第一ノ治法トスルモノナリ殊ニ上告者ハ病院へ通院療養ナシタルモノナレハ是等ノ輕症ヲ口實トナシ被上告家ノ警備ヲ欠ク正當ノ理由トスルニ足ラサルモノトス加フルニ當時被上告者モ疾病ニ罹リ大坂ヨリ名醫ヲ迎ヘ度々來診ヲ乞フ際ナレハ上告者モトモニ居宅療養ヲナシテ然ルヘキモノ

ナルニ上文ニモ陳ル如ク道義ニ及シ擅ニ家出チナシ被上告者ノ警備チ欠キタルヨリ被上告者ハ遂ニ第三號證ノ如キ盜難ニ罹レリ是將タ誰ノ過ナソヤ上告者ノ不行狀ヨリ醸生セシ厄難ト云ヘシ又上告狀第四條ニ於テ兩造ノ第一號證契約ハ上告者ヨリハ何時コテモ解除スルヲ得ルモ被上告者ヨリハ解除スルヲ得サル云々申立ルト雖モ抑本件兩造第一號證ノ契約ハ如何ナル性質ニヨリ成立タル契約ナルヤ上告者ハ勞力ヲ盡スノ義務アリ被上告者ハ金ヲ拂フノ義務アリ然レハ該契約ハ雙務ノ契約ト云ハスシテ何ソヤ如斯雙務ノ契約ニシテ一方(上告者)ハ擅ニ之レヲ解除スルヲ得一方(被上告者)ハ之ヲ解除スルヲ得ス或ハ一方(上告者)ハ義務ヲ盡サスシテ權利ヲ得一方(被上告者)ハ權利ヲ得スシテ義務ヲ盡ス等ノ事ハ法理上決シテアルヘキモノニ非ラズ若之アラハ雙務ノ契約ニ非シテ片務ノ契約ナリトス依テ上告者ニ於テ之ヲ解除スルヲ得ヘキモノナレハ被上告者ニ於テ之ヲ解除スルヲ得レハ理ノ最モ親易キ所ナリ故ニ原裁判所ニ於テハ前案本訴ノ如キハ被告カ勞力ト原告カ給料ト交換ノ主義ニ過キスト認メサルヲ得サレハ)云々ト判定セラレタルハ法理ニ適シタル至當ノ裁判ナリト思考ストノ事

第三條

上告者ノ雇人ナルコトハ被上告第二號證ニ(拙者ヲ御雇入レ相成)云々トアルノミナラス原裁判所ヘ捧呈セシ書類ニ徵スルモ雇人ナルコトハ兩造ノ供狀符合スル所ナレハ敢ヘテ贅辯ヲ俟タス而テ原裁判所カ勞力ト給料ト交換ノ主義ニ過サレハ世間普通ノ雇人ト看做スルキナリト判定セラレタルヲ不法ナリトシ喋々申立ルモ決シテ該裁判ハ不法ノ判定ニアラス

如何トナレハ上告者カ勞力ト被上告者カ給料ト交換ノ主義ヨリ兩造第一號證ノ成立タルハ該兩證ニ照シ甚タ明コシテ上告者ハ被上告者ノ雇人タルコト愈以明確ナリトス然リ而テ原裁判所カ上告者ヲ目シテ尋常ノ雇人ト判セラレタルハ明治五年第二百九十五號ノ公布第三項ニ「平常ノ奉公人ハ一ケ年タルヘシ尤奉公取續候者ハ證文可相改事」トアル雇人ヲ指點セラレタルモノコテ殊別ノ雇人アルコトハ同應ニ於テモ該公布第二項ニ「農工商ノ諸業習熟ノ爲メ弟子奉公爲致候儀ハ勝手ニ候得共年限滿七年ニ過クヘカラサル事」トアル雇人ノアルコトヲ認メラレタルカ故ニ同公布第三項ノ雇人ヲ尋常人ト判セラレタル所以ナリ又原裁判所カ該公布ニ抵觸スルモノト判定セラレタルハ決テ上告者ノ申立ル如同公布第一項ニ抵觸セシモノト判セラレタルモノニアラスノ同第三項ノ成規(即一ケ年)ニ抵觸セシモノト判定セラレタルモノナリ且ツ又被上告第一號證中ニ怠惰或ハ不行狀等ニシテ被上告者ニシテ警備シ又ハ安堵セシムルコト能ハサル場合ニ際シテハ該約ヲ解除スルヲ得ヘキモノナリ而シテ其怠惰不行狀ヲ證スルモノハ第二號乃至第五號證ノアル在ツテ既ニ明ナリト雖モ私約ト公法ト俱ニ目的ヲ同スル場合ニ於テハ一ノ公法ニノミ依據スレハ自然私約ノ趣意モ之カ胚胎スルモノナリ夫レ如斯ナレハ何レノ點ヨリ論スルモ雇人タル上告者ヲ解雇スルヲ得ヘキハ公法及私約等ニ於テ被上告者カ充分爲スヲ得ヘキモノナリト雖モ苟モ此法律ノ在ル限リハ此法律ニ據リ判定ヲ附セラレタルハ當然ノ事ニシテ原裁判所ハ「尋常雇人ノ契約ハ明治五年第二百九十五號公布ニ據リ一ケ年季タルヘキノ成規ニ抵觸セシモノナレハ該約ノ効ハ十三年十月ヨリ十四年十月限リナリトス爾後更ニ一ケ年

間繼續スルノ約ヲ爲スニアラサレハ云々」ト裁判セラレタルハ最モ適法ノ裁判ナリトス  
トノ事

判決

本案ハ左ノ三項ヲ審明スルヲ緊要ナリトス

第一 上告第一號被上告第一號證書ノ契約ハ被上告者カ屢盜難ニ罹リ恐怖狼狽ノ際成立タルモノニシテ道理ニ適セサル過當ノ契約ト推知シ得ヘキヤ否ノ事

第二 上告者ハ被上告者ノ尋常雇人ニシテ明治五年第二百九十五號公布ヲ以テ論スヘキモノナリヤ否ノ事

第三 上告者ハ被上告者ニ對シ該契約ヲ除セラルヘキ不行狀アリタリヤ否ハ本案ニ審理ヲ要スルニ及ハサルモノナリヤ否ノ事

第一 上告第一號證書ノ成立ハ明治十三年十月中ニシテ實際上告者ノ被上告者ノ警備ニ從事シタルハ明治十一年中ナリトス而テ其後該契約ノ成立タル時ハ別段盜難ニ遇フタリトノ形跡モナケレハ恐怖狼狽スルノ謂レナク從テ道理ニ適セサル過當ノ契約ヲナスヘキ事由アルヲ觀ス然ルヲ原裁判所ハ其事實ヲ審カニセスシテ漫ニ道理ニ適セサル過當ノ契約ト推知シ得ヘシ云々ト申渡シタルハ理由ナキ推知ノ裁判ナリトス

第二 上告者ハ元來被上告者ノ生命財産ノ保護ノ爲メ警備者トナリシ者ナレハ上告者ハ被上告者ノ爲メコトハ其身體生命ヲ棄損スルカ如キコトアルヤモ亦測ルヘカラサレハ從テ被上告者カ之ニ對スルノ義務モ亦重大ナラサルヘカラスコレ上告第一號證書ノ成立ヲタル所

以ニシテ尋常普通ノ雇奉公人ノ契約トハ全ク其性質ヲ異ニスルモノトス然ルヲ原裁判所ハ該契約ヲ以テ尋常普通ノ雇奉公人ノ契約ト同視シ明治五年第二百九十五號公布ニ抵觸スルモノト爲シ該證書ノ契約取消ヲ命シタルハ法律ノ適用ヲ誤リタル不法ノ裁判ナリトス

第三 抑モ本訴ハ約定履行ノ訴件ニシテ即チ上告者ハ上告第一號證書ノ契約履行ヲ要メ被上告者ハ上告者ニ不行狀不行狀アリトナシ被上告第一號證書ニ依リ該契約ヲ解除セントスルモノナレハ此場合ニ於テ果シテ上告者ハ被上告者ニ該契約ヲ解除セラルヘキ不行狀不行狀アリタルヤ否ヲ審理究明スルヲ本案ノ要點ナリトス然ルニ原裁判所ハ此ノ要點ヲ欠テ審理ヲ盡サハリシハ不法ノ裁判ナリトス

右ノ筋合ナルニ付明治十五年七月四日大阪控訴裁判所カ本訴ニ對シ中渡シタル終決裁判ヲ破毀シ更ニ東京控訴裁判所ニ移スニ依リ同裁判所ノ裁判ヲ受クヘキモノ也  
但シ上告ニ關スル入費ハ被上告者ノ負擔タルヘシ

第六百十三號

○地券臺帳及順記名簿上告ノ判文(明治十五年八月二十四日上告)  
全十五年十二月廿八日申渡

福井縣越前國大野郡勝山元錄町  
士族神靜江後見人同縣同國足羽  
郡寶永上町埜坂良輔代官人  
東京府京橋區南新堀一丁目十一

番地士族

上告人

桑 島 加 全

福井縣越前國大野郡深谷村平民

平野九郎兵衛相續人

被上告人

平 野 甚 兵 衛

地券臺帳及ヒ順記名簿引直訴訟大坂控訴裁判所ノ裁判ヲ不法ナリトシ上告スル要領左ノ如シ

凡裁判ノ効權ハ其指的シタル以外ニ支配スルノ理ナケレハ無論本件ノ如キモ曩ノ却下裁判ヲシテ今回ノ訴訟ニ其範圍ノ及フ可ラサルナリ何トナレハ明治八年十月十五日ヲ以テ言渡ヲ受ケタル敦賀縣廳ノ裁判ヲ玩味セハ判然ナレハナリ抑モ該却下裁判ハ上告第一二號證ニ於ケル論地ヲシテ實能カ私金ヲ以テ之ヲ買得セシモノトモ又上告人靜江カ讓與ヲ受ケタルモノトモ見ルヘキニ足ラサレハ該二證據ニ據テ以テ地券ヲ催促スルノ權利ナシト云フニ外ナラサルナリ否裁判ノ範圍主意ハ爰ニ止マルモノニシテ當時上告第三號證ニ裁判ヲ受ケタルコトナケレハ其範圍モ又該三號證ニ及スヘキノ道理ナキハ著明ナリトス然ラハ曩キニ確定シタル裁判ハ本訴ト異ナルモノニシテ法律上是レ之ヲ別件ト申スヘキノリ故ニ本件ハ則チ當度ノ初告訴訟ニシテ毫モ再訴ニアラサレハ決シテ曩ノ確定裁判ニ抵觸スルモノニ非ス然シテ上告人ハ論地ヲ所有スルノ權アルコトハ第三號證ノ如ク連綿讓與ヲ受ケアルヲ以テ明瞭タリ然ラハ初終審裁判ハ上告人ノ精求ヲ受理シ本按ノ裁判ヲナス

ヘキモノナリ然ルニ大坂控訴裁判所ガ前裁判ノ範圍ヲ誤リ從テ普通ノ初告ヲ再訴ト看做シ終ニ却下ノ裁判ヲ爲シタルハ不法ノ裁判ナリトノ事

依テ辯明并判決ヲ與フル左ノ如シ

辯明

上告要領ヲ審按スルニ上告者ハ向キニ敦賀縣廳ノ裁判ハ上告第一二號證ニ對スルモノニシテ未タ其第三號證ニ向テハ何等ノ裁判モ請ケタルコトナケレハ更ニ該訴ヲ起スノ權アリト申立ルト雖モ凡ソ裁判ハ其訴件ニ對シ與フルモノナレハ其第三號證ニ對シタル裁判ヲ受ケサルトモ其事件ノ裁判已ニ確定セシ上ハ證據物ノ異同ヲ問ハス全ク同一ノ事件ナリトス因テ更ニ出訴スヘキノ權ヲキモノトス

判決

右辯明ノ如クナルヲ以テ大坂控訴裁判所ノ裁判ハ破毀スヘキ理由ナキモノナリ第六百十四號

○山地境界譯立上告ノ判文(明治十四年十二月廿四日上告)

全 十五年十二月廿八日申渡

大坂府和泉國南郡三田村人民總

代同村戶長

上告人

和 田 市 三 郎

東京府京橋區竹川町十二番地寄

留大坂府士族



右代言人

藤 卷 正 太

被上告人

大坂府和泉國和泉郡唐國村人民  
總代戸長同村三十三番地平民

岡 彦 太 郎

被上告人

同府同國同郡内田村人民總代

河 野 久 米 太 郎

東京府麴町區有樂町一丁目五番  
地寄留兵庫縣士族

代言人

白 井 政 夫

山地境界譯立ノ詞訟大坂上等裁判所ノ裁判ヲ不當ナリトスル上告ノ要領左ノ如シ

第一條

凡土地ノ所屬又ハ所有ヲ證スルニハ往時ハ檢地帳現時ハ地券證ニ若クモノナシ上告村ハ此ニ個ノ證左ヲ併有スレハ該山地ハ上告村ノ所屬ナルハ著明ナラスヤ或ハ難シテ日被上告村モ亦此二個ノ證左ヲ有スレハ原裁判所ニ於テ「原告村ノ字東山ノ内ナルヤ又ハ被告村ノ字名古山ノ内ナルヤヲ知ルニ由ナキ云々」セシハ至當ナリト然レモ其被上告第一二號證檢地帳ハ反別ヲ記載ナキ茫漠ナルモノナレハ其名古山ト稱スル山ハ半畝歩ニ過キサル狭小ノ山地ナルヤモ知ルヘカラス果ソ半畝歩ニ過キサル山地ナリセハ本訴數町歩ニ跨カル論所カ字名古山ノ部分ナリト言フヲ得サルハ勿論ナリ又其名古山ヲシテ數十町歩

ノ山地ナリトセシカ被上告村何ノ方位ニアル山地ナルヤ知ルヘカラスナルミナラス被上告村ハ四隣皆山ヲ以テ圍ミ山地所屬ノ多キ村方ナレハ字名古山トアルハ何ツレノ山ニ當ルヤモ知ルヘカラスナルナリ

又其地券證ノ如キ反別ハ掲記アルモ畢竟被上告ノ恣意ニ出テタルモノニテ其何ノ處ヨリ何ノ處迄ヲ丈量シタルモノナルヤヲ知ルニ由ナキ而已ナラス其反別ノ依テ起リシ證左アルニアラス加ルニ「立木有之」ノ四字ヲ確明ニ記載アリ總テ地券ニ立木有之ト登載スルハ杉檜等森立スル山地ヲ言フ意義ニシテ本訴山地ハ多ク無木ナレハ林場即チ草山

上告第一號ト書載スヘキナリ（偶々松樹ノ生茂スルアルモ畢竟和田市二郎ノ所有ナル字順禮塚ト稱スル一小部分ニ過キス）斯ク被上告者ノ地券ハ事實ニ背馳スレハ本訴ノ論山ニ下附セラレタル地券ト看認ルニ由ナク之ニ反シ上告第一號證檢地帳ハ其反別ヲ明記アリテ上告村領字東山ト唱フル山地（現時開墾畑地ニ相成居ル分アリ又本訴論山モ固ヨリ其部分ナリ）チ丈量セハ該檢地帳ニ記シアル反別ニ適合ス（小差アルモ大違ナシ而カモ該帳ニ記シアル反別ニ不足ヲ生ス蓋シ丈量細ノ伸縮ニ依ルカ或ハ知ラス識ラス他村領ニ混入シタルナラン）之レ該檢地帳ノ確實ナル適證ニシ

テ地券證ニ掲記ノ反別ハ該帳ヨリ出タルモノナリ加之該山ノ地位上告村ノ東方ニ當ルチ以東山ノ名稱アリ（上告村カ山地ノ字ハ其村ノ方位ヲ以テ定ム）斯ク名實適合スル檢地帳及地券證ト其被上告村カ提出スル茫漠據ル處ナキ檢地帳及地券證トハ其効權如何ソヤ苟クモ眼ヲ具ル者ハ一目シテ被上告村ノ檢地帳及地券證ハ本訴ニ適切ナル證據物ニアラサルヲ知ル可シ然ルテ原裁判所ハ彼我ノ兩證同一ナルモノ、如ク斷定セラレシハ不法ナリ

又其判文中〔其段別ヲ載記セサルモ該帳ハ當時ノ檢地總奉行カ連署シタル公正ノ帳簿ナレハ之ヲ無効ナリト云テ得ス〕トセラレタレハ上告者ハ固ヨリ被上告村ノ檢地帳ヲシテ無効ナリ廢紙ナリト辯シタルニ非スシテ唯其本訴山地ハ該檢地帳中宇名古山ノ部分ナリト證明スルノ力ナシト云セシノミナリシ然ルチ原裁判所ハ上告者カ該檢地帳ヲ無効廢紙ナリト辯明セシ如ク誤解シ却テ上告者カ該帳ハ本訴ノ爭論ニ就キ適切ノ證ニアラストノ説ニ對シ一言ノ辯明ヲモ附セラレサリシハ聽斷ノ定規ニ乖キタル判決ナリ

第二條

原判文第二項ヲ約言セハ上告第二號證ハ解除スヘキ未必ノ條件ナレハ今日ハ無効ナリト言フニ過キサレトモ文辭ニ拘泥セラレタルモノニシテ其契約セシ意思并ニ其未必ニ係ル文辭ヲ特ニ記シタル精神ヲ考究セラレサル判旨ナレハ明治十年十月司法省丁第七十五號ノ法律ニ反シタル裁判ナリ

附上告第二號證契約ノ意思ニ就テハ原裁判所へ差出シタル明治十四年七月二十五日付追伸書第二章第二項及第三章第四項ニ辯述シタリ該書御參觀ヲ乞フ

追伸書拔萃

第二章第二項 原告第二三號證ハ論山ノ麓ニ被告村カ水利權ヲ占有スル溜池アリ該池ニ土沙ノ流込ヲ防遏スル爲メ該山へ土沙留ヲ築設スル際被告村ヨリ年々餘内米五升ツ、チ原告へ可相拂契約ヲ爲シタルモノナリ是ノ事迹ニ徵スルモ又該證文中三田村ヨリ一切差構無之候或ハ唐國村ヨリ三田村へ申談候トアルニ付テモ該山地ハ原告三田村ノ

所屬ナルチ以テ原告カ常ニ之レヲ支配スレハ被告村ニ於テ私擅ニ土砂留ヲモ築設スル能ハサリシチ推知スルニ足レリ若然ラスシテ該山地悉ク被告村ノ所屬ナレハ焉ソ餘内米チ原告へ拂フノ契約ヲ爲シ又證文中前記ノ如キ文詞ヲ記入シテ原告村ノ干渉ヲ受クル道理アラシヤ以下畧

第三條 明治十五年四月二十四日追申

原判文第二項ニ於テ上告第二號證ノ契約ハ要スルニ解除スヘキ未必ノ條件ニシテ其未必ノ事物即チ本訴ノ如キ異議ノ生スルアレハ自然解除スヘキ契約ナレハ上告村ノ共有山ナリトノ證トナスチ得ス如斯第二號證ノ契約カ解除セラル、キハ從テ第三號證ノ契約モ無効ナリト云フ判旨ナレハ上告第二號證契約ノ主眼ハ該論山内ノ土砂留一件チ契約セシモノニシテ該證末文ニ萬一山地所ノ儀ニ付中分有之節ハ此度致對談 候趣ハ相互ニ取用不申トアル其取用不申トハ土砂留ノ約束ハ取用不申トノ趣意ニシテ該證チ一讀スレハ上告村ノ山地ナルコトハ瞭然タルヘシ今一歩チ退キ假リニ第二號證ハ判旨ノ如ク解除シタルヘキモノトスルモ之ヲ解除スヘキモノナレハ上告第三號證ノ契約ヲ爲ス際之ヲ解除シタルモノト云ハサルチ得ス何トナレハ前ノ契約ハ後ノ契約ニ據テ自然消滅スルノ法理アレハナリ果シテ然リトセハ上告第三號證ハ決シテ判旨ノ如キ無効ノモノト云チ得ヘカサレハ夫ノ第三號證ノ有効ナル言チ俟ダサルモノナリ而シテ該證ニ「地所境目ノ儀ハ不容易儀ニ付相互是迄仕來通り支配致」云々中畧〔唐國村ヨリ三田村へ申斷土砂留組立可申事〕トアルニ據テ視レハ無論該山ハ上告村ノ山地ナルコト分明ナルヘシ若又否ラストセハ

何カ故ニ被上告村カ該論山内へ土砂留ヲナスニ上告村へ相斷リ上告村ノ許諾ヲ受クヘキ  
ヤ是他ナシ上告村ノ山地ナレハナリ況ンヤ上告第二號證ハ上文ニモ陳フル如キ理由ニシ  
テ就中該證ニ記載アル餘内米五升ハ連年受領シ來リタルニ於テチヤ然ルニ原裁判所ハ是  
等ノ事蹟アルヲモ不省漫然兩證共ニ効ナキモノト判定セラレタルハ不當ナリ

第四條

原判文第三項ヲ約言セハ上告第七八號證ヲシテ無効ナリトセラレタルニ過キスト雖モ其  
第七號證ハ往昔隣村箕形村ヨリ上告村ニ差入タル古證ニシテ現ニ今尙其字「ニゴリ」池  
ノアルアリテ全村耕地ヲ涵溉スル養水溜池ナリ而ノ其堤タル本訴論山ノ北麓ニアレハ上  
告第七號證ニ差入レ往時該堤ヲ築設セシハ瞭々火ヲ見ルヨリモ明カナリモシ該山ハ被上  
告村ノ所屬ナリトセハ該證ハ被上告村へ差入ヘキ筈ナラスヤ然ルニ該證ニ上告村へ差入  
タルヲ見レハ全ク該山地ハ上告村ノ所屬ナルヲ泉郡箕形村於テ明認スル確證ナリシテ原  
裁判ハ之ヲ無効トスルノミナラス「上告第八號證ハ大庄屋兩人カ職務上ヲ以取調タル公  
正ノ繪圖ナルモ被上告村へ對シテハ無効ナリ」ト辯明スルニ至テハ上告者ノ尤不當ナリ  
トスル所ナリ凡公正ノ簿冊ハ官民ニ對シ効權ヲ有スヘシ一方ニ向テ効ヲ有シ一方ニ向テ  
効ナキモノ、如キハ決シテ公正ノ簿冊ト言フヲ得ス然ルチ原裁判ハ上告第八號證ヲシテ  
公正ナリト辯明シ又翻テ其効ナシト言フ何ソ矛盾ノ太クシキヤ加フルニ其末文「本訴ノ  
論地ハ果シテ南郡内ニアルヤ否ヲ明知シ得ヘカラサルニ於テチヤ」トアリ實ニ何ノ事ソ  
ヤ該圖中上告村ヲ記シタル東方ニ於テ南郡部内ニ山地ヲ登載アリ之則本訴論山ナリ其所

以ハ上告村ノ東方ニ位スル山地ハ本訴論山ヲ除キ他ニ一ツノ山地モ無之ヲ以テナリ然ル  
ニ原裁判所ハ之ヲモ審糺セスシテ前掲ノ如キ辯明ヲ附セラレタルハ審理不盡ト言ハサル  
ヲ得ス

第五條

原判文第四項ヲ約言セハ上告第九號證ハ其文中本高ト記載シアルヲ以テ字東山ノ内ニアラ  
ス故ニ順禮塚ナリトノ陳述ハ無證ナリトノ趣旨ニ外ナラス「本高」ノ二字ニ依着拘泥シテ  
解釋ヲ爲スルハ寔ニ爾リ然リト雖モ凡公私般ノ諸證書ハ僉事實ノ反影ナルハ宜シク其  
事實如何ヲ考察セサルヘカラス又證書ヲ解釋スルニハ其地方ノ習慣ニ從フヘキナリ  
十年司法省第七十五號布達御參照ヲ冀フ今地方ノ習慣ヲ言フキハ假令山年貢タリトモ之ヲ高ト唱ス蓋シ該  
證中「本高」ノ二字ヲ記入セシモ全ク平素口ニ唱フル處ヲ寫出シタルモノニシテ文化開明  
ノ今日ト雖モ尙山稅米ヲ山高ト唱シ會テ本高ノ内外ヲ論スル者ナシ況ンヤ該證ノ成立タ  
ル無智文盲ノ年度ニ於テチヤ又之レチ事實ニ徵スルキハ該證ニ記シタル山地及畑地ハ本  
訴論山ノ一部分ニシテ第二番塚ノアル所ナリ所有者和田市三郎ハ該所ニ生立スル樹木ヲ  
伐取シ之ヲ人ニ賣拂又該所へ松苗植付培養ヲ爲セリ(七月廿五日附追伸書第四)而シテ之  
レカ反影ハ則上告第九號證ナレハ字東山ノ内(則本訴論山ノ一部分ナリ)チ上告村民市右衛門カ買得  
シタル證書ナルヲ著明ナラスヤ又上告村所屬中田畑變シテ山成トナリタル箇所一ツモ  
アルヲナシ然ルニ原裁判ハ該證中「本高」ノ二字ニ依着シ其證ノ意思如何并地方ノ習慣  
ヲモ審糺セス(字東山ナル草山内ニアラサルヤ明カナリ)ト判定セラレシハ不法ナ

附告第六號證ハ本文記スル所ノ畑地ヲ被上告村民へ小作セシメタル證書ニシテ其詳細ハ明治十五年七月廿五日付原裁判所へノ追伸書第二章第五項及第四章第三項ニ辯明シアルヲ以テ茲ニ省略ス

第六條 明治十五年四月二十四日退伸

原判文第四項ニ於テ上告第九號證ハ本件論山ノ證據トナスヲ得サルカ故ニ從テ上告第六號證及第十號證(裁判書ニハ第十一號證ト)共ニ本件論山ノ證據トナスヲ得サルモノトモラレタレモ上告者カ豫テ主唱スル字順禮塚ナリト云證ハ上告第六號證及第九號證ニ據テ明ナリ然ルニ被上告者ハ其第十三號證ヲ舉テ之ヲ否スト云フモ上告者ハ又之ニ對シ其第十號證ノ在ルアレハ到底被上告者ノ第二番塚ト云フ處ハ上告者ノ主張スル如ク順禮塚ナリトハ分明ナリ果ノ此順禮塚ナルヲ知了セハ上告第九號證ニ記載アル本高ノ二字ハ上告狀第五條ニ上伸スル如ク地方ノ習慣語ヲ誤テ該證ニ登記シタルヲ自ラ瞭然タルヘシ何トナレハ本件爭フ所ノ山地ハ(上告第一號檢地帳ニハ「右ノ外」ト記載シアル後行ニ登記シアリ)從前小物成山ナレハ其山地内ニ決シテ本高地ノアルヘキ謂レナキヲ以テナリ然ルニ原裁判所カ蓋シ田畑カ變シテ山成トナリタルモノナルヘシトノ割註ヲ加ヘラレタルニ至ツテハ實ニ臆測不當ノ甚シキモノナリ如何トナレハ從前小物成秣草山地ノ如人生ノ繁殖スルニ隨ヒ自然ニ開懇シテ田畑トナスハ古來開國ノ基礎ナレハ當然ノコトナレモ肥腴セラル本高ノ田畑ヲ故ラコ山成或草山トナス如キハ一モ其例ナキノミナラス自ラ如斯不利ノ

所爲チナス者ナキハ理ノ最モ觀易キモノナレハナリ

第七條

原判文第五項ヲ約言セハ上告第十二號第十三號證ハ上告第二號證ニ據リ隣村ノ者共カ本訴論山ハ上告村ノ所轄ナリト思量シタルニ原因ストノ趣旨ニ外ナラス原裁判第二項ハ第二號證第二項末段ノ文辭ニ依着シテ山地ニ關セサル契約ノ如ク辯明ヲ附セラレ今茲ニ於テ第二號證アルヲ以テ隣村ハ本訴論山ヲシテ上告村ノ所轄ナリト公認セリト辯明ス前後矛盾ノ太シキ一ツニ何ソ茲ニ至ルヤ凡詞訟ヲ斷スルニハ始終同一ナラサルヘカラス原裁判ハ前キニ第二號證ヲシテ山地ニ關セサル契約ナリト言ヒ後ニハ同證ヲシテ山地ニ關スルモノナリトス斯ノ如キヲ聽斷ノ定規ニ乖キタルト言ハスシテ將何チカ言フヤ  
又隣村中村包近村ニ於テ上告第十一十二號證ノ圖面ヲ調製セシ所以ハ上告村カ古來論山自由ニ進退シ來リタル事跡ヲ目撃シタルニヨリ之ヲ製シタルモノニテ決シテ上告第二號證ヲ認メテ之レヲ調製セシニ非ス其理由ハ上告第二號證ハ上告村ノ貴重ナル書類ニシテ常ニ之ヲ秘藏スル證書ナレハ他村ノ者ノ得テ之ヲ知ルヘキ道理ナケレハナリ故ニ右二證ニヨルモハ上告村ニ於テ古來論山ヲ自由ニ進退シ來リタル事蹟ヲ隣村ノ者等カ常ニ目撃シタリシ事顯然掩フヘカラスモノナリ加フルニ目下該圖面ニ據リ改正地券(三田村境ト記入シ)モ下附ナリタルモノナレハ地方廳ニ於テモ亦論山ハ上告村ノ山地ナリト明認スル所ナリ然レモ尙或ハ中村包近村カ上告第二號證ノ在ルニ據テ之ヲ調製セシモノナルヤモ知ルヘカラストセンカ然レハ原終審廳へ右兩村ノ者ヲ引合トシ召喚シ審問セサレハ其事實明瞭

ナラサルヘシ論シテ茲ニ至レハ中村包近ノ兩村ハ本件ニ缺クヘカラサル引合村ナレハ之ヲ召喚審問シ其申立ニ據リ至當ノ裁判ヲナスヘキ筋合ナルニ強テ上告者ノ證據書ヲ排斥センカ爲メ當然爲スヘキ職務ヲサスシテ如斯判定ヲ付セラレタルハ聽斷ノ定規ニ乖キタルモノナリ(此頃明治十五年四月廿四日追申ニ係ル)

第八條

原判文第六項ヲ約シテ四項ト爲シ逐項其不當ヲ駁セン

第一項第一番及第五番ノ塚ハ郡界ノ標的ナリトハ上告者ノ自供ナリ此自供ニ徴シ推測スルモハ第二番塚モ亦峯通リコアルモノナレハ郡界ノ爲築造シタル塚ナルヲ知リ得ヘシト此辯明ニ據レハ上告者カ郡界ノ標示ナリト云フ第一番及第五番ノ塚モ亦峯通リニ築設アルモノ、如クナレハ決テ然ラス該二個ノ塚ハ論所見取眞影ノ如ク畑地ノ傍ラニアリ所謂平地ニ小立ヲ爲シタルモノニテ其現形ヲ一目スレハ忽其境界標的ノ爲メ昔時故ラニ築設シタルヲ知得ヘキナリ第二番塚ノ如キハ全ク其形ヲ異コシ極テ宏大ナルノミナラス其位地又異ナリ(第一番及五番塚ハ畑地ノ傍ニアリ之ニ)加ルニ第三第四ノ塚ハ全ク其痕跡モナク唯其塚ナリト云フ處ハ山頂ナルヲ以テ天然地形ノ高キ場所ナリ然ルチ原裁判所ハ第一乃至第五ノ塚ハ皆ナ峯コアル如ク辯明セシハ不當ノ太クシキモノナリ奈何トナレハ其第一及第三第四第五ノ塚カ山峯ニアレハ格別ナレハ前述ノ如ク第一第五ノ塚ハ平坦ノ地ニアリ又第三第四ハ山頂ナルモ其形迹ナク獨リ第二番塚カ山峯ニアル逆郡界ノ標示ナリト推測ヲ爲ス能ハサルハ勿論ナレハナリ

第二項第三第四ノ塚ハ馬背ノ如キ山頂ニ在テ云々始審法官カ辯明セシト合セテ荒木廉造カ測量圖ニ朱ヲ以テ圈點ヲ加ヘシヲ以テ其形迹ナキモノニアラスト

之レ實ニ臆測ト云フヘシ固ト上告者カ控訴ヲ爲シタル要領ハ始審裁判所於テ第三第四ノ塚アル如ク認定セラレシハ無證無痕跡ナルヲ以親シク實地臨檢之上其塚ノ現ニ之ナキヲ看破セラレ而シテ至當ノ覆審アラソク請ヒシニ(控訴狀第五條御參看)之ヲ採用セサルノミナラ

ス却テ上告者カ始審裁判數條中主トシテ不服ヲ鳴ラシタル辯明ヲ執テ終審裁判ノ要具トセラレシハ最モ不法ナリ又荒木廉造ハ何人ソヤ原被告(上告村被)ヨリ雇入レタル測量者ナレハ其測量セシキハ唯原被告カ言フカマコマニ手記スルモノニシテ決シテ原被告ノ申

立チ左右シ得ヘキ人ニアラスト例ヘハ塚アリト言ヘハ則塚ヲ記シ木アリト云ヘハ則木ヲ記スルノ類若シ之レニ反シ右廉造カ該塚(第三)ノ現形ナキヲ以テ之ヲ手記セサレハ該圖ニ於テ被上告村カ塚アリト言フ場所ハ何ノ所ナルヤチ知ル能ハス然ルモ該圖ハ何ノ用テモ爲サ、ルヘシ故ニ被上告村ノ申立チ表明スル爲メ該圖ヘ圈點ヲ加ヘシヤ明カナリ然ル

チ原裁判所ハ之ヲ以テ第三第四ノ塚ノ現存スル證ナリト辯明セシハ不法ナリ

第三項測量圖中第二十七番ヨリ第五十番迄ノ所ハ峯通リヲ以中村包近村ノ境界トシ兩村於テ異議ナキヲ見レハ第十三番ヨリ第二十七番ノ間モ亦峰通リヲ郡界ナリト推知スト

中村包近村カ異議ナキモノハ本訴訟地ヲシテ南郡三田村(則上)ノ所屬地ナリト公認(上)第二號及第十(三號證ノ如ク)セルヲ以テ所謂上告村ト兩村トノ村界ニ於テ異議ナキモノナリ然ルチ原裁判ハ其郡界ニ於テ異議ナキモノ、如ク辯明セシハ不當ナル而已ナラス該圖中第五十番

ヨリ二十七番ノ間ハ往々畑地ト畦畔ヲ以境界トセルハ始審廳ヨリ下附セラレタル着色繪圖ニ據ルモ判明ナルニ原裁判所ハ僉之ヲ山峯ノ如ク誤認シ前掲ノ如ク辯明セシハ粗漏モ亦太クシ加フルニ原被告村俱ニ異議ナキ第一番ヨリ第二十七番(測量)マテノ間ハ僉十田畑ノ畦畔或ハ山地ノ小徑ヲ以郡界則原被告ノ村界タリ又第二十七番ヨリ五十番ノ間ハ往々畑地ノ畦畔ヲ以村界タルニモ關ハラス原裁判所ハ獨リ第十三番ヨリ第二十七番迄ハ山峯ヲ以郡界ナリト推測スト判定セラレシハ抑何ノ原素ニ據ツテ然ルカ更ニ其推測ノ因テ起リシ理由アルコトナシ以上辨述スル如ク原裁判ノ事實ニ背馳スルモノハ要スルニ上告者カ數回實地臨檢ノ儀ヲ請願セシニ之レヲ許サレスシテ座上ノ臆測以裁判セラレシ故ナラニ實ニ傷マシシ悲ムヘキ事ナリ

第四項原告ハ論所悉皆テ原告村ノ所轄ナリ云々田畔又ハ池堤ヲ迂曲シテ錯雜ニ免レヌ豈此ノ如キノ迂曲シテ標的ナキノ處ヲ以一村ノ境界ト見認ムルヲ得ンヤ况ンヤ一郡ノ境界ニ於テナヤ

此辯明ニ據リ倍々原裁判ノ粗漏ナルヲ知ルヘシ奈何トナレハ上告者ハ始審裁判以來本訴ハ原被告三ヶ村ノ境界ヲ相争フ如クナレハ其實南泉ノ郡界ヲ相争フモノナレハ兩郡界判別セハ原被告三ヶ村境界モ自ラ判明スレハナリト概論セシニ止マリ未タ其何處ヨリ何ノ處マテハ郡界ナリト詳論セシコトナシ故ニ原裁判所ハ前掲ノ如キ二様ノ辯明セラルト雖モ凡訟ヲ斷スルニハ先ツ對審人雙方ノ主權說ヲ定メ而シテ其同說ノ是非正邪ヲ判定スヘキハ定規ナリ況ンヤ本訴ノ如キ郡界ニ關スル重大事件ナレハ鄭重ニ鄭重ヲ加ヘキ筈ナル

ニ上告者ノ主權說(則山地ノ何處ヨリ何處マテ)ヲモ聞カスシテ裁判セラレタルハ粗漏ナリ

又國郡村ノ境界ニ於ケル其大小ノ差違アレハ決シテ棋盤ノ如キ直線ノ境界アルコトアラヌシテ悉ク田畔池堤山麓等ヲ迂回シテ境界トナスハ僻地ノ實地圖面等ニ據テ視レハ分明ナルヘシ今一步ヲ退キ假リニ判旨ノ如ク田畔池堤ヲ迂曲シタル境界アラサルモノトシテ論セシニ既ニ本件ノ裁判セラレタル境界ト雖モ亦田畔池堤ヲ迂曲セサレハ或ハ山池ヲ中斷シ或ハ田畑ノ中間ヲ境界トセサルヘカラス豈如斯不都合ノ境界アラシヤ是其一ヲ知テ二ヲ知ラサルノ裁判ト云ヘシ又上告者カ上告狀末項ニ於テ其何レノ處ヨリ何ノ處マテト詳細指示辯論セシコトナシト申立ル理由ハ上告者ハ豫テ實地檢査ヲ請願シタルカ故ニ實地臨檢ノ際詳細ニ之ヲ揭示シテ后論辯ナスヘキ筈ナリシ然ルニ實地檢査ヲモナサスシテ前文ノ如ク判セラレタルハ審理不盡ナリ(此項明治十五年四月廿四日追申)

被上告者ハ上告要旨ノ不當ナル旨ヲ陳述シテ原裁判ヲ辯護セリ

仍テ辯明及判決ヲ與フルコト左ノ如シ

辯明

第一條

上告人於テ上告要領第八條第二項ノ如ク申立ルニヨリ之ヲ審按スルニ本訴上告者カ始審裁判ニ服セスシテ原裁判所ニ控訴スルニ當リ始審判文於テ被上告者カ指示スル第三四番ノ塚ハ實際之アル如ク言渡サレタルモ無證無痕迹ナルニヨリ實地臨見ヲ乞フシトハ控訴

狀第五條ハ勿論其他ノ退申書等ニ數度請願シタリシ所ナレハ原裁判官カ他ノ證據ニヨリ判決スレハ格別荷モ然ラスシテ右塚ヲ以テ判決ノ資料トナスルハ實地臨見ヲ遂ケ其有無ヲ定ムヘキハ勿論ナリトス如何トナレハ右ノ如キ控訴者ニ對シ始審裁判官ノ言渡ス所ヲ以テ判決ヲ爲スルハ控訴者カ控訴シタル旨趣ニ對シ毫モ其詮ナカルヘキヲ以テナリ而シテ彼ノ測量者カ測量繪圖ニ圈點ヲ施シタル事ノ如キ唯圈點アルノミニテ一モ其意思ノ見ルヘキモノアラサレハ之ヲ審究セサル限ハ果シテ其形迹アルヲ認メタル爲メ記シタル事柄ナルヤ或ハ被上告者カ指示スル箇所ヲ示サン爲メ爲シタルモノナルヤチ知ルニ由ナキモノナリ然ルニ原裁判所於テ本件ニ對スル原被告ノ證據書類ハ總テ證據トスルニ足ラス獨リ土地ノ形勢ト被上告者カ指示スル塚ハ信スヘキモノアルニヨリ之ニヨリ裁決ストノ旨趣ニ判決シナカラ其塚(即第二番第)ノ有無ヲ判スルニ於テ(始審裁判官カ實地臨檢ノ其第三番第四番ノ塚ハ馬背ノ如キ山頂ニ在テ其土質脆キニヨリ漸々邊緣缺潰シテ其形小ナリト雖モ往昔別段ニ築造セシ塚ナルハ明瞭ナリト判決シタルノミナラス大坂府租稅課出仕荒木廉造カ測量繪圖ニモ亦一番ヨリ五番マテノ塚ノ處ニ朱ヲ以テ圈點ヲ加ヘシハ全ク其形迹ナキニアラサルヲ推知シ得ヘシト言渡シタルハ審理ヲ盡サ、ル不當ノ裁判ナリトス

第二條

上告人於テ同條第三項ノ如ク申立ルニヨリ之ヲ審按スルニ本訴上告者ノ論旨タル論地ノ内南一半(即測量圖廿七番ヨリ五十番ニ至ル部分)ハ中村領ト包近村領トノ以東ニ於テ上

告村領(即南郡三田村ノ所屬地)アリトノ事柄ナレハ右兩村於テ論地トノ境界ニ對シ異議ヲ唱ヘサリシトテ夫ヲ以テ本訴原被告間ノ境界ヲ定メ得ヘキニ非ス如何トナレハ右兩村ノ異議ナキ所以ハ自村ノ境界ヲ妨害セサルニヨリ異議ナキモノニシテ泉南兩郡ノ境界タルニ於テ異議ナシト云ヒシニアラサレハ本訴論地ノ境界ヲ定ムルニハ毫モ影響ヲ爲サ、ルノミナラス長ジャ兩村於テ郡界ヲ證明シタル事アリト假定スルモ郡界タルノ證據ヲ掲ケサル限ハ以テ依據トスルニ足ラサルヘケレハナリ然ルニ原裁判所於テ(第廿七番ヨリ第五十番マテノ處ハ中村及ヒ包近村ト本訴論地トノ境界ニシテ該兩村ニ於テモ亦測量繪圖ノ通り更ニ異議ナシ然ルヲ以テ境界未定ノ處ハ纔カニ第十三番ヨリ第廿七番ノ間ニアルノミ)ト言渡シテ測量圖第廿七番ヨリ第五十番ニ至ルノ箇所ハ境界自ラ定マルモノ、如ク判決シ尙ホ第十三番ヨリ第五十番ニ至ルノ間ニ畑地アルヲ始審裁判所ヨリ下附シタル色分ケ圖面ノ如クニシテ該所ハ僉ナ峯通リニアリトハ上告者ハ勿論被上告者ノ陳述書中ニモ見サル所ナルニ原判官カ實地ハ勿論他ノ證明ヲ得タル事モナクシテ(第五十番ヨリ第廿七番マテノ所ハ皆峰通リヲ以テ境界トセリ又第二番ノ塚モ云々其峰通ニアルモノ)ト言渡シタルハ不當ノ裁判ナリトス

第三條

上告人ニ於テ同條第四項ノ如ク申立ルニヨリ之ヲ審按スルニ上告人カ原裁判所審理中確乎タル申立ヲナサ、リシハ不都合ナルモ裁判官ニ於テ之ヲ尋問セサルモ亦不都合ナリトス如何トナレハ本訴境界論ノ如キ上告者於テ論所悉皆チ上告村ノ所轄ナリト云フニアラ

スト申立ツレハ其何處ヨリ何ノ處マテカ上告村ノ所轄トスルヤヲ定メシメサレハ論所ト論外地トノ區分詳ラカナラサルノミナラス前條ノ如ク實地臨見願ヲモ差出シアレハ上告者ハ實地臨見ノ際申立ヘキ筈ナリシト云フヲ得ルニ至ルヘキヲ以テナリ然ルニ原裁判所於テ原告ハ論所悉皆ヲ原告村ノ所轄ナリト云ニアラスト申立ツルモノナレハ原告ノ境界ハ論所ノ内何レノ處ナルヤ更ニ其境界ナリト思量スヘキ標的ナシ若シ又論山ハ悉皆原告村ノ所轄ナリトスルキハ其境界ハ田畔又ハ池堤ヲ迂曲シテ錯雜ヲ免レス云々ト上告者カ右二箇ノ中何レノ申立ヲ爲シタリシヤ詳カナラサルモノ、如ク裁決シタルハ不適當ノ裁判ナリトス

第四條

右ノ外上告者於テ申立ル條項數多ナルモ原被告ノ提供スル證據書類ニ付テノ辯論ハ前條々ノ理由ヲ推究シタル上全體ニ通觀セサル限ハ論定シカタキ事ニ有之且自余ノ論辯ハ本訴上必要ト認メサルニヨリ一々辯明ヲ與ヘス

判決

前條々ノ理由ナルニヨリ大坂上等裁判所カ本訴ニ對シ言渡シタル裁判ヲ破毀シ名古屋控訴裁判所ヘ移スニヨリ同裁判所ノ裁判ヲ受クヘキモノナリ

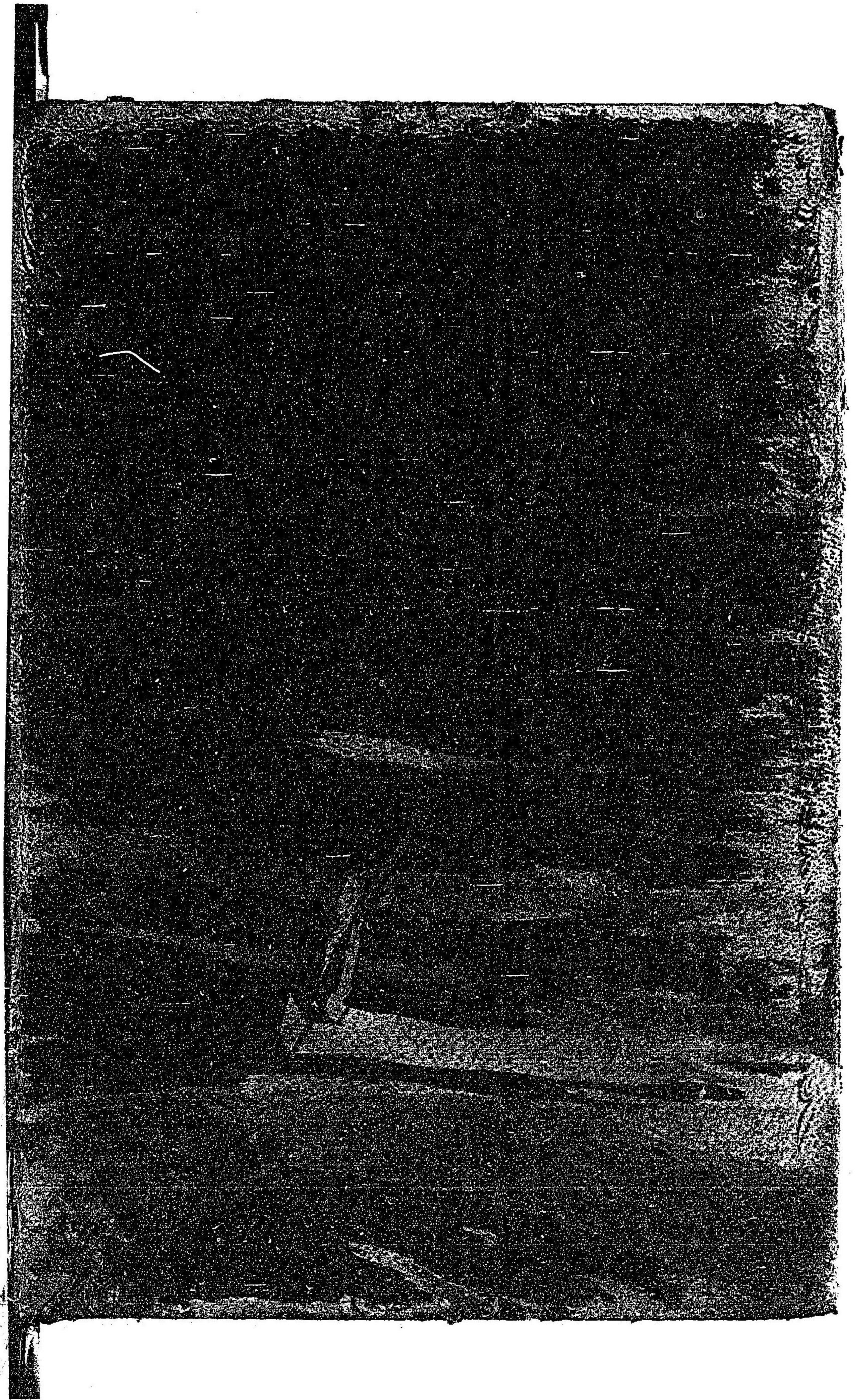
但上告入費ハ被上告者ノ負擔タルヘシ



147  
/

明治十七年三月二十四日出版

定價壹圓四拾錢



1A.7  
1

東泉圖書

四 冊	一 號	二 架	二 九 函	屬	類
--------	--------	--------	-------------	---	---

